アナワクの秘密の教義

LA DOCTRINA SECRETA DE ANAHUAC

サマエル・アウン・ベオール

第１章
天の七つの洞穴

1　偉大なる原因のために、すばらしいものを転載して本書を強調するまでもない。

2　大名著『メキシコ史』（ドン・マリオ・ロソ・デ・ルナ著『死を殺す書』126頁～134頁参照）にフライ・ディエゴ・ドゥランの明記した、ある物語に声高にふれたい。

3　無関係な羽飾りで着飾るのは好まないので、各段落を引用符“　”で囲む。

＊ここでは１字下げています。以下、学研『ムー』1982年７月号「ナワリズムの秘法」（文／ミゲル・ネリ）参照のこと。

4　フライ・ディエゴ・ドゥランの著した『西インド諸島とヌエバエスパーニャ（メキシコ）の歴史』 ― スペインによる大王国の植民地化直後に書かれた見事な書物 ― によれば、モクテスマ王が富と栄光の全盛期にあるとき神にまでなったものかと、うぬぼれていた。王国の魔術師や神官は下等な欲望をすべて克服していたので、王よりもはるかに賢く、豊かであった。彼らは王にこう言わねばならなかった。「おー、われらが王にして主よ。陛下の王命に皆が服従するからといって、うぬぼれてはなりませぬ。陛下が、死んでしまったと思っている陛下の祖先、王たちは、太陽の光がいかなるホタルの光をもしのぐように、あちらの世界で陛下をしのいでいます... 」。

5　するとモクテスマ王は自尊心よりもずっと強い好奇心にうながされ、パカリタンボの七つの洞穴よりもっと遠い所にある祖先の地「聖なる暁の館」に、贈り物をたずさえた見事な使節を送ることに決めた。アステカ民族発祥の地だと言われるそこは古い伝説に登場し、ずいぶんとほめたたえられている。だが、まったくへんぴなその神秘の場所に無事に到達する手段と、実際もう誰も知るよしもない真の道とを見つけるのは困難な課題だった。

6　そこで王は顧問の長老トラカエレルを面前に出頭させて、こう言った。

7　「おー、トラカエレルよ、もっとも勇壮な長たちからなる軍を召集し、じゅうぶんに盛装させ、偉大なるウィチロポチトリがその栄光のためわれらにたまわった大部分の財宝をもって支度させて派遣し、祖先の厳かな足もとに恭しく財宝を奉献しに行かせることに決めたのは、知っているだろう。われらの神ウィチロポチトリの母上ご自身がまだ生きておられるとの確かな知らせを聞いた。その子孫であるわれらの手と頭で勝ち取っ

た、この偉大な繁栄を知れば、母上もきっとお喜びになるであろう」。

8　トラカエレルは答えた。

9　「力強き主よ。今のようにお話しになる際、陛下の真の心は世俗的な商いや、大変厳かな心からの陛下ご自身の決心に動かされたのではなく、どなたか崇高な神が陛下をそのように突き動かして、お望みのような前代未聞の冒険をさせんとしておられるに違いありませぬ。しかし忘れてはなりません。陛下の断固としてお決めになられたことは、単なる力や器用さや勇気でなせるわざではありません。また武器や利口な政治手段で解決できるものでもありません。そのような場所に到達しうる方法や道をあらかじめ術で発見できる、魔法使いや魔女（ブルハ）の力を借りるよりすべがありませぬ。おー、力強き王者よ、ご存知でしょう。われらの古い言いつたえにもあるように、その道は遠い昔からすでに断ち切られており、こちら側を向いたその部分は広大な茂みでもうふさがり、とうてい勝ち目のない怪物の住む一面の荒れ地、砂丘、底なし沼、うっそうと茂ったアシ原は、どんな向こう見ずな人でも命を失うでしょう。ですから主よ、無理難題に対する唯一の手だてとして、私の申し上げるその賢い人々を捜しなさい。彼らなら魔法を使って、どうにもならない人間全員をおそらく救い、あちらまで行って、それから、その地に関するはっきりした知らせをあなたにもたらすことができるからです。その地については次のように確かに言われています。メキシコの湖まで長旅でやって来て、燃えるイバラやサボテンの奇跡を目にする以前、われらの祖父母、祖先がそこで暮らしていたころ、摩訶不思議で快適な館がひとつあり、平和と安らぎを享受していて、誰もがもっともすばらしい夢のそれよりも幸せに、老いも病も疲れも苦痛も知らず、長い長い年月を生きていました。つまり、ここでわれらの被る肉体的要求に縛られなかったのです。しかし、そんな楽園から出て、われらの祖先がここに来てからというもの、何もかも刺とハマビシになりました。祖先は草に刺され、石に傷つけられ、道の木は固く、とげだらけになり、実を結ばなくなりました。あそこに戻れないよう、何もかも祖先に敵対して共謀しました。そのようにしてこのわれらの世界で使命を果たすようになったのです」。

10　モクテスマは賢者トラカエレルのよき助言を聞き、クアウコアトルという宮廷の歴史学者のことを思い出した。クアウコアトルとは文字どおりには「智恵の竜」という意味の、右道のアデプトつまり白魔術師の不変の名で、年齢不詳の尊敬すべき長老である。すぐにモクテスマは隠者クアウコアトルの住む山の閑居に着くと、うやうやしくあいさつした後、次のように言った。「わが父よ、この上なく気高い長老、わが民族の栄光。あなた様に会って、ぜひ聞きたかった。われらの尊敬すべき祖先の住むという天の七つの洞穴の話およびあの聖地の所在地について、あなた様の生きた聖なる日々に何か記憶はありませんか。われらの神ウィチロポチトリが暮らすその聖地から、われらの父と母はここまでやって来たのです」。

11　「力強きモクテスマよ ── 長老は重々しく答えた ── この、あなたの下僕である私が

おたずねの件について知っているのは、われらの祖先は、純粋・白さと同義語のアストランと呼ばれるあの口では言えない幸福な場所に確かに住んでいたということです。そこには今でも湖の中央に大きな丘がひとつあり、『クルアカン』と呼ばれ、それは曲がりくねった丘または蛇の丘という意味です。まさしくその丘に洞穴があり、ここに来る前、われらの祖先は長年そこに住んでいました。そこには『メジンズ』MEDJINS と『アステカ族』の名のもとに大変な憩いと平安がありました。そこではありとあらゆる大量のカモ、サギ、カワウ、ナンベイオオバン、バン、たくさんの種類の美しい魚、赤と黄色の頭をした小鳥たちが美しさを添える果樹林のさわやかな涼しさ、静けさ、ヤナギ、サビーナ、巨大なハンノキに囲まれた泉に恵まれていました。あの人々はカヌーで移動し、うねを作り、トウモロコシ、チリトウガラシ、トマト、ナウトリス〔nahutlis 未詳〕、インゲンマメ、その他われらがここで食べている穀類の種をまいていて、そこからそれらを持ってきましたが、他の多くのものは失われてしまいました。しかし、そこからこの大陸に来て、きわめて快適な場所が見えなくなった後、何もかも、本当に何もかもが祖先に歯向かいました。草にかみ切られ、石に傷つけられ、野はハマビシだらけになり、通れず、そこにすわって休むこともできないような大きなやぶとサンザシに出くわしました。そのうえ、どこもかしこもマムシ、ガラガラヘビ、その他の毒虫だらけなのに気づきました。地面の取りあいをしているジャガー、ライオンをはじめとする猛獣はうじゃうじゃとし、祖先を痛めつけていました。祖先が言い残したのはそれだけであり、われらの歴史をより所としてあなたに言えるのは以上です。おー、力強き主よ」。

12　トラカエレルもあの同じ話をしていたので、それは事実だと王は長老に答えた。それゆえ王は、見つけられるだけの王国全土の呪術師や魔法使いを捜し出して、呼び集めに行くようただちに命じた。このようにして、なんと60人におよぶ高齢の魔術通がモクテスマの前に連れてこられた。全員が集まるや王はこう言った。

13　「父よ、母よ、長老たちよ、昔のメキシコ人の故郷の所在地、その土地の様子、住人、われらの神ウィチロポチトリの母上の消息を正確に知ることにした。それゆえ、できるだけうまくあそこまで行って、短時間でこちらへ戻ってくるよう準備せよ。

14　さらに、ありとあらゆる大量の綿布、豪華な衣装、黄金ときわめて高価な宝石、たくさんのカカオ、綿織物、テオナカストリ〔要検討 teonacaztli〕、黒バニラのバラ〔要検討 rosas de vainillas negras〕、きわめて美しい羽飾りを生産するよう命じる」。つまり至宝をあの魔法使いたちに渡し、細心の注意を払って任務を遂行するよう、手当てと道中のたくさんの食べ物も与えた。

15　こうして出発した魔法使いたちは、トゥーラにあるコアテペックという丘にたどり着くと、そんな作業で今でも利用されるあの軟膏をぬって身体を朱色にし、魔法円をつくり、祈念（召喚）を行った... 。

16　一度あの場所で悪魔 ― 彼らひとりひとりのなじみの「ダイモン」、各人特有の「ル

シファー」 ― の召喚を行うや、祖先の本当の故郷を教えてくれるよう嘆願した。あの呪文で無理じいされた悪魔は魔法使いたちを鳥や猛獣、ライオン、ジャガー、ジャッカル、恐ろしいネコに変身させ、祖先の住む場所に全員を運んだ。

17　中央にクルアカンの丘のある大きな湖にそのようにして着いた彼らは、もう岸に立つと、もとの人間の姿にもどった。物語によれば、ある釣り人たちを向こう岸に目にして彼らを呼んだ。土地の人々はカヌーでやって来て、どこから来てどこへ行くのかと尋ねた。すると魔法使いたちはこう答えた。「われらはメキシコの大王モクテスマの家来で、祖先の故郷を捜すよう大王に命じられてやって来たのです」。

18　土地の人々は、いかなる神を崇拝しているのか尋ねると、旅人たちは答えた。

19　「偉大なるウィチロポチトリを崇拝し、モクテスマもその顧問トラカエレルもウィチロポチトリの母上を捜すようわれらに命じています。母上とその家族全員に豪華な贈り物を持ってきていますから」。

20　長老は答えた。

21　「ようこそ、おいで下さいました。こちらへどうぞお越し下さい」。

22　すぐに彼らはカヌーでやって来て、旅人たちをそれに乗せ、クルアカンの丘に移動した。その丘はとても細かい砂でできているという。旅人たちの足が砂の中に沈んで、ほとんど進めなくなるほどだったからである。そのようにして老人が丘のふもとに住む小さな家にようやくたどり着くと、旅人たちは深々とその老人にお辞儀して、こう言った。

23　「尊敬すべきマスターよ、あなたのしもべであるわれらは、ここに、あなたの言葉が守られ、あなたの防護服が尊ばれる場所にいます」。

24　老人は深い愛をいだいて答えた。

25　「ようこそ、わが子たち。あなたがたをここに派遣したのは誰ですか。モクテスマとかトラカエレルとかクアウコアトルというのは誰ですか。そんな名前はここでは聞いたことがありません。この地の支配者たちはテサカテトル、アカクトリ、テノチ、ビクトンと呼ばれ、彼らが七人の主、無数の人々の長なのです。そのうえ偉大なるウィチロポチトリの四人の驚くべき守役、指導教師がいて、そのうちの二人はクアウトロケツキとアクソロナと呼ばれます」。

26　旅人たちは驚いてこう言った。

27　「それらの名前はみな、われらには大昔の人間のように思えますし、われらの聖なる

儀式の中に彼らに関する記録がかろうじて残っている程度です。もうずいぶんと前に全員忘れ去られたり、亡くなったりしたからです」。

28　老人は耳を疑って叫んだ。

29　「おー、万物の創造主よ。ここに生きているのなら一体全体誰が彼らを殺したのですか。というのはこの場所では誰も死なず、いつまでも生きるからです。それでは今生きているのは誰なのですか」。

30　使者たちは当惑して答えた。

31　「全員がもう非常に高齢の、ひ孫とやしゃご以外は生きていません。そのうちの一人がクアウコアトルというウィチロポチトリの大神官です」。

32　老人は使者たちと同じくらい驚いて、大声で叫んだ。

33　「ここから出て、あなたがたの中に行って以来、来る日も来る日も聖なる母がやるせなく待ちつづけるときに、その人間がまだ帰って来ない ― そんなことがあり得るのですか」。

34　これにより老人は丘の王宮に向けて出発するよう命令を出した。使節団は運んできた贈り物をかついで、あとについて行こうとしたが、ほとんど一歩も歩けず、むしろ沼地を歩くようにますます砂の中に沈んでいった。老人はほとんど地面に触れていないかのように、さっさと歩いていたのに対し、あまりにものろくて重く歩けない一行を見て優しく尋ねた。

35　「どうかしましたか。おー、メキシコ人たち。なぜそんなにのろく、もたもたしているのです？　あなたがたの土地では何を食べたら、そんなふうになるのですか」。

36　苦しむ一行はこう答えた。「そこで成長する動物で食べられるものなら何でも食べますし、リュウゼツラン酒のプルケを飲みます」。それに対し老人は憐れんで答えた。

37　「燃えるような激情・情欲と同じくらい、そういう飲食物が、わが子であるあなた方をそのように不器用に重くするのです。祖先の住んでいる場所を見えなくして、結局は早死にさせるのです。そのうえ分かって下さい、そこに携えている財宝は皆ここでは役に立ちません。ここでは、ただ貧しさと飾り気のなさで囲まれるだけなのです」。

38　長老はそう言うと、怪力で全員の荷物をつかんで軽々と丘の斜面を登っていった...。

39　ドン・マリオ・ロソ・デ・ルナの解説する、P.ドゥランのその作品の第27章。意味の

わかりにくい所をやさしく言い換えたり詳しく述べたりしてここで説明して ― ドン・マリオは言う ― 後で使節団とウィチロポチトリの母上との出会いに関する物語にし、以下に抜粋する。

40　頂上に着くと、汚らしく黒っぽい、地獄の底からはい上がったようななりをした一人の老女が出てきた。彼女は涙ながらにメキシコ人たちに言った。

41　「私の息子たち、よく来てくれました。おまえたちの神であり私の息子であるウィチロポチトリがこの場所から行ってしまってからというもの、私は悲しみのあまり涙を流しつづけ、あの子の帰りを待ちわびています。あの日以来、私は顔を洗うこともなく、髪をとくこともなく、着物も着がえていません。私のこの悲しみの喪服は息子がもどって来るまで続くでしょう」。

42　使者たちはまったく身なりを構わない老女を見ると、不安のあまりこう言った。

43　「ここにわれらを派遣したのは、あなたのしもべ、モクテスマ王とその補佐トラカエレル・シバコアトルです。わかってください、モクテスマ王はわれらの初代の王ではなく五代目の王であり、その祖先である前述の四人の王は大変な飢えと貧困に苦しみ、他の州に税金・貢ぎ物を納めました。しかし今ではもう都は自由と繁栄をおうかし、水路と陸路が開かれ、残りすべての最上位にあり、金銀、宝石の鉱脈が発見され、そのすべての中からあなた方に贈り物を持ってきています」。

44　ようやく涙がおさまると老女は使者たちに答えた。

45　「お便りをありがとう。でもあなた方に尋ねますが、私の息子がここから連れていった年寄りの守役（神官）たちは生きているのですか」。

46　「亡くなっています。守役たちを知りませんし、そのかすかな面影とほとんどぼやけた記憶以外、何も残っていません」。

47　すると老女は再び泣きながら尋ねた。

48　「守役たちを殺したのは誰ですか。ここにその仲間は全員生きているからです ― それから付け加えた ― 食べ物として持ってきたものは何ですか。あの食べ物があなた方を鈍くし、地面に縛りつけるのです。それがここまで登れなかった理由です」。

49　息子へのメッセージを託して、訪問客たちに言った。

50　「私の息子に伝えなさい。巡礼の時はすでに終わりました。すべての人民は飼いならされ、屈従させられているからです。同じように、やがては外国人がやってきて、すべ

ては奪い取られるでしょう。息子は下界での使命を果たした後、我々の膝元にもどってくるでしょう」。

51　そして息子のために綿布を一枚、牛に乗るときにつかむ腹綱〔要検討　bragero 脱腸帯、包帯〕 ── 法衣にまく純潔の絹ひも？ ── をひとつ渡して、別れを告げた。

52　さて使者たちが丘を降りかけていると、この年老いた女がもう一度話しかけた。

53　「ちょっとお待ちなさい。この土地では人は年をとることがありません。この私の年老いた召使いが見えますか。あなた方の場所に降りるとすぐ、いかに若返るかをごらんなさい」。

54　実際、この年老いた召使いは降りはじめ、そうして降りて行くほどどんどん若くなっていった。再び登りはじめたとたん前のような老人にもどった。

55　「ごらんなさい。息子たちよ。この丘は降りたり登ったりすることによって、自分の望むどんな年齢になることも可能です。動物の肉とプルケと物質の豊かさに甘んじてあなた方は大食し、心はすさみきっているので理解できないでしょう。

56　そんなあなた方のために、お返しとして、あの湖で取れるあらゆる種類の海鳥、魚、豆類、野菜、バラの花を送らせましょう。それにリュウゼツランの綿布と牛に乗るときにつかむ腹綱。ひとつはモクテスマのため、もうひとつはトラカエレルのため」。

57　使いの者たちは、中間の国を渡れるよう来たときと同じように身を朱色に塗り、前と同じ猛獣に変身し、コアテペックの丘に帰った。そこで理性あるもとの姿にもどり、宮廷まで歩いたが、彼らの中の少なくとも20人が足りないことに気づいた。なぜなら悪魔が８日で300レグア〔約1700km〕以上移動した仕事の報酬としておそらく生贄にしたからである。聖宗教裁判によるメキシコでの第一回火刑で語られたところによれば、きれいな顔を見たいというある老女の願いでグアテマラからあのもう一人の男性を三日で連れてきたように、悪魔はもっともっとその日数を短縮できたのだが... 。

58　モクテスマは使いの者たちの話に驚嘆し、トラカエレルを呼んで、祖先のあの聖地の肥沃さを二人でほめたたえた。木立のみずみずしさ、涼しさ、比類のない豊かさ。種まきはみな同時に行なわれ、熟すものがあるかと思えば、その一方でまた果実などが形を整えないものもあり、芽を出すものもあり、また咲くものもある。かの地には空腹や貧困は決して存在しないのである。そんな肥沃な土地を思い出すと、モクテスマ王とトラカエレルはなつかしさがこみあげ、さめざめと泣きはじめた。この下界で人間としての使命を果たした後、ある日かならず帰り住みたいと限りなく切望した。

59　以上が有名な神智学著述家ドン・マリオ・ロソ・デ・ルナの転載した、フライ・ディ

エゴ・ドゥランによるとても面白い物語である。

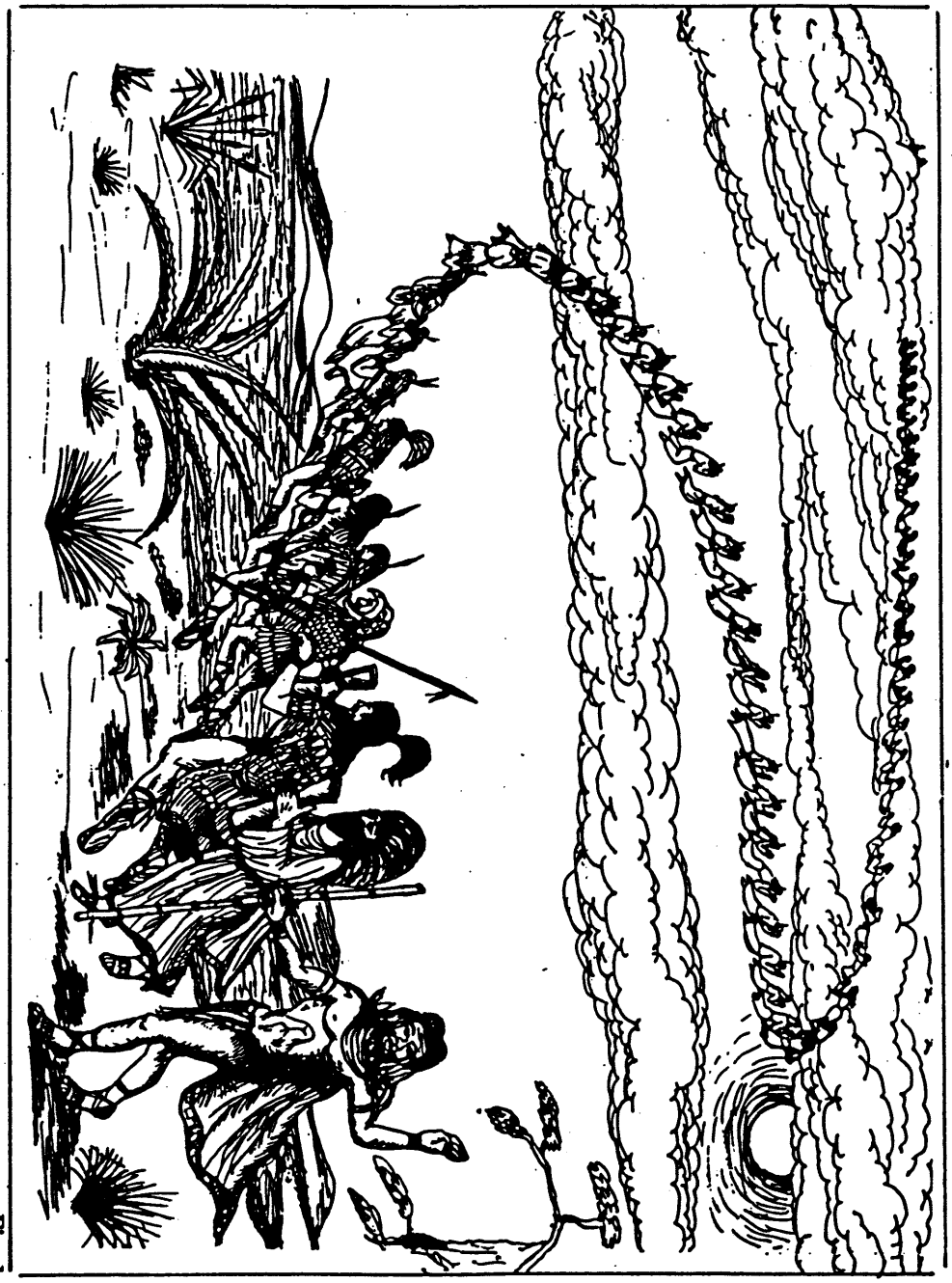


Fig. 1

第２章
ナワトルのルシファー

1　さてソクラテスの聖なるダイモン、パリ・ノートルダム大聖堂の有名な「ルシファー」について少しだけ、だが大変手際よく話そう。それはまさしく60人の長老に召喚されて、トゥーラにあるコアテペックの魔法の丘に疾風のごとく飛んで来た「ナワトルのソロトル XOLOTL」に他ならない。

2　驚嘆すべき魅惑的なトゥーラは実際、偉大なるセネカの黄金の詩が語るスカンジナビアの極北地方「トゥーレ」、言うなればこの世界の果てにすぎない。

3　「ソロトル」、「ケツァルコアトル」のなまなましい影、「ルシファー・プロメテウス」。それは光を運ぶもの、明けの明星、我々の礎石、隅石、賢者の石のなまなましい象徴であり、そこにあらゆる力の鍵がある。

4　メンデスの雄山羊の姿をときどき取る「ルシファー・ソロトル」は、性能力を象徴する。

5　ヤーベと出会ってシナイ山からもどったモーゼの額には、雄山羊の角の形をした二本の光り輝く光線が出ていたが、そのことから彼が性力を用いて作業したことがわかる。

6　契約の箱の四隅には雄山羊の角があったとヘブライ文字で書いてある。

7　それに関して預言者イザヤはこう記す（14：12－15）。

暁の子、明けの明星よ。
どうしてあなたは天から落ちたのか。
国々を打ち破った者よ。
どうしてあなたは地に切り倒されたのか。
あなたは心の中で言った。
「私は天に上ろう。
神の星々のはるか上に私の王座を上げ、
北の果てにある会合の山にすわろう。
密雲の頂に上り、
いと高き方のようになろう。」
しかし、あなたはよみに落とされ、
穴の底に落とされる。

8　教父であるシメオン、パコミウス、エウロギウス、アントニウス。彼らひとりひとりが、ある魅力的な乙女、きらきら光る角を生やしたある恐ろしい男性、黒いチュニックを

着た幼児の姿をした自分個人のルシファーを見ていたのである。

9　美しき悪魔「ルシファー・ソロトル」に関してエゼキエルの驚くべき歌（28：12－19）を聞こう。

あなたは全(まった)きものの典型であった。
知恵に満ち、美の極みであった。
あなたは神の園、エデンにいて、
あらゆる宝石があなたをおおっていた。
赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、
緑柱石、しまめのう、碧玉、
サファイヤ、トルコ玉、エメラルド、
金があなたをおおっていた。

あなたの商いが繁盛すると、
あなたのうちに暴虐が満ち、
あなたは罪を犯した。
そこで、わたしはあなたを神の山から追い出し、
神の子たちの中からあなたを追い払い、
守護神ケルブがあなたを消えうせさせた。

10 「モンテ・アルバンではこの人物は本物の熱狂を目覚めさせる。奇形の手足、ネコの口、力強い態度をした裸の存在は、この都市のはじまりを目立たせ、ソロトル（ルシファー）のみを表現しうる。一方でジャガー、火とそれとの関連（その炎は時として生殖器に取ってかわる）および転落の動きは十分なあかしである。（レーレット・セジョルヌ Leurette Sejorne 著『ケツァルコアトルの宇宙』から原文のまま引用。）

11 「ソロトル・ルシファー・プロメテウス」は「ケツァルコアトル」の分身、光と闇の王子であり、天地と地獄を支配する絶対的権威を有するのは明らかである。

12 疑いもなく、神聖なダイモンは、今ここで我々自身の中に神の反映したものであり、我々に力、智恵、聖なる一致を授けることができる。「エリティス・シクット・デイ（あなたがたは神々のようになるであろう）」。

13 賢者の石、「ルシファー・ソロトル」は性器のまさに奥深くにひそみ、対立者たち、敵対する兄弟を和解させねばならない。「コインキデンティア・オポシトルム（対立者たちの一致）」。あなたがたは神々のようになるであろう。

14 昔の中世錬金術師の生きた賢者の火は精液組織の底にひそんでいて、目覚めさせられる瞬間を神秘的にただただ待ちわびている。

Fig. 3

15　「インリ（INRI）」：「イグニス・ナトゥーラ・レノバトゥール・インデグラム」。火は絶えまなく自然を新たにする。「イン・ネキス・レナスコル・インテゲル」。死において汚れなく純粋に生まれ変わる... 。

16　聖トマスは言う、「天使の中で最高のもの、最も完全なるもの。神のお気に入りの天使」。

17　ダンテはこう記す、「ある生き物よりも気高い、すべての生き物の中で最高のもの」。

18　疑いもなく、「ソロトル・ルシファー」は決して我々の心理の外にある不思議な自然力ではない。それどころか反対に、確かに、我々「個人の心の奥底」にある神聖な本質的存在の影なのである。

19　命の書に黄金の言葉でこう書いてある ── 「ナワトルのルシファー」の右足のかぎ爪には、おそろしく神聖な黄金のしるしが栄光に輝く。

20　「ソロトル・ルシファー・プロメテウス」、それは実生活というジムにおける心理的トレーナーである。

21　「ノーシスの太陽チノウペス〔要検討 CHINOUPES〕」、「クリストス・アガトダイモン」、「創世記の蛇」、「ナワトルのルシファー」、「光り輝く智恵の竜」を中傷する愚かな価値をそこここで広める、ある奉仕団体のむなしい警報、警鐘、さわぎ。

22　無知な者、智恵のかがみに憎まれ嫌われた「ソロトル・ルシファー」。彼らは生命を与える精霊を容認せず、天国でのミカエルと竜との戦い〔『黙示録』第12章参照〕の寓喩を死文と解釈し、その深い意味を理解しなかったのである。

23　聖戦、天の小ぜりあい、それは疑いもなくまさに我々自身の意識の奥底で行なわれねばならない。「自我」、「私自身」に具現された、内面に巣くう動物的情欲・激情との壮烈な戦い。

24　疑問の余地なく、我々の奥深い内なる真の本質的存在は退治せねばならず、さもないと失敗するはずである。前者の場合は、竜のしかけるすべての誘惑に勝利したというまさにその事実によって、竜退治の勇者になるのは明らかである。

25　家庭教師、教育家、指導教師としての「ソロトル・ルシファー」は確かにすごく、なみはずれ、非凡である... 。

26　ルシファーの誘惑には、まねのできない教授法、驚くべき教育法、目をみはるような魅力、まちがいようのない独特の刺激、神聖な秘密の目的をもつ秘められたそそのかし、

魅惑、幻惑が存在する... 。

27　以上から次のことが推定できる ― もし本当に「智恵の子」と「不死の神々」になりたいというのなら、人目につかない私生活の中で竜およびその闇の軍勢（心理的欠点）と戦えるし、また戦わねばならない... 。

28　ベーダの聖地では、光り輝く天空の神「インドラ」は悪魔の蛇「ブリトラ」または「アニ」 ― 「ルシファー・ソロトル」 ― を殺すが、その功績ゆえに「ブリトラハム」... つまり「ブリトラを破壊する者」である。それゆえ「インドラ」には「天軍の統率者」ヒシュヌ JISHNU という添え名が与えられている。

29　十字はあらゆる宗教、あらゆる民族で以前から使われてきた大昔のシンボルであり、ある宗派の独占する標章と考える者は間違っている。スペインの征服者たちがアステカ族の聖地にたどり着いたとき、祭壇上に十字を見つけた。

30　内陣から張り出した半円形や楕円形の外陣のある、中世の宗教的な大建造物の平面図には、輪頭（アンサタ）十字というエジプト神官文字の記号♀の形が見られる。それは「アンク」と読み、万物の奥にひそむ普遍的生命を表す。

31　一方、ヘルメス学で「アンク」記号に相当するものは、金星やキプロス島のルシファーの標章である。銅、青銅、真ちゅう。

32　「真ちゅうを磨いて、書物を燃やしなさい。」と中世錬金術の最高の著述家は全員たえず繰り返す。

33　明らかに、そんな表現や格言や祈りは、うまく翻訳すると「性魔術」、「科学的純潔」、「動物的エゴの根本的な死」を意味する。

34　「ケツァルコアトル」は「真ちゅうを磨いた」後に復活し、明けの明星になる... 。

35　『聖ヨハネの黙示録』（2：26－29）にはこう書いてある。

> 勝利を得る者、また最後までわたしのわざを守る者には、
> 諸国の民を支配する権威を与えよう。
>
> 彼は、鉄の杖をもって土の器を打ち砕くようにして彼らを治める。
> わたし自身が父から支配の権威を受けているのと同じである。
>
> また、彼に明けの明星を与えよう。

耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。

36　「ベル」と「竜」、「ケツァルコアトル」と「ソロトル」、「アポロ」と「大蛇ピュトン」、「クリシュナ」と「カリヤ」、「オシリス」と「テュフォン」、「ミカエル」と「赤竜」、「聖ジョージ」と「竜」はいかなる場合でも、我々各自の内にある神聖な個人的「ロゴイ」、および我々のため心理(サイキス)に投影されたその分身(ダブル)である。

37　声高に明言するまでもないが、竜、金星・ルシファー・ソロトルを殺すことはその子供になることを意味し、明けの明星を受け取ることである。

38　竜は、昔はずっと永遠や智恵のシンボルと見なされていた。

39　エジプト、バビロニア、インドの秘儀司祭は一般に「竜の子」や「蛇の子」と名づけられていたが、これは普遍的ノーシス主義の教えを裏づけるものである。

40　天上界から我々自身の原子地獄に落ちた、「メキシコのクリスト、ケツァルコアトル」の影や分身である「ソロトル」は、不思議な驚くべき存在である。

41　「ソロトル」は一方では犬や双生児を意味する。本章で思いだすまでもないが、犬は天から降りてきた火のシンボルだとサハグン神父は述べる。

42　「性の火」、犬、性愛の本能、「ナワトル・ルシファー」は、我々を根本的に変えうる、あの驚くべきすばらしい自然力である。

43　犬は騎士を案内し、闇から光、死から不死にいたる狭い道を導いてくれる。

44　プルトンの住まいから「ソロトル・ケルベロス」を連れ出すのは緊急に必要である。三つの巨大な頭をもつ、蛇を首に巻いた恐るべき驚異の番犬ケルベロスは、ほえたて、死者たちを一人残らず震え上がらせる

45　「ソロトル・三頭犬ケルベロス」は主人の革ひもを引っ張って、最終的解放にいたる険しい道を無事に連れていってくれる。

46　純潔の帯をした、悔悟者の元型(アーキタイプ)としての「ソロトル・ルシファー」は隠者になって、闇に光を生じさせ、クリスティックな秘教をいっさい明らかにしてくれる。

47　よみがえらせるべき遺体を所持する「ソロトル・ルシファー」は、在(あ)るために死ぬ必要性を我々に教えてくれる。

48　じっくり考え、思案し、瞑想するのは急を要する。疑いもなく、「自我そのもの」の

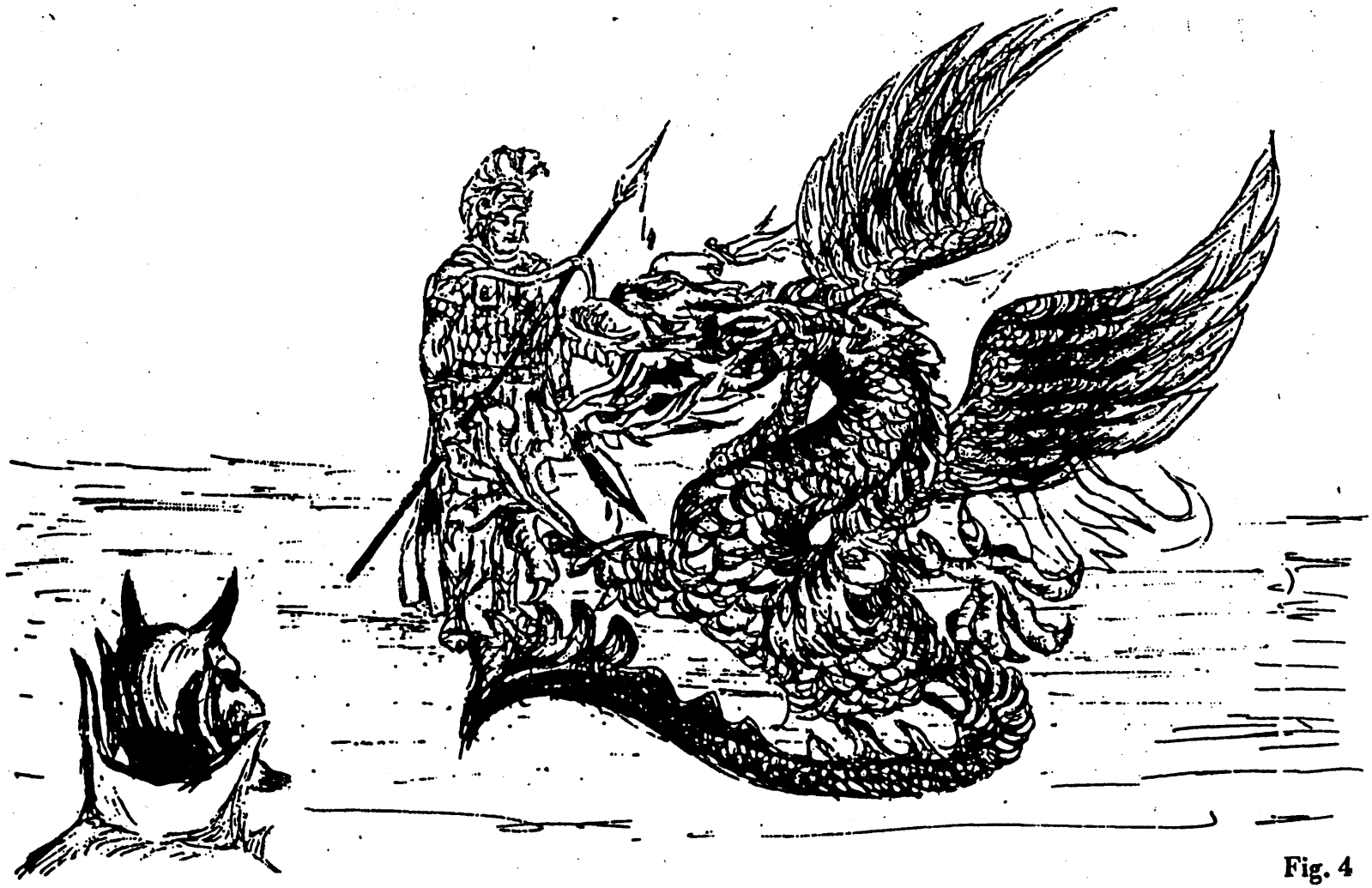


Fig. 4

死は、性の錬金術によって今ここで実現すべき秘教的復活のための必要条件である。

朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、
死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。

しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、
死ぬものが不死を着るとき、
「死は勝利にのまれた。」と
しるされている、みことばが実現します。

「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。
死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」
（『コリント人への手紙　第一』15：53－55）

49　「ソロトル・ルシファー」の挑発的、魅惑的な教授法を賢く利用することによって、魔術的復活が可能になる。

50　誘惑は火である。誘惑に対する勝利は光である。内面に巣くう好ましくない要素を取り除くのは、一刻のゆうよもなく緊急に必要で、後回しにできない。

51　ある象徴的価値を識別し、詳述し、見分け、明確にすることが今すぐにでも必要である。

52　ジャガーと犬に声高にふれたい。疑いもなく、太陽神聖文字をいっぱい付けたこの「ソロトル・ルシファー」は、我々の精液組織の源自体にあるので、ダンテの『神曲』に引用された犬ケルベロスの不思議な役をする。

53　ジャガーはそれとは異なるが、「ジャガーの騎士たち」、ノーシス運動のジャガーたちはこのことを知っていて、革命的心理学の本物のネコ科の動物のように、自分自身に、自分自身の心理的欠点に襲いかかる... 。

54　犬とジャガーがワークそのものに関して秘教的に結びついているのは、疑いようのない事実である。

55　アステカ芸術ではジャガーに人間性が与えられるが、それは神秘家を一人残らず驚かせる。

56　松明で思い出される神聖な粒子すなわち内なるモナドの助けがなければ、心理的付着物つまり全体として「我」を構成する内心の欠点を絶滅させることは決してできないであろう。松明は、「人ジャガー」の外観をきわめてはっきりと呈する光線のしるしである。

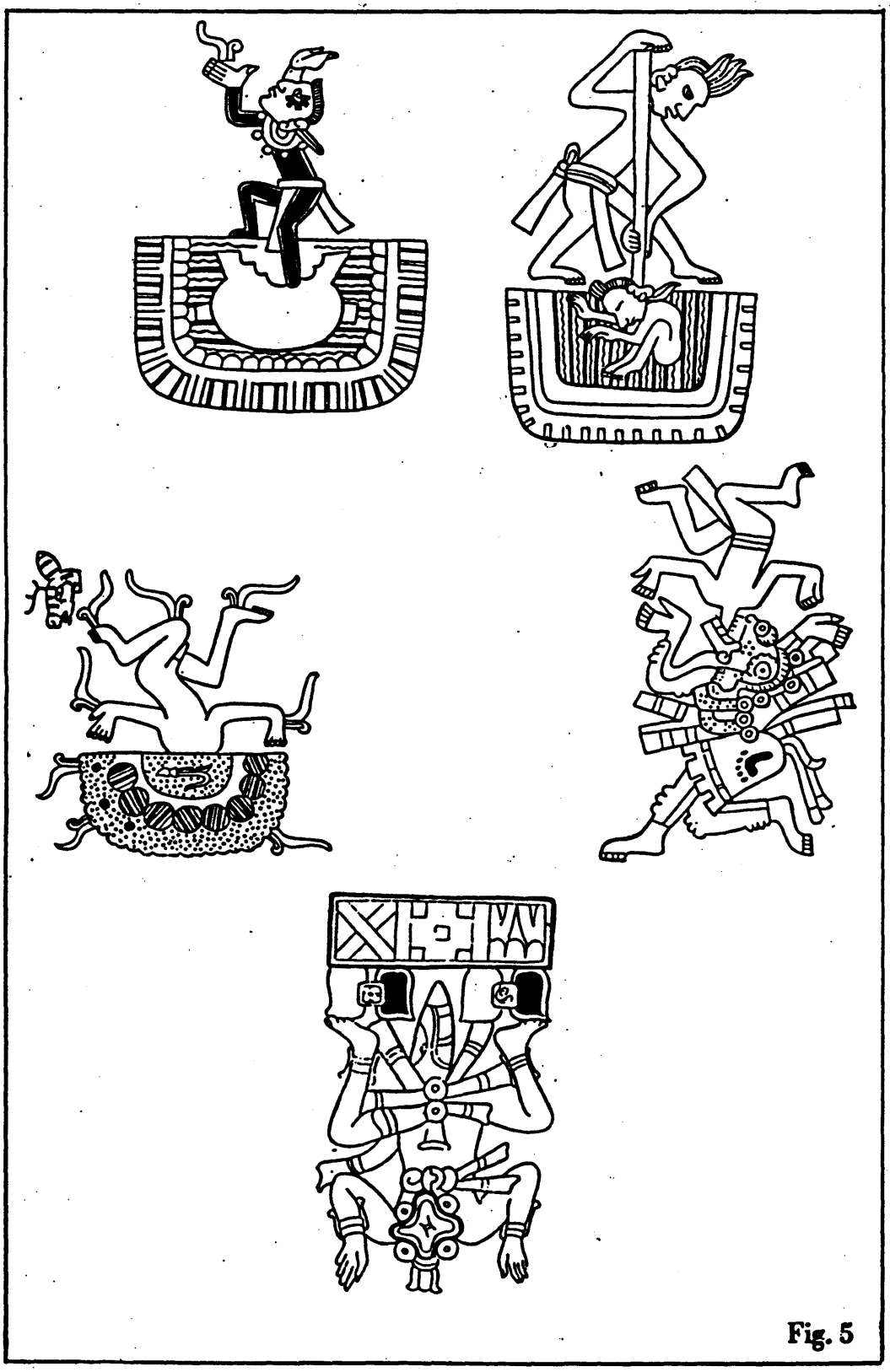


Fig. 5

57　命の書にはたいへん明確にこう書かれている ― 「上昇したい者はまず下降せねばならない」。「屈辱があらゆる称賛・昇進に先んじる」。

58　第九球体へ下降することは、古代からつねに秘儀司祭の至高なる威厳のための最大の試練であった。イエス、仏陀、ヘルメス、ケツァルコアトルはその恐るべき試練を克服せねばならなかった。

59　そこにマルスは、剣を再び焼き入れしてビーナスのハートを征服するため降りてゆく。ヘラクレスはアウゲイアス王の牛小屋を掃除するため、ペルセウスはメドゥーサの首を斬るため降りてゆく... 。

60　死者の中から復活したいというのなら、「ケツァルコアトル」とその分身は地の底、ダンテの地獄、プルトンの恐ろしい住まいで根本的に死なねばならない。

61　あの洞穴のまっただ中で、一本の巨大なニレの木が数百年〔別訳：世俗〕の枝を伸ばす。その枝には苦悩する人類のむなしい夢が住み、虫のように葉にくっついている。

62　「そのへんをケンタウロスたちがさまよう。百手巨神ブリアレオス。ヘラクレスが頭をいくつも斬って退治したレルネ沼のヒドラ。雌山羊の体をした怪獣キメラ。ゴルゴンの三姉妹、ハルピュイアたち、三体の影」。

63　「三途の川アケロンに沿って冥府タルタロスにいたる道筋は恐ろしい。泥のつむじ風と濁水」。

64　「逆立った白髪、真っ赤な炭火のようにキラキラした目、だらしのない長ひげの、身の毛もよだつ一人の渡し守が操船して、霊たちを向こう岸に渡す」。

65　「苦悩する群衆は別々に川岸に集まって、渡し守が運んでくれるのを待つ。しかし渡し守は気まぐれに選ぶ。こちら... あちら... 。むなしく待つ者がいて嘆願しても、ことごとく無駄である」。

66　「彼らは墓を受けなかった者の霊である。ひとつの情け深い手が、あちら地上でその遺体を回収して、その遺骨を骨壺におさめるまで、果てしない時間の中で絶望するからである」。

67　「そのときプルトンの住まいが開き、霊たちは以前のような光も影もなく、陰うつな休眠に入る」。

第３章
神秘の空中浮揚

1　疑いもなく、第四座標とは超幾何学の超（三次元）空間そのものであり、それによって不可思議な神わざができる。たとえば「ユークリッド」の三次元空間における肉体の消失・出現が可能となり、密閉容器の中からどんな物体でも外に出せる。

2　電子と陽電子が消滅してエネルギーを解放するとき、二つの光の粒子、より正確に言えば二つの「ガンマ」線の生じることが明らかに証明された。

3　この現象のありのままの現実を確かめた実験により、結果的に四次元の存在が立証される。

4　疑問の余地なく、さまざまな真の空中浮揚現象は第四垂直線という特別の動因によって常に可能となった。

5　神秘の空中浮揚とは床や地面の上方に肉体が異常にも浮きあがることであり、それは大げさに力説するまでもない。

6　この問題のいろはも知らない人々が大勢いるので、公衆の前で浮揚した隠修士を何人か例にあげるほうがよい。

7　中世の名高い領主で1038年に亡くなったハンガリー王、聖ステファヌスから始めよう。天幕の中で祈っていたある夜、彼は宙に浮いた。

8　つづいてカンタベリー大主教の聖ダンスタン。その神の傑物はまさしく988年５月17日の主昇天の祝日、大聖堂の荘厳な丸天井まで奇しくも浮きあがった。

9　傑出した修道士と高徳の認められる高名な婦人を何人か次々と見ていこう。

10　名の知られた隠修士であるハンガリーの聖ラディスラウス（1041－1095）。彼は有名なワラスディン修道院で祈っている間、歴史的な夜に床の上に浮かんだ。

11　高名な神秘家の立派な聖女クリスティナ（1150－1224）。彼女は死んだと見なされていたのに、葬式のまっ最中に教会の丸天井までフワフワと浮かんだ。

12　著名な中年淑女であるハンガリーの聖女イサベル、聖エドマンド、名高い修道女の聖女ルトガルディス、サンタレムの福者ギリェス、謎に包まれたハンガリーのマルガリータ、霊的な聖女ドゥルゼリナ、有名な哲学者である傑出した聖トマス・アクィナス、ボヘミアの聖女アグネス、その他大勢が四次元の中に入りこんで恍惚の間に浮かんでいた...。

13　驚くべき上昇、魔術的飛行、垂直線への突入。宙ぶらりん、昇天、通過、空輸、高所での空中回遊、恍惚、歓喜、法悦境。

14　神々と人間はこのことを知っているが、昔から語りつがれてきた伝説によれば、われらの兄弟アッシジのフランシスコ（1182－1226）は晩年、アルベルノ山で法悦境が深まった。幸せそうにパンと水を彼のもとに運ぶ愛弟子、レオーネ兄弟は、香りを放つ大地の上を彼が浮かびながら、洞穴の外のかなり高い所でいつも恍惚状態にあるのに気づいていた。ときどきブナの木にまで達し、視界から消えて第四座標の中に入っていた... 。

15　この神秘的、科学的テーマを続けよう。聖痕を受けた大変有名なプラトの修道院長、リッチの聖女カタリナ（1522－1589）も例にあげるまでもない。彼女は恍惚境に入っているとき宙ぶらりんになったままでいた... 。

16　パオラの聖フランシスコ、アルカンタラの聖フランシスコ、ビラノバの聖トマス、聖フランシスコ・ザビエル等のようなその他多くの悔悟者、修道士は恍惚にひたって床から離れ、公衆のただならぬ驚きをよそに宙にとどまっていた... 。

17　突飛さと凄さで有名な異例は明らかに、アビラのテレジア（1515－1582）という神秘家のそれであった。当人みずから詳述し、祈りの間どのようにして口では言えない魔力が未知の次元の中に自分を吸いこむのか弁証法的に説明する。そのとき呆然とする修道女たちを尻目にアビラのテレジアは浮揚していた... 。

18　その中の平凡なある日、日付はどうでもいいが、あの聖女は床の上にあまりにも高く浮いていて聖体を拝領できなかった... 。

19　アビラのカルメル会でのアビラの聖女テレジアと聖ホアン・デ・ラ・クルス（十字架のヨハネ）の二重の空中浮揚に、まわりの者はたいてい驚いてびっくりしたが、そのとき恍惚にひたったこれら二人の神秘家を空中に見ることができた... 。

20　かつてクペルチノのヨハネと呼ばれたあの青色の修道士は、七十回空中に浮かんだという。この魔術的事件は1650年ごろ起こったが、そのため聖人の列に加えられた... 。

21　穏やかな表情をしたその隠修士は、固い地面から離れるたびに歓声をあげていた。まさに飛行の瞬間、この不思議で神秘的な叫び声についてラウリアの枢機卿に尋ねられ、聖人は秘教的にこう答えた。「火縄銃に火がつくと、ものすごい音をたてて火薬が爆発します。そのように心は神の愛に包まれるのです。アーメン！」

22　修道院の独居房で聖職者がしつこく調べるように古写本を調査中、ベーダの聖地で次の言葉を見つけた。

23　「心臓中枢を瞑想する者は『タットワ』バユー（風の霊気的原理）を支配でき、『シッディ（聖者の神通力）』つまりブッチャリ、ケチャリ、カーヤ等（空中浮揚や他人の身体の中に自分の魂を入れる等）も獲得するであろう。また宇宙的愛や神聖な『サットワ』の全性質を獲得するであろう」。

24　「ヒーナス」の科学、空中浮揚の教義を学ぼうとする際、平静心の根本的な開発は後回しにできない。

25　穏やかな心の中であらかじめ聖者の神秘力を鍛練・開発せずに、「ヒーナス」の適応能力を試みようとするのは、「テルシウム・オルガヌム」つまり思考の第三規則と一致せず、無関係であろう... 。

26　できれば魔術的な空中浮揚の秘教的実践を決して禁じたり、邪魔したりしたくない。ぶち壊したり水を差したりするのは我々の意向ではない。心（心臓）の火を調和的に発達させたいと本当に熱望するなら、ただ「サクリフィシウス・インテレクトゥス」（インテレクトの犠牲）を勧めるつもりである... 。

27　たいへん悲しいことだが、論理的、思索的なマインドは心の繊細なエネルギーを犠牲にして発展、拡大、展開する... 。

28　機械仕掛けの知的な大脳機能は、無慈悲にも心の活力を吸い取り、吸収する... 。

29　多年にわたる絶えまない観察・学習・経験を通してじゅうぶん確かめられたことだが、自分のちっぽけな理性的、知的世界に閉じこもった偽秘教家や偽神秘家は、空中浮揚の実際の現場では事実上まさしく失敗に終わった... 。

30　神の愛に包まれた心が調和的に発達して、「ユークリッド」の三次元空間を越えて第四垂直線の中に肉体ごと意識的に入りこめるよう、祈りと恍惚にある「クペルチノのヨハネ」をまねるまでもない... 。

31　確かに、後で第四座標に入りこむためコアテペックの丘で魔法円をつくって、作業を行なったあの60人のアステカの長老は、心のすばらしい火をあらかじめ一人一人が開放していた... 。

32　未知の次元へのあの神秘的な旅の物語は、りりしくも怪異で、尋常ではない。

33　疑問の余地なく、「四次元」という「並行する宇宙」ではどんな変身でもできる...。

34　あの呪文によって強制された「ナワトルのルシファー」は、モクテスマの派遣した60人の使いを鳥、猛獣、ライオン、ジャガー、ジャッカル、恐ろしいネコに変えた。

35　それゆえ大名著『メキシコ史』にフライ・ディエゴ・ドゥランの明記する物語は、単なるほら吹き、うそ、机上のジョークではない。。

36　ヒーナスの歴史に直接目を向けるなら、東洋のチベットに大尊者、Xorable ？なマスター、高名な tahar？である「ミラレパ」を見いだすであろう。ミラレパはモクテスマの派遣した60人の長老のうちの誰かのように、四次元での浮揚術を知っていた... 。

37　魔術的能力をもつその完全なるアデプトは、無数の聖なる極楽と慈悲の「諸仏」の浄土に入り、訪れることができた。そしてそこで、その全身全霊をささげる精進と並はずれた帰依の徳によって、それらの楽土を統治する神々はミラレパを援助し、彼が「ダルマ」について説法するすることを許した... 。

38　偉大なる「カビール」、イエスは肉体ごと第四垂直線の中に入って海上を歩いたが、神々と人間はこのことを知っている。

39　ガリラヤの聖なるラビの使徒ピリポが、「ヒーナス」状態の聖なる守護聖人なのは疑いない。

Fig. 6

第４章
ファウスト博士

1　古代教義の真の「ルシファー」は反対に教化的で、本来威厳があり、デ・ムソやミルビージェ侯爵のような神学者の想像するものとは正反対である。なぜなら確かにそれは公正さの寓喩、至高なる犠牲（「ノスティック」の「クリストス・ルシファー」）の驚嘆すべき不思議な象徴であり、無数の名前をもつ智恵の神だからである... 。

2　「ソロトル・ルシファー・プロメテウス」は「プラトンのロゴス」、「創造主デミウルゴス」のしもべ、およびハデス、サバトの七つの館と顕現界の光り輝く主と一体である。「ルシファー」は疑いもなく度量衡と数の規準なので、剣と宇宙的正義の秤は「ルシファー」にゆだねられている。いつも言語に絶する「ホルス」、「プラフマ」、「アフラ・マズダ」等... 。

3　「ケツァルコアトル」の分身である「ルシファー・ソロトル」は、「ルミシアル（神殿）」の鍵を守る門番であり、ヘルメスの秘密を握る、塗油により聖別された王〔司祭、クリスト〕以外の者が中に入らないようにする... 。

4　「ナワトルのルシファー」を軽々しく呪う者は、「ロゴス」の宇宙的反映に反対意見を述べ、物質に顕現した生ける神を呪詛し、光と闇の対立物に平等に現れるいつも不可解な智恵をいみ嫌う... 。

5　サタンの栄光はわが主アドナイの影であり、サタンの玉座は主の足載せ台である...。

6　類似、相似、写し。太陽と影、昼と夜。対立物の法則... 。

7　「ロゴス」すなわち宇宙建築家「デミウルゴス」の軍隊は二つ。崇高な領域にはミカエルの百戦錬磨の軍勢、顕現界の奈落にはサタンの軍団(レギオン)。

8　明らかにこれらは未顕現者と顕現者、清浄無垢な者と動物的生殖への転落者である...。

9　疑いもなく動物的生殖の恥辱は決して「ロゴス」ではなく、ただ「サタン」にのみ帰する。禁断の木の実を食べたとき、「クマラ」の清浄無垢な高揚した状態を失った...。

10　秘教的な復活と共に、「ナワトルのルシファー」は「クマラ」の清浄無垢な状態を回復する。

11　「大作業」の隅石は「ナワトルのルシファー」である。性組織の実質そのものに賢者がすえたこの礎石の上に、偉大なる「カビール、イエス」は教会を建てた... 。

12　「大作業」用に研磨する前の原石は確かに不純で物質的で粗(あら)い。そういう本質的な理由で、それには「悪魔」の名が冠せられる... 。

13　たいていは、時々くり返し言う必要がある。我々ひとりひとりは自分独自の「ソロトル・ルシファー」、特有の「ロゴイ」の生き写しを持っていて、そのことを完全に理解するのは後回しにできない... 。

14　アステカでは魔犬の姿をとる「ルシファー・ソロトル」は、多くの人々の恐怖のまとであり、ふつう「ユークリッド」の三次元空間に入って、物質界で目に見え、手で触れられるようになる... 。

15　ファウスト博士の不思議な犬「プレスティヒアル」の振るまう様子を、狂った時代の名士ガスパル・モイル・デ・ロカ伯爵は物語る... 。

16　鋭い目つきの黒いむく犬は、確かにきわめて利口であった... 。

17　平凡なある夜、きらめく豪邸のまん中、伯爵の目の前で寝ていた犬の「プレスティヒアル」の方を見て、ファウストはある言葉を言ったが、あの名士にはその深い意味はわからなかった。すると犬は両脚の間にしっぽを入れて寝室から出て行った... 。

18　明らかに伯爵にはまったく不自然に見えた犬の奇行... 。

19　ファウスト博士は微笑んで、犬がどのように見えたか友人に質問したところ、うれしそうにまたあなたに会いに来ると、歯に衣(きぬ)着せずに明答した... 。

20　主人に呼ばれて、『千夜一夜物語』のあの犬は屋敷内をはねまわり、それから田舎風のベンチの上に飛び乗った... 。

21　あの犬の目はまるで真っ赤な炭火のようであった。今やゾッとするような外観をしていた... 。

22　ファウスト博士が背を優しくなでると、あまりにも神秘的な犬の毛色は変化した。白色になった後、黄色になり、しまいには赤色に変わった... 。

23　たいへん思慮深い賢人である伯爵は、うやうやしく沈黙を守るほうを選んだ。後に何でもいいから別の問題について話そうと思った... 。

24　それゆえに犬は魔術を共にする。昔、つねにマーキュリー神にささげられた寛大な動物... 。

25　古代エジプトの老秘儀司祭が、犬に深い尊敬の念を抱いていたのは明白である... 。

26　諸皇帝の威厳あるローマにあるアスクレピオス神殿の厳粛な見張り番は、つねに一匹の犬であった... 。

27　歯に衣着せず率直に話すと、犬をはりつけにするのは矛盾していることを強調せねばならない... 。

28　神々と人間はよく知っているが、毎年この尊い生き物の一匹がはりつけにされた... ガリア人の到来をローマ人に知らせなかった罪ゆえの、犬に対する厳罰である... 。

29　「エトナ山」のバルカン神殿の聖犬は、宗教上つねに大切に扱われていた... 。

30　地獄の番犬ケルベロスは入る死者をかわいがり、逃げ出そうとする死者を情け容赦なくがつがつ食べていたことを決して忘れてはならない... 。

31　恐るべき驚異ケルベロスが遠ぼえする怖い洞穴。ケルベロスは、ほえ声、獅子鼻の三つの巨大な頭、蛇の巻きつく首で死者をひとり残らず震えあがらせる... 。

32　昔の伝説によればオルフェウスはケルベロスを竪琴で眠らせ、黄泉の国タルタロスに降りて、妻のエウリュディケを捜したという。

33　疑いもなく、シビラ（巫女）Sibyl も、蜂蜜とケシの実の入ったパスタで「ソロトル・ルシファー・ケルベロス」を眠らせた... 。

34　葬式のたぐいのあらゆる典礼に、ケルベロスが異常なまでに関与することが知られている... 。

35　古代の王家の墓では死者の冷たい足の下に犬の像が置かれていた。意味深長な地獄の象徴... 。

36　レブレル（野ウサギ狩り用のハウンド犬）、カン・グランデ（大犬）、ベローナの領主でダンテの恩人であるデラ・スカラを決して忘れてはならない... 。

37　この犬は土も白め（錫と鉛などとの合金）も食べず、智恵・愛・徳を糧とする... 。

38　その他多くの動物が高等魔術に関与する。内面に巣くうすべての非人間的要素の腐敗と死の象徴、カラス。処女性と純潔、また第三ロゴスの寓意でもある白ハト。勝利の近いことを錬金術師に知らせる黄色いワシ。王たちの紫衣と共に賢人に大作業の完成を告げる赤いキジ... 。

39　心から尊敬すべき xorable？なマスター、高名な tahar？で、パワーあふれる謎めいたファウスト博士は、大富豪のように何不自由なく快適に暮らしていた。動物に神秘的な役割を与えて奇跡に参加させていたので、彼らに取り囲まれるのを好んでいた... 。

40　当時（1528年）、たいへんな名士の肩書をいくつかあわせ持つ、高貴の生まれの古い貴族として、ファウストはプラハの宮廷で驚くべき奇跡を行なっていた... 。

41　「エルフルト」（魔法使いで魔術師のヨハン・ファウスト博士がよく泊まっていた場所）のカスティージョ通りの折(おり)よく「エル・アンコラ（錨(いかり)）」と呼ばれた豪邸に幸せそうに住んでいた、ある凛々(りり)しい紳士が大宴会を開いた... 。

42　黄金のテーブルの前にいた招待客たちは大声を張りあげて、声々にファウストを呼ぶということがたまたまあった。だが豪邸の主人の語るところによれば、不可思議な術の使い手ファウストはプラハにいるという... 。

43　しかし招待客たちはワインでほろ酔い気分になっていて、そのためやかましい capul〔「主人」？要検討〕は宴会に駆けつけるようファウストに頼んで、あわただしく呼び招かざるをえなかった... 。

44　その瞬間、誰かが壮麗な城の門をたたくではないか。召使は一階の採光窓ごしにのぞくと、まるでたった今、馬から降りたばかりのようにファウストが門の前、馬のそばにいて、開門の合図をしていた... 。

45　召使は急いであるじに知らせに行ったが、あるじは腹をかかえて笑い、「そんなことあるはずがない。ファウスト博士はプラハにいるのだから。」と答えた... 。

46　ファウストが豪邸の敷居の前で再び呼びかけると、今度は館の主人がかわりにのぞいた。「ファウストだ！」。封建領主の特徴である威圧的な絶対命令をくだし、開門して、ファウストに最高のもてなしをするよう命じた... 。

47　ヨハン・ファウスト博士は、おおかたの招待客の驚きをよそに宴会テーブルで設けの席に着いた... 。

48　仰天したあの館の華麗な主人は、どうやってプラハからこんなに早くやって来れたのか尋ねたいという思いを明らかに抑えきれなかった... 。

49　「私の馬のおかげです ── ファウストは答えた ── 皆さんが私にすぐにでも会いたいと思い、私を呼び招いていたので、出席して、その願いをかなえてさしあげたかったからです。もっともあまり長くはいられませんが。明日の夜明けにはプラハに帰っていないといけません」。

50　けんらんたる宴会は大にぎわいで、博士はいつもの奇跡を首尾よく起こし、それどころか豊富なワインと占いすらあった... 。

51　ゆかいな竪琴の合唱、細工をほどこした杯、黒ワイン、プリズムネックレスのように震えて変化する虹で縁のきらめく、煮えたぎる器をこの原稿で思い出すまでもない... 。

52　血を熱く心を陽気にする黒ワイン、長髪の吟遊詩人にそれほど霊感を与える、ぶどう発酵したフルーツ... 。

53　騒ぎとパーティーのさなか、ヨハン・ファウストは大声で叫び、異国のワインも賞味してしてみてはと提案した... 。

54　そしてそれを見た者によれば、間に合わせの異国調の器の中からそのとき様々な収穫物の酒があふれてきたという。ガリラヤのカナの婚礼のときとよく似た、ファウストの起こした奇跡である... 。

55　突然ただならぬ様子で、主人の息子が明らかにイライラした顔をして部屋に入ってきた。「博士様 ― 息子は言った ― あなた様の馬がガツガツ食べています... 」。

56　「私が思うに、君の馬だけに餌を与えるよりも10頭か20頭の馬にも餌を与えたほうがよい。もう私は用意のしてあった2セレミン〔約9.25リットル〕以上のカラスムギをむさぼり食ったが、私の馬は家畜小屋の前であいかわらず待ちつづけて、別の者が来るかどうか周囲を見まわしている」。

57　招待客は全員笑った。ソクラテスのかすかな微笑みではなく、アリストファネスの爆笑であった... 。

58　若者は平然と言いつづけた、「ぼくは約束を守りたいと思いますが、一か八か数倍のカラスムギを試してみても、あの馬にたらふく食べさせましょう」。

59　ファウストは答えた、「無駄だよ。自分の馬はじゅうぶん食べてきたが、地上のカラスムギを全部たいらげても満腹にはならないだろう... 」。

60　あの元気のよい駿馬が、一点の疑いもなく、翼ある獣に変身した「ナワトル・ルシファー」そのものであったのは確かである。

61　「ソロトル・ルシファー」は魔術作業でときどき桂冠詩人の「ペガサス」のような空飛ぶ馬に変身して、必要なときは四次元の中で「ファウスト」をすばやく運んでいた...。

62　はめをはずした大宴会は真夜中まで続いた。そのとき馬がいなないた。「さあ、もう

帰らないと。」 ― 賢人は叫んだ。

63　しかし喜びに満ちた招待客たちは笑い声をあげ、すがるように賢人を引きとめたので、すぐには帰れなかった... 。

64　二度目それから三度目、馬はゾッとするほどいなないた。ヨハン・ファウスト博士は従わないわけにはいかなかった。こうして友人たちに別れを告げ、元気のよい自分の駿馬を連れて来させてすばやく乗るや、カスティージョ通りを上がって行った... 。

65　その辺のうわさ話や昔の伝説によれば、家を三、四件通り過ぎたころ馬は空中に飛び上がり、その悪魔の乗物にまたがった紳士は見えなくなった... 。

66　魔法使い、魔術師であるヨハン・ファウスト博士が夜明け前にプラハに帰って来たのは疑いない... 。

67　「ファウスト博士は、エルフルトの記録によると鮮明な思い出を確かに残した。その賢人の名前がついている路地と同じく、『エル・アンコラ』という有名な家は今でも存在する」。

68　本章を終えるにあたり、「モクテスマ」の派遣した60人の魔法使いの異例のケースがふと思い出される。彼らは「ルシファー」の力を借りて、祖先の地、「不死の館」に向けて「第四垂直線」を旅した。

Fig. 7

第５章
ヒーナスの方法

1　本章を始めるにあたり次の公理を強調したい。「人間のマインドが『ユークリッド』の三次元的教義に閉じこめられたままでいるかぎり、物理学は変わらないであろう」。

2　疑いもなく現代物理学は確かに退行的、反動的、復古的である。

3　第四垂直線を描くのは一刻の猶予もなく必要で、後回しにできない。しかし唯物論的懐疑が存在する間は不可能である。

4　はるか未来の進歩した、いかなる人類でも、光速の壁を一瞬にして越えることのできる宇宙船をつくれるであろう。

5　堂々と「四次元」タイプの新物理学にもとづくそのような船は、超光速で第四垂直線の中を旅するであろう。そのとき広大無辺の宇宙の征服は、疑いのない具体的、決定的事実となるであろう。

6　疑う余地なく、太陽エネルギーを推進力とするあの船は、言葉のもっとも完全な意味で真の人間がきっと操縦するであろう。

7　明らかに ― そして誰もが知っていることだが ― 超音速機によって音速の壁はすでに破ったが、傲慢で尊大な地球人は、光速の壁の前であいかわらず立ち往生する。

8　「『秒速30万キロメートル』という光速の壁の向こう側に四次元がある。」と本章で表明するまでもない... 。

9　そんな陳述から以下のような当然の結果が推定できる。「肉体をまとって第四座標の中をトリップするどんな魔術師も、光速の壁を瞬間的に破る方法を疑いなく知っている」。

10　絶対権力を有する王「モクテスマ」の60人の長老の魔法使いが、「ファウストのルシファー」の驚くべき力を借りて光速の壁を瞬間的に破り、真の地球人類発祥の地である北極海のかなた、永遠の聖なる島に向けて第四垂直線をトリップできた歴史的な場所は、「トゥーラ」の「コアテペック」であった... 。

11　この世界の人類の始めから終わりまで存続する運命にある、この最初の地球大陸に関するいっさいを、ヘレナ・ペトロブナ・ブラバツキーの『シークレット・ドクトリン（秘密教義）』の中で読まねばならない。

12　『ベーダ』の聖地では、思考の真の「サンヤシン（綜制者）」はみな光速の壁を一瞬

にして破り、アッシジのフランシスのように未知の次元をトリップできる... 。

13　秘教家が肉体に「サンヤシ（綜制）」を適用するとき、ただちに光速の壁を破る ―― 我々はまったく確信をもって厳かにそう断言する... 。

14　完全で本質的、基本的ないかなる「サンヤシ」も、おおむね三つの基礎的要素からなる。

A）「意識ある意志の絶対的集中」。
B）「深い瞑想」。
C）「法悦、恍惚、神秘的歓喜、至高なる心酔」。

15　忍耐がノスティックのスケールであり、謙虚さがその庭の門であることを、この『クリスマス・メッセージ 1974－1975』で思い出すまでもない... 。

16　確かにノスティック行者の中には、「ヒーナス」の科学の適応能力を授けてくれる「カルディア」がじゅうぶん発達するまで、何年間もワークを行なわねばならない者もいるであろう... 。

17　この奇跡を可能にするインティモ（内心）の粒子の輝く本性は、光線の記号である松明の形で適切に特定されるが、メキシコ-アステカの「人ジャガー」はそれをしばしば利用する... 。

18　人間になったジャガー、「ソロトル・ルシファー」は、コルテス到来以前のメキシコばかりか中央アメリカ全土にわたって具体的現実になる... 。

19　まさしくそのように人間にもどったとき、「テオティワカン」で人ジャガーを発見する。勇壮な両手をあげた礼拝のしぐさ、あるいはその特徴であるネコのような歩き方...。

20　疑いもなくメキシコ-アステカの「ジャガーの騎士」は激戦に慣れた戦士のうえに、ヒーナスの科学の非凡な達人でもあった... 。

21　誇張なしに強調すると、「アナワク」のあの傑士たちは、「ナワトルのルシファー」のネコ科の恐るべきパワーと「サンヤシ」の三要素とを賢明に組み合わせるすべを知っていた。

22　ジャガーの毛皮の上に横になり、休んでいるときのジャガーの聖なる姿勢をまねて、うとうとし、あの傑士たちは、きらめく調和のうちに（in vibrant harmony）意志とイマジネーションを意識的に結びつけるすべを知っていた... 。

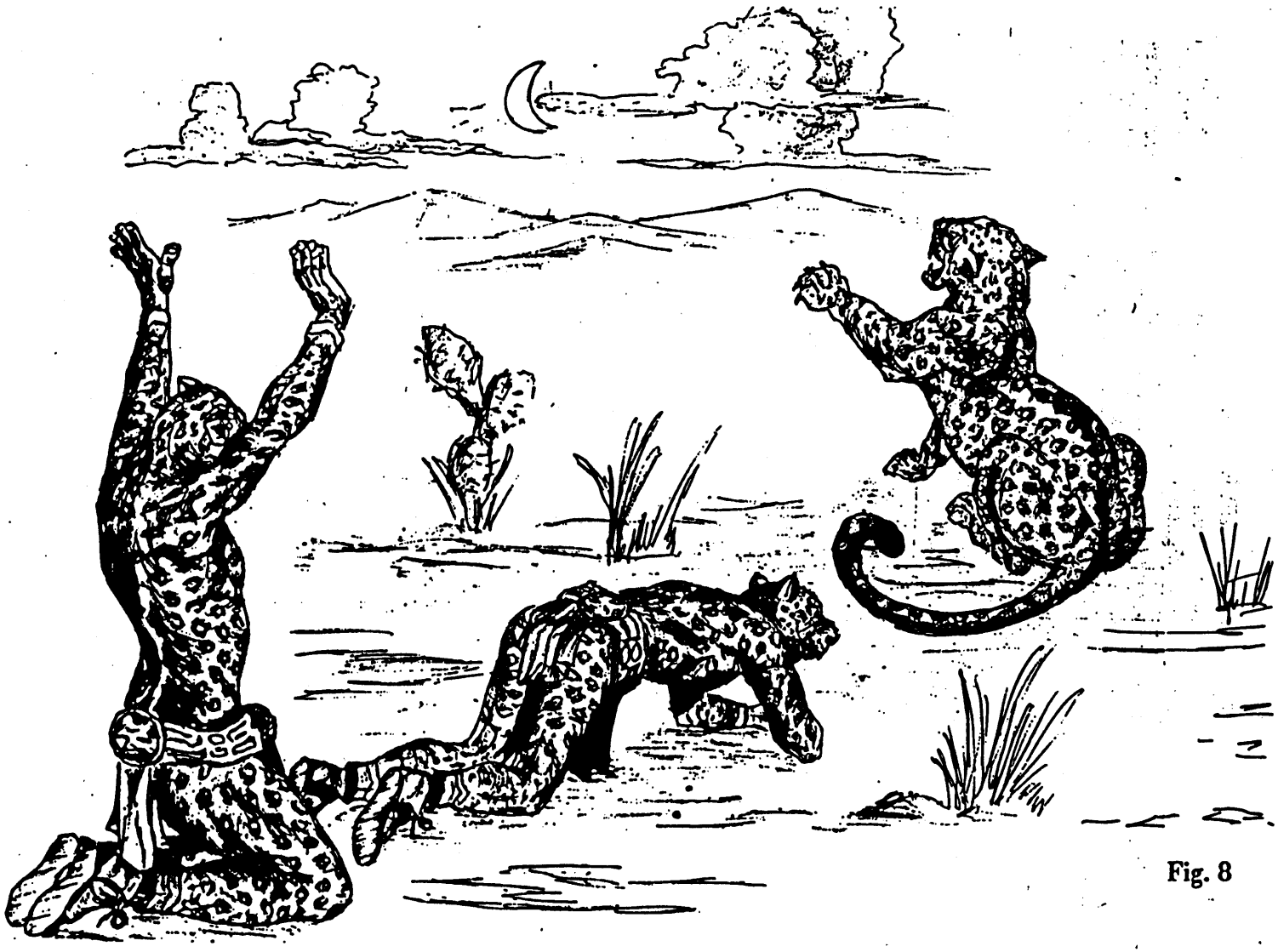


Fig. 8

23　努力を結集し、最高に精神集中し、深い瞑想に沈み、創造的イマジネーションによって彼らは意図的に「ジャガー・ソロトル・ルシファー」のネコ科の姿をとっていた... 。

24　じゅうぶんな恍惚と神秘的歓喜にひたって、その怖い姿で歩きまわり、行動し、機能するのはこの傑士たちにとってまったく不可能ではなかった。

25　注目に値するあの隠者たちは堅い寝床を離れ、ジャガーのように歩いて、それから第四座標に消えるたびに、「われらは、われらのものである... 。」というしきたりの言葉を口に出していた。「火縄銃に火がつくと、ものすごい音を立てて火薬が爆発する。そのように心は神の愛に包まれる」。

26　修道院の独居房での聖職者のように粘り強く古い略年代記を調べて、いにしえの科学のこの詳細の多くを私は裏づけねばならなかった... 。

27　神々と人間はよく熟知していることだが、昔の伝説によれば、伝説上の奇妙不可思議なあのジャガーは、チャプルテペック神殿 ── 今では「ヒーナス」の状態にある ── の敷居の前でまったく人間の上品な姿に再びもどっていたという... 。

28　この原稿を読みつづけていると、オビディウスとその不思議な変身のことをきっと思い出さずにはいられない... 。

29　この最悪の「カリ・ユガ」時代（現代）の、教養がありながら無知な者たちが異常な傲慢を抱いて拒絶する、最高の神秘的魔法。

30　疑いもなく、偉大なる「カビール・イエス」の使徒ピリポは、これらの「ヒーナス」現象すべての聖守護聖人である... 。

31　聖書によると、ピリポが一人の宦官に洗礼を授けた後、主はピリポをさらって行った。それから宦官は喜びながら旅を続けた... 〔『使徒行伝』 8 ：39〕。

32　その後、ピリポはアゾトに姿をあらわして、町々をめぐり歩き、いたるところで福音を宣べ伝えて、ついにカイザリヤに着いた〔『使徒行伝』 8 ：40〕... 。

33　真面目ないかなるノスティック・「アルハット」も、偉大なる使徒ピリポに魔術的援助を嘆願できる... 。

34　もしピリポを愛するなら、うつらうつらしている最中にピリポについて瞑想し、頭の中から雑念を一掃しなさい。そしてピリポの存在する喜びを心で感じるとき、「天に、ピリポ！」というしきたりの言葉を口に出して言い、それから決然たるしっかりした足取りで寝室を出て、未知の次元の中にさっと入りなさい... 。

35　偉大なる原因の名においておごそかに私は表明するが、前述したこの驚くべき公式は「イサベル」という一人の聖霊に由来し、確かにその人間的パーソナリティーは昔の中世の修道院の謙虚な跣足(せんそく)修道女で、その修道院は現代では第四垂直線に沈んでいる... 。

36　心から親愛なる読者よ、灼熱の太陽が、あなたのために道を照らし出すように。ジャガーの力が、あなたと共にあるように... 。

37　智恵の大ホタルが、あなたのインテレクト（知力）を照らすように。さざめくピクル Picr が、あなたの休息に日陰を与えるように。

38　エメラルドの蛙が休まずに鳴いて、道を示すように。彼女、自然が惜しみなく恵みをあなたに与えるように... 。宇宙の力があなたを祝福し、導くように。

第６章
アストラン

1　「アストラン」、「アバロン」、魅力ある神秘の山。たそがれの子（慈悲の「ブッダ」、ディヤン・チョーハン、智恵の蛇、ピトリスつまり人類の教師である祖先、星の天使、建設者、監視者、ゾロアスター教徒のヤサタ-星々等）の一風変わったすみか。

2　黎明の地、不朽の館、未踏の北極海のかなたにある天の楽園... 。

3　いろいろな光彩に包まれた、言語に絶する太陽のとりで、白い島、愛の小さな安住の地、太陽神アポロンの国... 。

4　第四座標のあのエデンの園、大海原のまんなかに浮かぶ大陸は、北方にうるわしく輝く... 。

5　陸路でも海路でもたどり着けないその聖地は、古代ギリシア伝説の中で切にくり返される... 。

6　「魂の飛翔によってはじめてそこにたどり着ける」。東洋の老賢人たちは、たいへん厳かにそう語る... 。

7　疑いもなく、「慧眼（けいがん）をもつ光り輝く傑士」、宗教-智恵のアデプトたちは我々の祖先の地との接触を一度も失わなかった... 。

8　以下の反論できない声明をくり返し言おう ― 光速の壁を瞬間的に破り、肉体をまとったまま、はるか「トゥーレ」に向けて未知の次元をトリップできる... 。

9　「メクスィティン MEXI-TIN」つまり「メジンス MEDJINS」、「ジンス DJINS」、「ヒーナス」つまりアラビア、アステカ、メキシコ民族の驚くべき「精霊」が太陽の地「アストラン」に幸福に暮らすが、そこにいたる道は遠い昔からすでに断ち切られており、こちら側を向いたその部分は広大な茂みでもうふさがり、とうてい勝ち目のない怪物の住む一面の荒れ地、砂丘、底なし沼、うっそうと茂ったアシ原は、どんな向こう見ずな人でも命を失うであろう。

10　おそらく昔の詩的表現以外は、そのエキゾチックな聖地について、偉大なる気息の一日の夜明けから黄昏の終わりまで北極星がそこをじっと見つめる、と言えるものはごくわずかである... 。

11　聖なる島が最初の人間の発祥地であり、人類の未来の子孫の「シスタ SHISTA」として選ばれた最後の不死の神々のすみかなのは疑いない... 。

12　アステカ民族は守護神たち、つまり「アバロン島」の「ヒーナス」に昔導かれて、メキシコの湖までたどり着いた... 。

13　砂漠を横切って約束の地までイスラエル民族を案内した、聖書のヘブライのモーゼの話と、その話はまったく似ている... 。

14　さまよえるユダヤ人の原型。かたやユダヤ人、かたやメキシコ人の大移動に類似した永遠なる大移動を行なう「ヒーナス」の「トゥアーザ」民族。

15　「トゥアーザ」が、「ヒーナス」の状態で緑の「エリン〔アイルランド〕」に帰ったのは疑いない... 。

16　「トゥアーザ」は「アバロン」つまり「天」からやってきて、聖なる象徴をいくつかアイルランドにもたらしたと言われる... 。

17　賢者の石、アキレスの槍、炎の剣、ヘルメスとソロモンの杯を思いだすまでもない...

18　アステカ族の「アストラン」、「アバロン」、そこは「兄弟ファン」が幸せに暮らす愛の小さな安住の地、火の地である。

19　汚すことのできない聖語、ロゴス、声、「イ」、「エ」、「オ」、「ウ」、「アン」、「ファン（ヨハネ）JUAN」。それは一人の人間に限定されるものではなく、ひとつの太陽王朝をそっくり指す。

20　かつて「アスガルド」、「クリスタルの島」、神々のすみか、主神たちアシールの国に住んでいた第一人種は疑いもなく半エーテル的、半物質的であった... 。

21　遺伝以前のオルフェウスの序詩は、地上の「宇宙的人間」の中にすばらしい機能・能力をゆだねた... 。

22　かつて胚の原始的状態から始まった、絶えまない進化と変化の驚くべき所産である第一人種は、まったく完全に高次元から生じた。

23　すべては「プラババプヤーヤ PRABHAVA-PYAYA」、聖なる神々の意識的創造原理の知的進化から生じる... 。

24　それゆえ自然の進化と退化の全過程を理解できるようになる前に、最初の創造をよく研究せねばならない... 。

25　疑いもなく「第一人種」は、何ひとつとして未発達の要素も初期の火も持っていな

かった... 。

26　偉大なる原因のために声高に以下の声明を打ち出そう。

27　「『人類の第一人種』が『第四座標』から出て、『ユークリッド』の三次元世界で目に見え、手で触れられるようになる前、『世界の子宮』、『ジャガド・ヨニ JAGAD-YONI 』の中でじゅうぶん練られないといけなかった」。

28　驚嘆すべき原始人類、おそろしく神聖で崇高な両性具有者。善悪を超越した、言語に絶する存在... 。

29　いつまでも永遠の完全無欠の原型。柔軟性・伸縮性に富んだ不滅のからだをもつ傑士たち... 。

30　「アダム・カドモン」、『創世記』第１章の「男女（おめ）」の存在。疑いもなく、彼らは「エロヒム」の軍勢そのものであり、その風采は今や身体の最高の調和と均整を授かっていた... 。

31　明らかに、それらの巨大な存在はみな、自然のもっとも神秘的な力による聖なる火の権化であった... 。

32　「独力で生まれた者」、非の打ち所のない見事な彼らは悟性、知性、意志を持っていた... 。

33　それら最高の創造物のひとりひとりが個別の魂を具現していて、それを持っていることを知っていた... 。

34　「分体生殖（分裂繁殖）」FISIPARISMO の時代で、当時はあの魅力的な創造物は「分体生殖」という性行為で生殖していた... 。

35　「無核原形質塊 Móneron やアメーバとして知られる原形質の均質点が二つに分裂するときには、どのように見えたのか。核が二つの亜核に割れる有核細胞の分裂に見られたとおり、二つの亜核は、もとの細胞壁の中でじゅうぶんに発達するか、細胞壁を破って独立体のように外部に増殖するか、どちらかである」。

36　同じように、あの両性具有者の有機体は二つに分裂し、独立体のように外部に増殖していた... 。

37　その「分体生殖」の時代、最初の原始的生殖のこの事件があるたびに儀式と祭りの祝いがあった... 。

38　当時、地球全体がきわめて美しい濃青色をおびて栄光に輝いていた... 。

39　昔のその黄金時代にはクリスタルの島、アポロンの国は、地軸の周期的変動のために赤道地帯にあったことを思い出すまでもない。

40　「もっと完全な」両性具有者の最高の神聖人種。「ハリケーン」（後に南米に運ばれて行ったマヤ族の声）、それは、あの傑出した創造物に完全に具現した「一吹き」、「風」、「言葉」、「ことば」をアステカの秘儀司祭にとって意味し、「クリスタルの島」に「アシールたち」の文明を樹立した... 。

41　「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された」。（『創世記』１：27）

42　「テピウス・コクマッツ TEPIUS K'OKUMATZ（神）」のように、楽園のような比類のない完璧の美、両性具有者の魅力的な麗しさ。

43　「Brotation〔発芽？〕」によって生殖していた「ハイパーボーリアン（ヒュポレボレオス）Hyperborean」という第二人種は、「第一人種」から誕生した。かつてさまざまな北方地域に住んでいた莫大な大衆。

44　この二種類目の神聖な両性具有者から今度は「第三根人種」、「ふたなり」が生じる――命の書の不朽のページに金字でそう書いてある。巨人の雌雄同体（半陰陽者 Hermaphrodite）。巨大！　威圧！　彼らの生殖方法は「無性芽生殖（発芽生殖）」Gemmation であった。レムリア文明は「ムー」大陸つまりレムリア大陸ですばらしく栄えた。太平洋にあった火山の多い陸地... 。

45　雌雄同体の人類は、自然によって変化した二つの性に分離して、被造物を支える機械になった。その後、その名前のついている大西洋（アトランティック）に位置する、アトランティスの地質学的舞台に「第四根人種」が生じた。

46　最古の占星術師「アトラス」、彼はアトランティスの王であった... 。それゆえヘラダ〔要検討 la Hélada〕の子孫の詩的マインドは、力強いマインドによってではなく肩で天空の機械を支えている巨神のように、アトラスのふりをした。

47　その子孫である巨神族ティタンは天に侵入しようとした... が、神は彼らを混乱させ、ある夜、海と雷が激しくとどろき、オイロペ（ヨーロッパ）は揺れて、轟音で目を覚ますと、もう姉妹の世界は見えなかった... 。「かつてここには有名なアトランティスがあった。」とでも人類に語るかのように、ただテイデ山のみが残った。

48　さて、その源（アトランティス人）の茎から分かれた、地上に住む現在の「第五根人

種」、アーリアの大衆はもう百万年以上存在し、完全な絶滅にひんしている... 。

49　各人種は七つの亜人種からなる。各亜人種は今度は七つに枝分かれするが、それらは「枝」つまり「語族」、小種族、芽、新芽と呼びうるもので、無数にあり、運命の働きいかんによる... 。

50　「クリスタルの島」、アステカ族の「アストラン」はそれゆえ地上の楽園、我々の祖先の地であり、そこにはあらゆる人種の祖先が住む... 。

第７章
アトランティス

1　「ボルジア写本」には「アトランテオトル」の姿が載っているが、ちょうど習慣的に象徴として優先しているギリシアのアトラスのように、天の水を双肩に背負っている。

2　声をあげて大げさに言うまでもなく、「アトラス」のギリシア神話は、マヤ・アステカの英雄神「アトランテオトル」ATLANTEOTL を忠実にコピーしたものである。

3　繊細な知的洗練さをもって上述のあのきらめく名前から変化語尾“ＯＴＬ”を省略すると、“ＡＴＬＡＮＴＥ”という言葉になる。

4　無知な学者がいつも考えるように、これは恣意的に選んだ虚しい経験的な語源研究という問題でも単なる偶然という問題でもない ── 語根から説明すると“ＡＴＬＡＮＴＥ-ＯＴＬ”というこの言葉は、ただ我々に大いにそう強調するしかない。

5　ラテンアメリカ民族と地中海沿岸-セム族に共通のアトランティスの幹によってはじめて説明のつく、まぎれもない驚くべき言語学的一致。疑いもなく、あれこれいろいろな物事は、「オシリス」の魔法の国、暗い海にもう沈んでいるアトランティスに起源がある。アトランティスは恐ろしい伝説、怖い遭難、不帰の旅という薄暗い霧の中に隠れてしまった... 。

6　ヘラクレスの柱のかなた、ジブラルタルに、船乗りには克服しがたい神秘の果てしない激浪をさしのべるお前、大海... ！

7　そのようにお前を見つめてきた幾世代の集団の力によって、お前の空間を満たす悲劇の伝説！　詩人は、お前の惨劇のざわめきとお前の世界の水没するきしみ音とを、お前の巨濤（きょとう）の音の中に聞く... ！

8　姿を消した広大な大陸アトランティス！　ただの詩人の夢想、イニシエイトであるプラトンの神聖マインドの産物にすぎないと思われていたが、実在したのである。

9　詩人の直観は精霊のビジョンである。そのビジョンを否定するのは、無限のパワーを用いて見ることができないからである... 。

10　詩人になるとき、はじめて賢人は偉大になる。細部にわたって克己・自制するとき、森羅万象の奥にひそんで我々を高等領域のとりこにしうる調和を感じる... 。

11　そういうわけで『植物の変身』の著者〔ゲーテ〕は『ファウスト』を書き記せた。系統発生論の著者〔ドイツの動物学者ヘッケル？〕は、自らの信念を掲げることができた。

フンボルトは自分の宇宙をつくれたし、神人プラトンは『ティマイオス』と『クリティアス』を著せた。「エウレーカ（分かった、見つけた）」と叫ぶ「ポー」、普遍的生命（それは神秘なるものの気息にすぎない）の詩人全員のように... 。

12 「端から端まで大地をすっぽり包みこむ、その海が見えるのか。」と、マスターはクリストファー・コロンブスに尋ねる。かつてヘスペリデスの園があった。今でもテイデ山はその残存物を噴き出し、修羅場で見ていた怪物のように不気味に咆哮する... 。

13 ここで巨神ティタンたちは戦う。そこで人口密集都市が栄えていた... 。今日、大理石の宮殿にはアザラシがつどい、羊が草を食(は)んでいた草原は藻でおおわれている... 。

14 H.P.B.は、人類学に関する第10、11、12節で一言一句たがえず次のように語る。

そのように二人ずつ七つの領域で第三人種（レムリア人）は、第四人種（アトランティス人）を生んだ。

修羅 Sura つまり神々（完全なる人間）は阿修羅 Asura、「神々ならざる者」（罪人）に変わった。

各領域の第一亜人種は月の色をしていた。第二亜人種は黄金のような黄色、第三亜人種は赤色、第四亜人種は栗色をしていたが、罪のため黒くなった... 。

第三、第四（アトランティス亜人種）は傲慢が増して、「我々は王だ。神々だ。」と言った。

彼らは、まだマインドのない、つまり「狭い頭」の人種の美しい妻をめとって、怪物、有害な悪魔、人間の男と女、また貧しいマインドの「カドス」KHADOS をもうけた。

彼らは巨大都市を建設し... 、自分の大きさに応じて自分そっくりの彫刻をつくり、それを礼拝した... 。

「祖先の地」（レムリア）はすでに内なる火のため消滅してしまい、水は第四人種（アトランティス）をおびやかしていた... 。

最初の大津波が襲ってきて七つの大島が沈んだ... 。善人はみな救われ、悪人は滅ぼされた... 。

生き残った人間はわずかであった。生き残りの中には黄色い人間もいれば、栗色や黒色の人間もいて、また赤色の人間もいた。月の色の人間 ── トゥアーザ ── は永久に消滅してしまった。

第五人種（スペイン人渡航・植民以前の中南米のマヤ族、インカ族、キチェ族、トルテカ族、ナワ族、アステカ族を含む現在地上に住む人類）、聖なる幹から生じた人々（海没から救われた選民）は全員生き残って、初代聖王たちに統治された... 。

蛇（智恵の竜、聖仙(リシ)）たちは再び地上に降りてきて、第五人種の人間と共に諸国をつくり、彼らを教育指導した... 。

15 続いてマヤの一写本の訳文を転載しよう。これは「ル・プロンジョン」LE PLONGEON

の有名なコレクションの一部、トロアノ手稿であり、大英博物館で見られる。

16　6カン Kan の年、ザック Zac 月の11ムルク Muluk に恐ろしい地震が起こり、13チュエン Chuen まで絶えまなく続いた。泥の丘の国、『ムー』の土地はその犠牲となった。

2回揺れた後、たえず地中の火によって揺れ動きながら、一夜にして消えてしまった。地中の火のために大陸各地で数回沈没と隆起をくり返した。しまいには地表は崩壊し、10の国はばらばらになって姿を消した。本書の執筆をさかのぼること8千年前、10の国は6400万人の住民もろとも沈んでしまった。

17　ラサ（チベット）の古寺の大昔の資料室で、紀元前およそ2000年に書かれたカルデアの古文書を閲覧できる。一言一句たがえず、こう書いてある。

「バール」の星が、今では海と空だけがあるところ（大西洋）に落ちたとき、金門と透明な神殿をようする七つの都市は、嵐にもてあそばれる木の葉のように揺れた。

そしてこのとき火と煙のうねりが宮殿からあがり、群衆の断末魔の叫びが周囲をみたしていた。

群衆は神殿や砦に避難所を求めたが、賢者「ムー」、「ラ・ムー」の神官が現れて「このことを私は予言しなかったか。」と言った。すると宝石と華やかな衣装で着飾った男女は訴えた。

「ムー様、お助けください」。だが「ムー」は返事した。「おまえたちは奴隷や富と共に死に、その灰の中から新しい国民が生まれるのだ」。

「もし彼ら（現アーリア人種のこと）が優れた存在にならねばならないことを忘れるなら、手に入れるものではなく生み出すもののために同じ運命をたどるであろう」。

「ムー」の言葉は炎と煙にかき消されていき、陸地はズタズタになり、住民を道連れに数ヵ月かかって海底に沈んだ。

18　かたや東洋のチベットの史書、かたや中米の史書 ― どちらも同じ大惨事を特に語るこれら二冊の史書を前にして、親愛なる批評家は今やどう叫べるというのか。

19　どちらも驚くほど似ているが、さらに証拠が実際に欲しいなら、言語学に頼らねばならないのは明白である。

20　ペルーの〔創造神〕「ビラコチャ」VIRACOCHA が、確かに「ビラージュ」VIRAJ 、神聖な男性、「カビール」、すなわちヒンドゥー教徒の「ロゴス」と同一なのは明らかにはっきりしている。「インカ」INCA（神官-王）というこの言葉は音節を逆にして書くと、「カイン」CAIN と読める。

21　それゆえ最初のインカ族の教義や行いが、東洋のすべてのイニシエーションと無数の本質的関係を保つのは驚くにあたらない。

22　もちろんローマの偉大な歴史家セサル・カントゥ César Cantú は、あるモンゴル部族すなわち大昔の呪術師「シャーマン」と最初のインカ族をたくみに結びつける。これは ― 北方のマヌ Manú （マンコ・カパク MANCO CAPAC）とその高貴な伴侶（コヤ・オ・イアコ COYA O IACO）を思いがけず紹介するにあたって、賢明にもH.P.B.の指摘する不思議な事情が、「シャーマン」の魔術現象に関してたぶん生じた ― と言っているのと同じことである。「シャーマン」は汚れなき存在であり、人類を助けるというはっきりした目的のため、たいてい超感覚的世界の精霊に肉体を貸すが、この驚異は決して心霊術のたぐいと混同してはならない... 。

23　中国語の言いようのない「タオ」TAO は、ラテン語の「デウス」DEUS、フランス語の「ディエ」DIEU、ギリシャ語の「テオス」THEOS、スペイン語の「ディオス」DIOS、またナワトル語、アステカ語の「テオトル」TEOTL と同じである。

24　ラテン語の父「パーテル」PATER は疑いもなく反論の余地なく英語の「ファーザー」FATHER、ドイツ語の「バーテル」VATER、スウェーデン語の「ファーデル」FADER と同じであり、まさにスペイン語の「パドレ」PADRE そのもので、結局は「インド・アメリカ語」の「パ」PA や「バ」BA と同じである。

25　ラテン語の優しい母「マーテル」MATER は疑問の余地なくロシア語の「マーチ」MAT、フランス語の「メル」MERE、英語の「マザー」MOTHER、スペイン語の高貴な「マドレ」MADRE 、またマヤ語やケチュア語の「ナ」NA や「マヤ」MAYA と同じである。

26　単なる衒(てら)いや語源の華やかさ以上のものを指示・指摘する驚くべき語源学的類似...。

27　語源学のこのような深遠さ、歴史の核心、ノーシス最強の鍵のひとつにたどり着くと、正確に言えば「エリ、ラマ、サバク、タニ。」HELI LAMAH ZABAC TANI となる、マヤの儀式用語のあの有名な言葉をかならず思いだすであろう。福音書の四人の著者は、四つの異なったしかたで秘教的にその言葉を解釈する。

28　驚嘆すべきしかたで、偉大なる「カビール」、イエスはカルバリオの丘の荘厳な頂上でそんな言葉を発音した。

29　「今あなたの存在（面前）のプレアルバ〔未詳〕に私を沈める。」（Ahora Hundirme en la Prealba de tu presencia. ）というのが、疑いもなくマヤ語のその意味である。

30　偉大なる秘儀司祭イエスが東洋の「チベット」で「ナーガ〔竜〕」と「マヤ語」を学んだのは確かであり、これは証明されている。

31　チベットの「ラサ」の聖なる僧院には、次のように一言一句たがえず書いてある書物が今でも存在する。

「イエスは、地球に存在したマスターの中で最高の達人になった」。

32　ある賢人の著者はこう言った。

クリストがエジプト、インド、チベットで知った「科学-宗教」はマヤ族のものであったが、そのことは歴史的に証明されている。

マヤの深遠な神秘学が存在し、クリストがそれを知っていたのは確かであり、豊かな愛の理念の支柱として（マヤの）その象徴を選んだ。

自分の説教の計り知れない科学的-宗教的意味を支えるため、たまたまマヤ十字、三位一体、十二使徒、その他多くの象徴を選んだとはもはや考えられない。

33　明らかにアトランティスのマヤ族が、中米にその宗教-智恵をもたらした。

34　マヤ族がチベット、バビロニア、ギリシア、インドなどを植民地化したのは明白である。「カビール」、イエスの儀式用語がマヤ語であったのは疑いない... 。

35　ラテンアメリカ民族と地中海沿岸-セム族に共通のアトランティスの幹によって、はじめてこのことをそっくり説明できる。

36　「アナワク」族は他のすべての「インド・アメリカ」族と同じく「アトランティス」からやって来た。ある一部の無知な学者がいつも考えるように、決して北方から来たのではない。

37　「インド・アメリカ」族は有名な「ベーリング」海峡を通ってアジア大陸からやって来た — そういう考えを力説する無知な者たちは絶対まちがっている。なぜなら「アラスカ」にも、それどころかベーリング海峡にも、そのあたりを人種の通った痕跡がみじんもないからである。

Fig. 9

第８章
聖蛇

1　ノスティックの宗教教義では、「竜（ルシファー）」、蛇、子山羊、今では悪と呼ばれる諸力の全象徴の真の意味がいちばんよく理解できる。

2　もし蛇が悪魔の象徴であったならば、偉大なる「カビール」、「イエス」は蛇のように賢くふるまうよう弟子たちに勧めなかったであろう。また「オフィス派」つまり「拝蛇教団」のエジプト・ノスティックの賢人たちも、神智「ソフィア」の象徴として生きた蛇を儀式で崇めなかったであろう。

3　アステカの蛇は、有機的決定論を完全にくつがえす突飛な状態でまちがいなく現れる。奇妙にも大地の泥からもたげようとして、第二の頭と入れ替わったしっぽは、火の発達の基盤として機能する。

4　何度も「アナワク」文化の蛇身は、本性に根本的変化をもたらす異常な動きに改められる。

5　ある時は二重の頭。それは自分のしっぽを飲みこむというあのノーシス的恍惚にある環状の姿をまざまざと思い出させるが、主「ケツァルコアトル」の驚くべきメッセージを特別に総括したものである。またある時は、しっぽをもたげた直立姿勢。それは人間の霊と魂を飲みこむ神蛇に関する「マヤ」や「ナワトル」の考えを物語っている。つまり動物的エゴを焼きつくし、全滅させ、灰にする性の炎...。

6　人間は「ロゴス」と同一であり、その「ロゴス」という自分自身のエッセンスにそのようにして帰還するよう、蛇すなわち「救世主ロゴス」は人間に霊感を与える。

7　奈落の水は疾風を（似たようなそのシューという音によって蛇を）生じ、その疾風に持ちあげられた水は魂や光と接触することになり、蛇は混沌の物質を荒しまわって、そのように三つの原理の混ざり合った人間を生み出した。

8　高等な光の唯一の考えは、自分の失った小片を取りもどせるということである。

9　そして混沌の子宮は蛇のみを望み、知っているので、光り輝く「ロゴス」は、闇に溶けた光を取り返すべく形をとった。このため完全なる人間は聖母の胎内に降りたが、子宮の恥ずべき神秘を知って苦しんだばかりか、その後に立ちあがり、我々を束縛する形態を捨てて天衣を着たいと望む者全員が飲むべき清水を杯で飲んだ。

10　聖なる蛇、救世主「ロゴス」は「箱（箱船）」の底に丸く縮こまって眠り、神秘的に見張り、目覚めさせられる瞬間を待っている...。

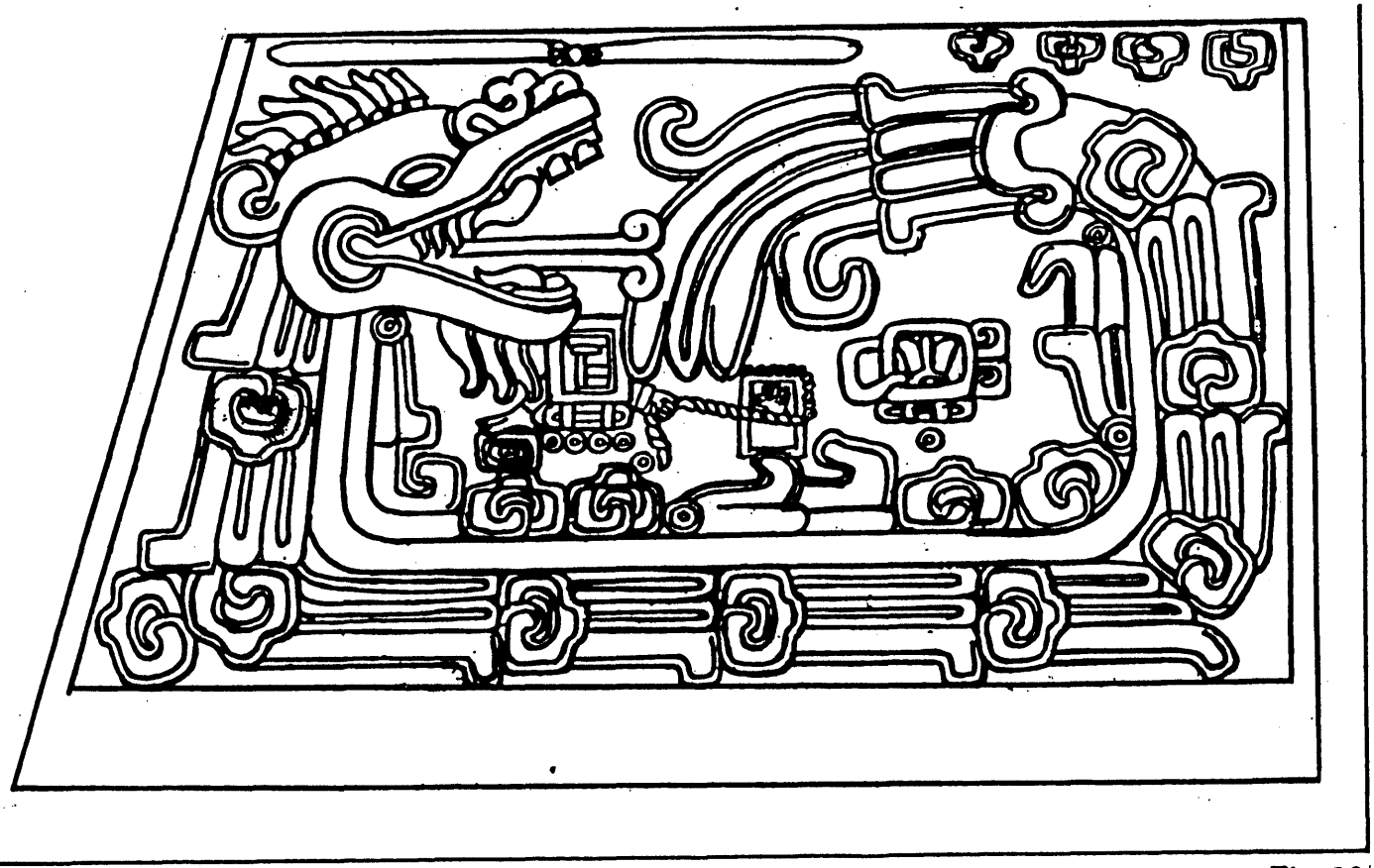


Fig. 10

11　「ナワトル」や「ヒンドスタン」の秘教的生理学を研究する者は、驚異的な磁気センターが肛門と性器の中間地点、脊柱基底に位置するという超越的考えを強調する。

12　その「チャクラ」のまん中には、肉眼には見えないが透視力、第六感では知覚できる黄色い正方形がひとつある。その正方形はヒンズー教徒によれば地の要素を表すという。

13　その正方形の中には「ヨニ」、「子宮」が存在し、「クンダリニー」と呼ばれる神秘的なサイキック・エネルギーの蛇が巻きついている性愛の「リンガム」、「男根」が、ヨニの真ん中にあると言われてきた。

14　「稲妻のように光り、一連のきらめく光のようにこの蓮（磁気センター）の空洞に輝く」。アジアのタントラ経典では「クンダリニー」はそのように描写されている。

15　性器と肛門の間という突飛な位置だけでなく、その磁気センターの秘教的構造も、反論できない堅固な基礎をインドとチベットのタントラ・スクールに与えてくれる。

16　疑いもなく、「サハジャ・マイトゥナ（性魔術）」によってはじめて、その蛇を目覚めさせることができる。

17　聖蛇が覚醒して、人体の脊髄管に沿って上昇を始めるとき、棒であおられた蛇の発する音によく似た神秘音を発するのは明白である。

18　疑問の余地なく大密儀の蛇は「ロゴス」の女性的側面、母神、「シバ」の妃、「イシス」、「アドニア」、「トナンツィン」、「レア」、「マリア」すなわち「ラム・イオ」RAM-IO、キュベレ、オピス、デル Der、フローラ、パウラ Paula、イオ、サンスクリットの偉大な母「アッカ」、「ラー」やラーレスやこの世の魂の女神、「ウイチロポチトリ」の悲嘆に暮れた母、トルコの白い女神「アク」、イニシアチックな密儀の Calcídica〔未詳〕な「ミネルバ」、「チチェン・イッツァ（ユカタン半島）」の月の神殿の「アカ・ボルスブ」AKA-BOLZUB 等である。

＊オピス…〔ギリシャ神話〕アルテミスに救われた乙女。
＊フローラ…〔ローマ神話〕花と豊穣と春の女神。
＊イオ…〔ギリシャ神話〕アルゴスの王女。ゼウスに愛されたが、ヘラの嫉妬を避けるため白い雌牛に変えられた。
＊ラー Lha…最高圏の魂。ダライ・ラマの住むラサ Lhassa の由来。ラーという称号は偉大な神秘力を獲得したナルジョル（聖者やヨギ・アデプト）にチベットではしばしば与えられる。（H.P.B.著『神智学用語辞典』）
＊ラーレス Lares…肉体を離れた人々の幽霊。魂の脱け殻。（H.P.B.著『神智学用語辞典』）

19　身廊の原始的形態 ― 普遍的大洪水つまりアトランティスの大惨事に備えた救いの船、ノアの箱船 ― のかわりに、たとえばローマの聖パウロ教会のようなもっとも栄光ある教会の交差廊や平面図には、古代密儀の失われたなごりが今でも保存されている。その船に乗って「ノアたち」、「ケツァルコアトルたち」、「クシスストルス〔カルデアのノア〕たち」、「デウカリオンたち」は全員、現大陸に到着した。それゆえ、Vitrubio、Procopio (De Aedificationem)、Becchi (Det Calcidio o Della Cripta Di Eumachia)〔未詳〕、その他の、この交差廊の歴史がつくられる建築書に見られるように、聖地として家庭でも、ギリシアの家の残りの部屋を客室と分け隔てる内部の回廊は Calcídico と呼ばれた。この交差廊は、人々の間に歓待の念を抱かせていた義務の、効果のある象徴的「タウ（T形十字）」である。

＊デウカリオン…〔ギリシャ神話〕プロメテウスの息子。ゼウスの起こした洪水に妻ピラと共に生き残り、人類の祖となった。

20　直立した「男根」を「子宮」内に挿入すると外見上は十字になるが、これは誰でも確かめられることである。

21　Sと「タウ」、十字、Tの密接な関係について大変真剣に熟考するなら、生理的オルガズムを徹底的に拒否した「リンガム-ヨニ（男根-子宮）」の交差によってはじめて、魔力を持つ火の蛇「クンダリニー」が覚醒できるという論理的結論に達する。

22　雲を群がらせる者、激烈な「ゼウス」の十字をなす稲妻は、オリンポス山を震わせ、哀れにも苦悩するこの人類の間に恐怖をもたらす。

23　天地の火、潜在する「フォーハット」は構成や分解、発生や消失し、あるいは生気を与えたり混乱させたりするが、それは十字をなす。

24　衰弱衰退して物質に束縛された聖火 ― それを生み出す太陽の子、それを解放、維持し、とほうもない驚くべき革命を引き起こし、救済を導く人間のしもべは十字架上の「イエス」である。それは自然全体に具体化した、火を放つ驚くべきイメージである。

25　それは「偉大なる昼」の始まり以来いけにえになった「神の小羊」であり、また有名な年老いた火の神「ウエウエテオトル」でもある。その火の神は古代「テオティワカン」文化では巨大な火鉢を千古の頭の上で支える、年を経た長老として表現される。

26　疑いもなく、性の火の神は「マヤ」民族、「ナワトル」民族の最古の伝説のひとつに明らかに相当し、住まいやアステカ神殿のまんなかで焚き火をするための聖なる火鉢だけでなく、大地の四方とも直接関係する中心の「神」である。それゆえごく普通に炎の神の秘儀司祭たちに聖十字の神秘模様が見られる。また「トレマイトル」TLEMAITL ― 火の手 ― と呼ばれる吊り香炉の飾りもあり、それを用いて神官たちは聖なる神々にいつも香を

たいていた。

27　疑いもなく、ベーダ文献の火の神「アグニ」とよく似た、ウエウエテオトルと同じくらい古い一柱の神にも実にいろいろな名前がついている。その神名「シウテクトリ」XIUH-TECUHTLI の深い意味は「年の主」、「草の主」、「トルコ石の主」である。少し異なった発音「シウウイトル」XIUHUITL という言葉には以上のような三つの意味があり、この名前は中米の八百万（やおよろず）の神々に見られる。

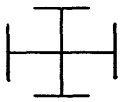
28　この神をそのように表現する場合、賢明にもトルコ石のすばらしいモザイクからなる、一種の青い司教冠をかぶっているのは何ら不思議ではない。それはメキシコ大文明の強大な王たちのごく変わった特徴であった。

29　その「ナワトル」つまり秘教的に変装したものが、特徴的な火の蛇（「クンダリニー」）、「シウコアトル」XIUHCOATL である。言葉にできない七つの星の飾りつけのある見事な角が一本、ちょうど鼻の上についているからである。

30　「ナワトル」と「マヤ」の概念では、大密儀の聖なる「スワスティカ」は、動きのある十字としてつねに定義された。それは「ナワトル」の「ナウイ・オリン」、宇宙運動の聖なる象徴である。

31　「スワスティカ」の可能な二つの向き〔卍と逆卍〕は、男性原理と女性原理、自然の積極的原理と消極的原理をはっきり表現する。

32　まったく二重の、正方向と逆方向の二つの「スワスティカ」は、まぎれもなく各先端がT字形の十字（クロスポテント、エルサレム十字）をなし、この意味では男女の性愛の交合を表す。



33　アステカ伝説によれば男女一組のカップルがいて、火を発明したというが、運動する「十字」を用いてはじめてこれが可能となる。

34　「インリ」INRI：イグニス・ナトゥーラ・レノバトゥール・インテグラ（Ignis Natura Renovatur Integra.）。火はたえまなく自然を新たにする。

第９章
聖アンデレ形十字

1　漁師の隠者アンデレは「クリストゥス」・ヨハネに謙虚に仕えていたが、それから偉大なる「カビール」、イエスの弟子になる... 。

2　太陽人類のクリスティックな福音書によれば、実際、偉大なる存在はその秘教的使命を始めるにあたって、ガリラヤ湖に臨む町カペナウムに行った。預言者イザヤはこの町についてこう語った。「暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った」（『マタイ』４：16）。

3　それから「太陽ロゴス」は湖のほとりを歩いているとき、「人間をとる漁師にするため」（同章第19節）漁師のペテロとアンデレを最初の弟子にした。

4　聖火によってそれほど多くの驚異が実現する「ゲネサレ」（GENESARETH 又は JAINE SARETH）湖 ── 「ヒーナス」の象徴的湖 ── の奇跡の漁で、アンデレはノスティック大司祭イエスを助けた... 。

5　偉大なる「カビール」の死後、アンデレがさまざまな復活と奇跡を実現したと命の書に金字で書いてある... 。

6　昔の伝説によれば、ニケアでは、旅人を殺害している七人の邪悪な悪魔が、不吉にも陰気にそこらをうろつき回っていたという。公衆意識のおごそかな判断のもとに、アンデレは悪魔を犬に変えた後、そのあたり一帯から追放した... 。

7　謎と驚異にみちたアンデレの異例の拷問のために、X形十字架は有名になった。アンデレの四肢は、情け容赦なく別々にX形十字架にしばられた... 。

8　この象徴的なXは確かにギリシャ語のχ（カイ、キー）であるが、これはクリスティックな秘教の中で最も価値ある象徴のひとつであったし、今も、またいつまでもそうである ── 疑いもなく、誇張なしに厳かにこう断言できるし、また断言すべきである... 。

9　多くの神秘結社がアンデレの魔術記号を採用した。X ── 「クレストス」 ── 魚等。

10　アンデレがスコットランドの秘教友愛結社にとりわけ受け入れられたのは明らかである。そんな団体がアザミを象徴的な植物と見なすことを、この『クリスマス・メッセージ 1974－75』で強調するまでもないが、それは証明されている。

11　疑いもなく、スコットランドには幾世紀もの間、アザミの聖アンデレ神秘友愛結社がいろいろ存在した。

12　これは幾度となく繰り返されてきたことであるが、トマス・ア・ケンピス、ゲーベル、ライムンド・ルリオ、ニコラス・フラメル、センディボギウス、アルベルトゥス・マグヌス、聖トマス・アクィナス、ウィゲリウス Wigelius、ロジャー・ベーコン、マサイア・コルナックス Mathia Kornax、パラケルスス、アルナルド・デ・ビリャノバ Arnaldo de Villanova のような傑士をはじめとする大勢の者たちは、似たような友愛結社の活動的メンバーであった。

13　もし秘儀司祭イエスが血の流れる背中で十字架を背負うように、世の罪を消し去る神の無垢な子羊が、象徴的な十字架を「旗」の上にのせるなら、もしある聖像に見られるとおり勇ましく旗を脚で支えるなら、それは聖なる記号がまさにその脚に鮮やかに刻まれているからである。

14　聖なる「フォーハット」の言語に絶する魂を受ける者は、自分にそれを宿し、栄光あるその記号がしかるべくついている。確かに、真理の名において我々は言うが、彼らは火の要素を恐れる必要はない。

15　この者たちは正真正銘の太陽の子、エリヤの真の弟子であり、祖先の星を道しるべと見なす... 。

16　聖アンデレ形十字と聖ペテロの不思議な鍵は、同じ錬金術的、カバラ的価値を持つ二つの驚くべきレプリカである。だから十字の記号、われらの主クリストの崇高な組み合わせ文字は、「大作業」の働き手に勝利を保証できる印なのである。

17　パレンケの十字の中央の交差には、ヘブライのカバラの生命の木が置かれている。これはまさに古代メキシコの不思議である。

18　疑いもなく「善悪の知識の木」と「生命の木」は同根である。

19　決して忘れてはならないが、アストラル界でコンスタンティヌス大帝が見た輝く十字のまわりには、あの預言の言葉が現れた。それから大帝は喜んで軍旗(ラバルン)にその言葉 "In Hoc Signo Vinces." （「この印によりて汝は勝たん。」）を書き入れさせた。

20　性的な十字 ― リンガムとヨニの交差のなまなましい象徴 ― には、クリスト物質を犠牲にするため用いられた三本の釘のまぎれもない不思議な跡が残っている。それは鉄と火による三段階の浄化のイメージであり、その浄化がなければメキシコの主「ケツァルコアトル」は復活できなかったであろう。

21　十字は、るつぼの錬金術的な古代象形文字である。昔のフランス語では、るつぼ（creuset）は cruzol、crucible、croiset と呼ばれていた。

22　ラテン語で crucibulum（るつぼ）は、語根として crux、crucis（十字）を持っていた。明らかに以上のことには深く考えさせられる。

23　大作業の原料（マテリア・プリマ）が主の受難を実に忍耐強く体験するのは、るつぼにおいてである。

24　性の錬金術のエロチックなるつぼの中で「エゴ」は死に、「フェニックス」は自らの灰の中からよみがえる。

25　「インリ（INRI）」：「イン　レギス　レナスコル　インテゲル（IN REGIS RENASCOR INTEGER.）」。死において元どおり汚れなくよみがえる...。

26　「死は勝利にのまれた。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。墓よ。おまえの勝利はどこにあるのか」〔『コリント人への手紙　第一』15：54、55〕。

27　ロジャー・ベーコンは、『アゾト（水銀）』という不朽の名著（東洋の力強い智恵の聖典「アスグ」AZUG）に確かによく似た書物）の超越的な挿絵で、錬金術の不思議な蒸留器の中に横たわる腐乱死体をつうじて錬金術の作業工程の第一段階を紹介する。

28　錬金術記号をすべて持つ、光り輝く太陽、おぼろ月、我々の「オルス太陽系」惑星。それらは本来その場面に対応し、そこではっきりと目につく。

29　死者の間からよみがえろうとするかのように、あの死体が頭をもたげているのを見ると奇妙である。

30　「エッセンス」が肉体を捨てる一方で、「性の錬金術」の黒ガラスは肉を骨から離す。

31　後でイニシエーション、リアリティーで生き返る世俗的な死体というこのイメージは、一点の疑いもなく、単刀直入に言うとオシリスの驚嘆すべき象徴である。

32　「肉は骨を捨てる」。アザミの聖アンデレ友愛結社およびそれに類似した結社の典礼に出てくる言葉。

33　「第三ロゴス」の「実験室（ラボラトリウム）-小礼拝堂（オラトリウム）」での親愛なる「エゴ」の絶滅。それが恐るべきX形にはりつけられたアンデレの拷問の深意である...。

34　俗悪ないかなる火でも決して実現できない、不可欠の恐ろしい死。

35　術によれば、この作業には神秘力の特別の助けが必要となるのは明らかである。それは性的タイプの秘密の火であり、大ざっぱに述べると炎よりもむしろ水のように見える。

36　この火、つまりこの燃える水は、「ロゴス」が不活発な物質に伝える生命の火花である。それは全創造物に含まれる神聖な「フォーハット」であり、アデプトの脊髄管を上昇する火の光線、「クンダリニー」、「アナワク」の智恵の聖蛇である。

37　「エンス・セミニス」を射出しない「リンガム-ヨニ」の結合は、確かに、「アダム」と「イブ」が神秘解剖体の土星（サトゥルヌス）の蛇を目覚めさせることのできる特別の鍵である。

38　疑いもなく、アルテピウス・デ・ポンタノ Artephius de Pontano と『哲学の火の書簡』Epistola de Igne Philosophorum という作品を精読するのはまさに時宜を得ている。なぜならそれらの不朽のページに、読者は、この「水のような火」または「火の水」の完全な特徴と本性に関する貴重な指摘を見いだせるからである。

＊アルテピウス…錬金術の大哲学者。その真の名前は誰も知らなかったし、その作品は日付がないが、12世紀に秘密の書を書いたことは知られている。伝説によれば、当時１千歳だったという。現在バグダッドの一錬金術師の所有している、夢に関する彼の書物が一冊あり、過去・現在・未来を眠りの中で見て、見たものを思いだす秘密をその書物の中で公表する。現存するこの写本のコピーは二冊しかない。（H.P.B.著『神智学用語辞典』）

39　「アナワク」の威厳ある聖なる神殿の石畳の中庭で、人間と太陽のイニシエーションの志願者、男性と女性はおたがいに愛撫をやりとりしながら、「リンガム-ヨニ」の結合を行い、それから「エンス・セミニス」を射出せずに化学的交合から身を引いていた。そのように土星の蛇を目覚めさせていた。

40　「エンス・セミニス」を創造エネルギーに性的に変換するのは、確かにヘルメス学の基本的公理である。

41　体内における驚嘆すべきこの種のエネルギーの二極化は、メキシコ、ペルー、エジプト、ユカタン半島、ギリシャ、インド、チベット、フェニキア、ペルシャ、カルデア、トロイ、カルタゴ等のイニシエイト団で古代からとても入念に分析された。

42　８の字形に背骨の左右に走る、ある一対の神経索のおかげで、精液エネルギーは脳まで超自然的に上昇できる。

43　中国の哲学では、この対の神経索は「陰」、「陽」という古典的名前で知られている。そして中庸の道「タオ」は、蛇の上昇する秘密の管、脊髄管である。

44　明らかにこれら二つの管のひとつめは月の性質をおびていて、ふたつめは太陽タイプに属する。

45　月原子と太陽原子が尾骨付近のトリベニで接触するとき、魔力をもつ火の蛇が目覚める。

46　ヘブライのカバラ学者は、「生命の木」に登場する神秘的な「ダート」について語るが、神名もいかなるたぐいの天使群もそれに振り当てられず、またこの世の記号、惑星、要素（エレメント）も持たない。

47　ヘブライ密儀のセフィロト、「ダート」は、秘密に存在する父、「アバ」と至高なる母、「アマ」の秘教的結合によって生じる... 。

48　父と母、「オシリス」と「イシス」は永久に「イエソッド」、基礎、第九セフィラー、性で結びついているが、ダートの神秘で隠れている。ダートつまりタントラの知識は「サハジャ・マイトゥナ（性魔術）」で機能する。

49　分極した創造のこれら二つの面 ── 秘密に存在するわれらの父と聖なる母「クンダリニー」 ── の間で、生命の織機が織っては、ほどいているのが見られる。

50　昔の伝説によると、稲妻のようなこうごうしい姿をした神である愛人ゼウスを見ると、ディオニソスの母セメレは燃えて爆発し、早産した。

51　確かに誰も、死なずに神を面と向かって見ることはできない。自我、私自身の死があって、ようやく「日の老いたる者」の輝くばかりの顔を見ることができる。

52　生命が、つねにより完全な段階的外面化つまり外向性の過程を表すのと同じように、エゴの死は段階的な内面化の過程である。その内面化の過程において個人意識、純粋なエッセンスはゆっくりと無用な服をぬぐ。それは象徴的に下降した「イシュタル」が、運動から解放された生命の偉大なるリアリティー（実在）の前で、ついには一糸まとわぬ姿となって、自分自身に目覚めるのと同様である。

53　疑いもなく、今では動物的エゴの中に閉じこめられた心霊的エッセンスを構成する光がきらめき、光り輝きはじめるよう、エッセンスを解放せねばならない。しかし私はまことに読者に言うが、これは恐るべき仏教的寂滅、「我」の溶解、自分自身に死ぬことを経てはじめて可能となる。

54　確かに性エネルギーは、大いに爆発性のある大変な驚くべき力である。性愛の武器、魔術契約の槍の使いかたを習得する者は、心理学の「我」を宇宙の砂ぼこりにできるであろう。

55　もったいぶって言うまでもなく、男性の性力の神秘学的象徴としての槍は、救いと解放の道具となって東洋のおびただしい伝説で大きな役割を演じる。ノスティック行者はそ

れを賢明に振りまわして、エゴ、自我、私自身を形成する好ましくない要素の集合体をことごとく灰にできる。

56　ロンギヌスは、われらの主クリストの受難では聖ミカエルや聖ゲオルギウスと同じ秘教的役割をはたす。カドモス、ペルセウス、イアソンが異教徒の間で似たような役割をするのは疑いない... 。

＊カドモス…〔ギリシア神話〕竜を退治しテーベを建設しアルファベットをギリシャに伝えたフェニキアの王子。

57　天の騎士やギリシャ神話の英雄のように、槍の一突きで竜を貫いたり、クリストのわき腹に突き刺したりするのは、たいてい意味深長である。

58　聖アンデレ形十字と聖槍は、寓意によって仏教的寂滅の全ワークを完全に表現する。

59　深い尊敬の念をいだいて聖アンデレ形十字と聖槍にふれる際、聖杯を忘れるという許しがたい過ちを決して犯さないでおこう。

60　万教の聖なる大杯（クラテル）は、生殖さらには再生のための女性性器を表すが、それは確かにプラトンの宇宙創造の容器、ヘルメスとソロモンの杯、古代密儀の神聖な壺に対応する。

61　われらの肉体の母や蛇女はメキシコの伝説では有名であり、それらの伝説は幸福で純粋無垢な原始状態から堕落したことを表現する。

62　ゾロアスター教の経典によれば、最初の男性と最初の女性は汚れなき者として創造され、自分たちを創造した神アフラマズラに従っていた。二人を見て幸福なことに嫉妬を感じたアーリマンは、蛇の姿で彼らに近づき、果実を贈って、自分こそ全宇宙の創造主だと確信させた。彼らは信じて、そのとき以来彼らの本性はすっかり堕落してしまった。

63　ヒンドゥー教徒の遺跡と伝説は、アダムとイブおよびその堕落を我々に確信させる。この伝説は同様に仏教徒やチベット人の間にも存在するが、中国人や古代ペルシャ人に教えられたものである。

64　こうして原罪はエゴの根源、自我、「私自身」の原因の原因なのである。

65　この人生の入口で赤ん坊を清めるため、さまざまな民族の間で行われていた罪ほろぼしは、実際に「性魔術」の契約を結ぶことである。

66　メキシコのユカタン半島では赤ん坊を神殿に連れていって、神官は洗礼の水をその頭に注ぎ、名前をつけていた。カナリア諸島では女性が神官のかわりにこの役目を果たして

いた。

67　アダムとイブは楽園の木の幹の左右にべつべつにいつも姿を現す。ほとんどの場合、幹にからみついた蛇は人間の頭で描かれる。

68　洗礼の秘蹟の性魔術の契約をきちんと果たすことによって、はじめて原罪を消し、楽園にもどることができる... 。

69　「ヤキン」と「ボアズ」、「ウリム」と「トンミム」、「アポロ」と「ディアナ」は確かに智恵の神殿の主要な二本の柱である。

＊ウリムとトンミム…古代ヘブライにおいて大祭司が神意を問うために用いた一種の占いの道具。胸当てにおさめられた。

70　神殿の二本の柱のまんなかには大作業の鍵、アルカーノA. Z. F.がある。

71　ゲーテは自分の聖なる母「クンダリニー」、「タオ」の道（脊髄）を上昇する聖蛇を礼拝しながら、うっとりと叫んでいた。

こよなく美しき意味で純潔なる処女よ、
ありがたきおん母よ、
われらの女王よ、
神々と肩を並べ給う女人よ... 。
〔『ファウスト』第二部　第五幕　高橋義孝訳　新潮文庫〕

72　今ここで自分自身に死ぬことを熱望し、あの偉大なイニシエイトはどの心理的間違いも完全に理解しつくした後、「形而上学的交合」の間、全霊をこめて叫んでいた。

矢はわれを射よ、
槍はわれを貫け、
杖はわれを砕け、
雷火はわれを焼け、
仇(あだ)なるものはみな吹き散らせ。
永遠の愛の核心たる
永劫(えいごう)の星を輝かしめよ。〔『ファウスト』第二部　第五幕〕

73　理解と除去、ほら、そこに聖アンデレ形十字の鍵がある。そのようにして一瞬一瞬死んでいく... 。

74　あらかじめすべてのマインドレベルで完全にひとつの心理的欠点を理解して、はじめ

て根本的にそれを取り除ける。

75　「化学的交合」の間、デビ・「クンダリニー」、我々個人の私的な宇宙の母は、本当に理解した心理的欠点を破壊するため、聖槍、ミネルバの投げ槍、アキレスの槍、ロンギヌスの武器を握れるし、またそうせねばならない。「求めなさい。そうすれば与えられます。たたきなさい。そうすれば開かれます」。〔『ルカ』11：9、『マタイ』7：7〕

76　いにしえの伝説によれば、主「ケツァルコアトル」は堕落の直前こう言っていた。「豪華な羽飾りのわが家、カタツムリ（巻き貝）のわが家、私は置いて行かねばならないという」。

そのとき、うれしそうに王は王妃を美しいマットのところに連れてくるよう命じた。「王妃『ケツァルペタトル』（ヘブライ神話のイブ）のもとに行って、連れてきなさい。酔うまで一緒に酒を飲みに飲むためだ。妃はわが人生の喜びである」。

召使は『トラマチワヤン』の宮殿まで行って、そこから王妃を連れてきた。

「王妃様、『ケツァルコアトル』王の命令で、あなた様をお迎えにまいりました。楽しみを共にしたい、とのことでございます」。

王妃は召使に返事した、「行きましょう」。

『ケツァルペタトル』が到着すると、王のそばにすわりに行った。召使は四杯飲み物を王妃に与え、五杯目はその立派さを祝してのものであった。

そして王妃が酔っぱらうと、魔術師たちは歌いだし、『ケツァルコアトル』王みずからがよろめいて立ち上がり、歌のさいちゅうに「妻よ、このリキュールを飲んで味わおう。」と言った。（色欲というリキュールのことを言っている）。

二人は酔っていたので、もはや理性的に何も話さないでいた。（好色家は道理を解さない）。

王は罪ほろぼしの苦行もせず、儀式の水浴にも行かないばかりか、神殿に祈りに行かなかった。ついに二人は眠りに降伏した。そして後日、目が覚めると二人は沈みこんで、胸が締めつけられた。

77　（ヘブライ神話では、禁断の木の実を食べた後にアダムとイブも深く沈みこんだ。ふたりの目は開かれ、それで自分たちが裸であることを知った。そこで、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った）。

それから「ケツァルコアトル」は言った。「私は酔って罪を犯した。私が自分につけた汚れを取り去ることのできるものは何もなかろう」。それから見張りたちと共に歌を歌いだした。外で待っている群衆をもっと待たせた。

すでに悪行が知れ渡っているのがわかると、苦しみ、涙ぐみ、後悔と悲しみの念にみたされて、慰めてくれる者は誰もなく、神の前で泣きだした。

78　（ナワトルの叙事詩の原文どおりであるこれらの言葉は、我々を瞑想にいざなう）。

Fig. 11

ヘブライの聖書の以下の数節を読むなら、引きつづき起こる出来事は容易に察しがつく。

そこで神である主は、人をエデンの園から追い出されたので、人は自分がそこから取り出された土を耕すようになった。
こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。（『創世記』3：23、24）

79　「ケツァルコアトル」の逃走、楽園「トゥラ」からの不可解な脱出、それは確かに普通ではなく突飛である。

80　そのとき金銀、赤貝、それにトルテカ芸術のありとあらゆる美しいもので飾られた数件の自宅を全部燃やしたという。

そこ秘密の場所、つまり山中か、さもなくば崖の中に、すばらしい芸術作品、美しく貴重な芸術作品をすべて埋めて隠した。

81　後で捜して見つけ出さねばならなかった莫大な無尽蔵の宝。地中に隠された秘教的富。

82　賢明に錬金術のノーシス用語に翻訳すると、最高だとはっきりする「アナワク」の神秘の段落。

83　あらゆる性的堕落にいつも続いて起こる出来事、あるいはいつも当然起こるべき結果、それが「魂の黄金」の縮小である。

84　「すばらしい芸術作品」、「美しく貴重な芸術作品」にふれる際、大作業の聖守護聖人サンティアゴ（ヤコブ）の偉大な普遍的手紙の行間を研究するほうがいい。（ヘブライの聖書参照）。

＊新約聖書『ヤコブの手紙』のこと。邦訳書『ロゴス・マントラ・テウルヒア』P.77－P.80 に解説がある。

85　「エノク」はモリヤ山の山中で「不朽の隠された宝」を発見した。我々ひとりひとりは彼の失われた遺産を捜すべきである。

86　「宝」は決して地上では見つからない。宝を見つけだすには黄泉の国に降りる必要がある。

"VISITA INTERIORA TERRAE, RECTIFICATUR INVENIES OCULTUM LAPIDUM."
（地中を訪ねよ。精留によりて汝は「神秘の石」を見いださん）。

Fig. 12

87　疑いもなく「ケツァルコアトルの宝」とは、超越的な宇宙パワーと美徳を象徴する、「賢者の石」と天のエルサレムのすべての宝石のことである。エデンの園を出たときから隠したままの、我々個人のその内心の富を今ここで我々自身の内部に捜さねばならない。

88　「老木」の前で主はその表面を見ると、かぎりない悲しみにみたされて「私は老人だ。」と言った。

　また再び別の場所に着いて、休みだした。石にすわって両手をその上に置いた。「トゥーラ」をじっと見ていると泣きはじめた。

　主は大声ですすり泣いていた。ひょうのような二筋の滴がたれていた。滴がほおを転がり落ち、涙で岩に穴があいた。涙の滴がぽたぽた落ちて、石自体に穴があいた。

　岩に置いていた手はしっかり刻印され、まるで岩が泥でできているかのように手形が残った。手と同じく尻の跡も岩に残った。すわっていた石にしっかりと刻印されて跡が残った。「テマクパルコ」と呼ばれるその地では、今でもその手の跡が見られる。

89　実際「厳密な意味（ストリクト・センス）」で、「岩」、「石」（性）には人間を奴隷にすることも解放することもできる卓越した性的電気が隠されている。

90　意味をはっきりさせるこれらの注記には、よく考えさせられる。「ケツァルコアトル」の身に起こった出来事は、つねに驚くべきものがあり、生々しい現実問題である。

91　確かに我々は意味を説明しているのではなく、ただ現象学の方法で「ケツァルコアトル」のメッセージを解説したいだけである。

92　聖者は大いに苦しんだあげく、「石橋」という地名の場所にたどり着いたといわれる。

　水がこの場所にはある。「エンス・セミニス」、こんこんと湧きあがる水、広がって流れてゆく水。

93　現代の人類学者たちは違うふうに、ばらばらに間違って解釈してしまったが、「アナワク」の秘教について何も知らない。これらの叙事詩の宗教的意味を知らないのである。

94　これはノーシス主義とは「まったく」無関係のように思えるが、実はそうではなく、次のことを声高に強調すべきである。「福者は、かつて捨てた道にもどった」。彼は岩をひとつ切り離して、橋をつくり、向こう岸に渡ったという。

95　そのようにしてアステカ族の偉大なアバターラは再び道を歩みはじめ、「蛇の水」という場所にたどり着いた。

96　アラビアの著者たちはこの泉を「ホルマット」HOLMAT と名づけるばかりか、その水が預言者エリヤを不死にしたことをさらに我々に教えてくれる。彼らはその有名な泉を「モダラン」MODHALLAN に位置づける。「モダラン」という言葉の語根は「闇に包まれた暗い海」を意味するが、これは「金属的な混沌」、神聖な精液、つまり大作業の原料を指し示す。

97　この知識は理性主義的な通常の分析を越えており、グルの助けによってようやく理解し把握できる「超理性主義的〔別訳：直観的〕」タイプの教えを問題にしている。。

98　我々に必要な「セルウス・フギティウス（脱走奴隷）」は、液化しやすい石の外観をした、冷たい固体の「金属質のミネラル・ウォーター」である。

99　石塊の形をしたこの凝固した水が「アルカエスト」であり、普遍的溶剤、蛇の水、神聖な精液の金属質の霊、秘教哲学のメルクリウス（水星）、性エネルギー変換の驚くべき産物である。

100 賢者たちは、いつも哲学のメルクリウスに関して用心深く口を閉ざす。賢明な操作者は、メルクリウスの連続する顔を好きなように向けることができる。

101 もし技術が、ある時間と努力を要するなら、それは代償として極端にシンプルである。専門知識もプロの特殊技能もいらないが、ただ好奇心をそそる技巧の知識だけが必要となる。我々ノスティックが公表ずみの「秘中の秘」である。すなわち「『ヘルメスの杯』を一度もこぼさない『リンガム-ヨニ』の結合」。

102 カール・ミーグ Karl Meagh は言う。「筋肉の緊張期に逆流の前に、今にも射精しそうな感覚が生じるときは、舌をできるだけ後方に倒して、息を止め、精液の流体を引きとめる」。

103 「ムーラダーラチャクラへの集中エクササイズの実践のような、肛門の筋肉〔括約筋〕の収縮も勧められる」。

104 「精液の金属質の霊」はヘルメス、それ自体「神秘の黄金」を生みだす染色用のメルクリウスであり、同じようにして聖クリストバルはイエスを背負い、子羊は自分の羊毛を身につける。

105 まさに秘教哲学のメルクリウスによって福者、主「ケツァルコアトル」は、自らの霊と魂と「本質的存在の高次的実在体」に黄金を再生させた。

106 むなしくも闇の住人たちは、聖者を罪深い過去に連れもどそうとする... 。

「絶対にもう私はもどれない ― 主は答える ― 行かないと」
「『ケツァルコアトル』、どこへ行くのです」
「赤色の地へ、知識を獲得しに」
「ではそこで何をするつもりです？」
「私は呼ばれて行きます。太陽が私を呼ぶのです」
「わかりました。それではトルテカ文化を捨てるのですね」
そうして聖者は水に宝石の首飾り ― 有形財産、この世の見せかけの物 ― を投げつけると直ちに沈んだ。それ以来、その場所は「豪華で小さな宝石の水」と呼ばれる。

107 もう少し進んで行くと「人々の眠り場所」という別の場所に着く。（あちこちにある古典作家の黄泉の国「オルクス」、キリスト教徒の辺獄「リンボ」。この涙の谷での無意識の眠り）。

そこで左手〔左道、邪道〕のアデプトが彼を出迎えて、「どこへ行くのです？」と尋ねる。聖者は答えた。
「赤色の地です。智恵を獲得しに」
「わかりました。忘却のこのワインを飲んでください。あなたのために持ってきました」
「いえ、飲めません、一滴たりとも」
「無理にでもどうぞ。飲まないと、通らせることも道を行かせることもできません。飲ませるばかりか、酔わせないといけないのです。さあ、どうぞ」
すると『ケツァルコアトル』はコップをもって ― 彼は堕落した「菩薩」だから ― ワインを飲んだ。
そしてひとたび口にするや道にうんざりして、眠りに陥り（数々の転生の間、口では言えないようなひどい目にあい）遠くまで響くいびきをかきはじめた。そしてついに（意識をまた目覚めさせて）左右を見、自分自身を見つめ、髪にくしを入れていた。こういうわけでそこの地名は「人々の眠り場所」という。
もういちど旅に出て「ウメアンテ〔煙を出す〕山」 ― 「リンガム」の象徴 ― と「白い女性」 ― 「ヨニ」の象徴 ― の間にある頂に着くと、そこで彼とお伴、道化師、身体障害者たち ― 心理的集合体あるいは非人間的要素は雪に見まわれ、全員が凍死した。
中世の老錬金術師たちは「化学的交合」の間、「肉は骨を捨てるように。」と叫んでいた。

108 アザミの聖アンデレ友愛結社の秘教的苦悩。疑いもなくX形十字は、全体として「エゴ」、「我」を構成する人間以下の全要素の死の驚くべき象徴である。

109 聖アンデレの寓意的な拷問、「第九球体」（「性」の領域）におけるすさまじい苦悩、良心の呵責と後悔、仏教的寂滅。

110 欠点を具現する道化師、身体障害者、心理的集合体をひとつ残らず根絶して、はじめて魂の黄金を創造したり、それを再生させることができる。

111 聖者はあるときは歌い、またあるときは泣いていた。そして限りない忍耐をもって「一つ目巨人キュクロプスの鍛冶場」（性）で作業していた。

長々と泣き、深いため息をついていた。「マティサーダ〔色合いのついた〕山」— 復活の山 — をじっと見つめ、そこに向かった。あちこちに行っては奇跡を起こし、驚くべき足跡を残した。（偉大なる「カビール」、イエスがかつて聖地で行ったように）。

砂浜に着くと蛇の骨組みをつくり — 七段階の火のパワーを完全に発達させたので — 、いったん形づくるや — しかも完全に — その上にすわって、船の骨組みとして利用した。

112 このことからガウタマ「仏陀」が、「菩提」樹の根もとにいた一匹の蛇の上にすわっていたことが思いだされる。「菩提」樹は並はずれたイチジクの木、つまり性能力のすばらしい象徴である。

113 雨が降っていて、水たまり、ため池の水のため今にも溺死しそうであったが、蛇の上にすわったガウタマはそれを船として利用した。

114 いろいろなテキストから拾いだせる不変の事象は、魔力をもつ火の蛇、ヘブライの「ビナー」の女性的面、「シバ」の妃、第三ロゴス、聖霊を物語る。それは、内面に巣くう非人間的要素を取りのぞくことによって人生の荒波から我々を救いだす、我々の個人的な宇宙の母である。

115 聖者、主「ケツァルコアトル」は遠ざかり、水面 — 最初の瞬間の精液の水 — を滑るように進んで行った。「赤色」の地にどうやってたどり着いたのか誰も知らない。

116 疑いもなく、兵士たちがイエスに紫の衣を着せ、そのうえイバラの冠を編んでかぶらせたとき、偉大なる「カビール」、イエスもまた「赤色の地」にたどり着いた。

117 そのとき兵士たちは皮肉にも「ユダヤ人の王、万歳。」と言ってイエスに敬礼した。また、葦の棒でその頭をたたき、つばきをかけ、ひざまずいて拝んだりした。〔『マタイ』15：17−19〕

118 本当に、エロチックな性のるつぼの中で、大作業の原料はクリストのように受難にあう。「第九球体」のるつぼの中で死んで、浄化され、霊化され、変換された後によみがえる。

119 カルデアでは「ジッグラト」〔階段状ピラミッド〕は一般に三段の塔であり、有名な「バベルの塔」の範疇に区分され、黒・白・赤紫の三色で描かれていた。

120 ヘルメス哲学では大作業の色の象徴的表現は驚くべき範囲におよぶが、その範囲を大ざっぱに述べるため、青衣（黒に相当）を着た聖母、白衣の神、赤衣のクリストがいつも想像されることを観察しよう。

121 ファラオたちの古代エジプトの聖なる神殿では、新参者がまさにイニシエーションの試練にあおうとしているとき、ひとりのマスターが近づき、「『オシリス』が黒い神であることを思い出しなさい。」というこの神秘的な言葉を耳もとでささやいていた。

122 明らかにこの黒色は闇と影に特有の色であり、悪魔（いつも黒バラが供えられた）の色、また原始の混沌の色でもある。そこ原始の混沌では、生命のすべての要素と胚が完全に混じりあう。地の要素、夜の象徴、また全体として自我を構成するすべての心理的集合体の根本的死の象徴。

123 疑いもなく、ヘブライの『創世記』では、夜の後に昼が来るのと同様、闇の後に光が来る。

124 再生して、子羊の血（性の火）で洗い清められた幸福な者たちは、つねに白衣を着るであろう... 。

125 ファラオたちの聖地では、清純な者、自分自身に死んだ者の再生を示唆するため、パト PATH、再生者は白い亜麻布のチュニックをつねに着ていた... 。

126 赤色の地にたどり着く前、「メキシコ」のクリスト、「ケツァルコアトル」はじゅうぶんな権利をもって黄色いチュニックを着ることができた。「大作業の原料」の色に関する我々の見地を体系的に適用するには、そのことを我々のノーシス学徒が思い出すのは緊急に必要で、後回しにできない。

127 黒色の次には白色が来て、白色の次には黄色、黄色の次には太陽王朝の聖王たちの赤紫色がつねに来る... 。

128 聖者が赤色の地にたどり着いたとき、神王たちの紫の布を腰にまとい、死者たちの間からよみがえった。

129 そのとき聖者は、鏡（錬金術の鏡）のような水面に映った自分の姿を見たと言われる。その顔は再び美しくなり（失った楽園にもどり）、最高に立派な衣装で着飾り、たき火をして、そこに飛びこみ（性の火によって心理的「我」は灰すら残さずに完全消滅し）、豪華な羽毛の鳥（魂の鳥）が燃えぐあいを見に来た。ムネアカヒワ、ターコイズブルー（明

るい青緑色）の鳥、虹色の鳥、赤くて青い鳥、山ぶき色の鳥、その他数えきれないほどの美しい鳥。

たき火が燃え終わった時（大作業が完了して）、聖者の心臓（心）は舞いあがって天にまで達した。そこで星に変わったが、その星が明けの明星、宵の明星である。死者の国に降りてしまう前、七日そこにいた後、星となって昇った。

130 イニシエイトは我々に錬金術の鏡をつねに手渡してくれるが、もう片方の手にはアルルテイアの角を持っている。そのかたわらにはヘブライのカバラ学者があれほど研究した生命の木が見られる。鏡は作業の始まりをつねに象徴する。生命の木はその終了を示し、豊穣の角は成果を表す。

131 「ケツァルコアトル」は悪魔、未加工の物質的な原石を「ルシファー」、大作業の隅石、光の大天使、金星に変換した。

132 我々の内なるロゴイ Logoi の反映した悪魔は、我々が動物的生殖におちいる前は最もすばらしい創造物であった。「真ちゅうを磨いて、書物を燃やせ。」とヘルメス学のマスターは全員くりかえし言う。

133 「アザミの友愛結社の兄弟たち」の苦悩を味わう際、福者は悪魔を磨いて、光り輝く本来の状態に変えた。

134 今ここで自分自身に死ぬ者は、鎖でつながれたプロメテウスを解放する。プロメテウスは天地と地獄の支配権を有する巨星なので、その者にじゅうにぶんに報いてくれる。

135 我々の本質的存在全部と根本的に一体化した「ルシファー-プロメテウス」は、我々を何か異なった違った者、エキゾチックな創造物、大天使、おそろしく神聖な権威にしてくれる... 。

136 本書で思いだすまでもないが、聖女たちが救世主の墓の中に入ったとき、知り合いの男性のかわりに、長い白衣をまとった一位（いちゐ）の天使を見て、びっくりして逃げた... 。

137 こう書いてある。「勝利を得る者、また最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与えよう。彼は、鉄の杖をもって土の器を打ち砕くようにして彼らを治める。わたし自身が父から支配の権威を受けているのと同じである。また、彼に明けの明星（金星-ルシファー）を与えよう」。〔『黙示録』2：26－28〕

138 ヘンリー・クンラートは『不滅の智恵の円形劇場』の中でこう記す。「最後に、作業が灰色から真っ白、次に黄色に移ったとき、賢者の石（前述の大天使）が見られるであろう。支配者たちの上に君臨する我々の王 ── 第三ロゴス ── はガラス製の墓から出て、寝

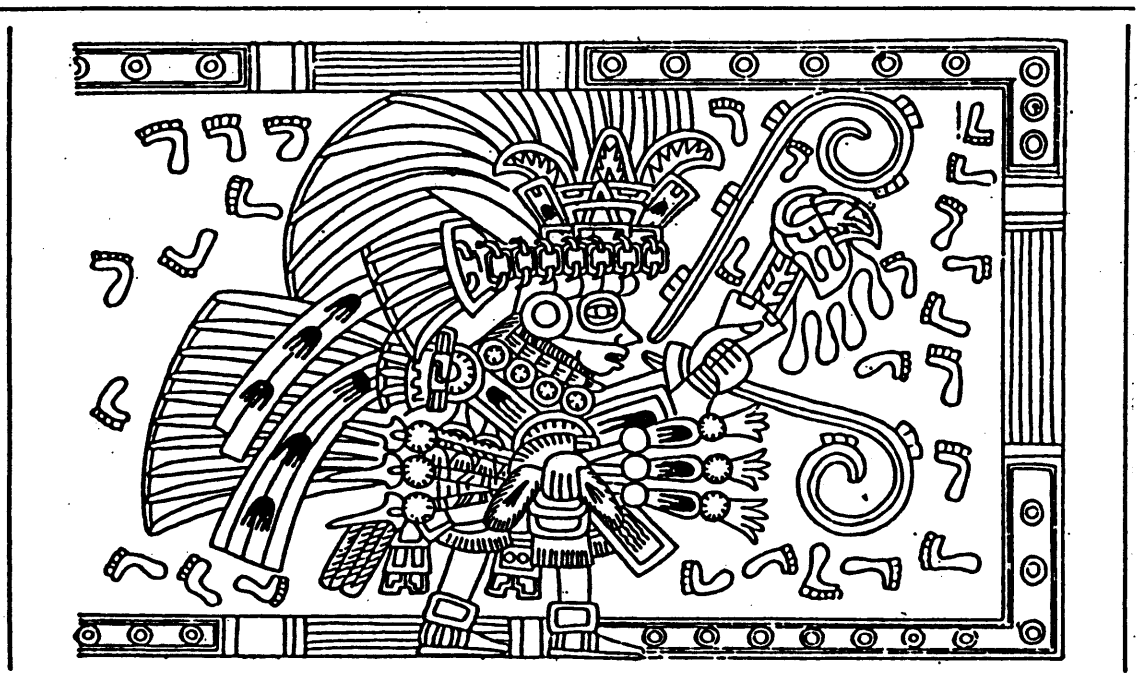


Fig. 13

床から起きあがり、栄光の体すなわち再生した「過去完了形」の体をまとって浮世舞台に駆けつける。

＊ヘンリー・クンラート…著名なカバラ研究家、化学者、医者。1502年生まれ、1544年（バラ十字会の）神智学に参入。カバラに関する名著を数冊残したが、その中の最高傑作が『不滅の智恵の円形劇場』である。（H.P.B.著『神智学用語辞典』）

139 はっきりさせるために述べるが、「賢者の石」という用語は神聖言語によれば太陽の記号のついた石を意味する。ところで、この太陽の記号の特徴は赤色で、その強さは変化することがある。

140 老錬金術師は語る。「賢者全員と共に我々の目ざすところは、金属的な魂と肉体の結合ではなく、まとまりのある耐火性の強じんな包みの中で、この魂を凝固して塊にすることである。その包みは魂をおおい、そのすべての部分を満たし、有効な防護物となりうる」。

「この霊、魂あるいは一つになった火が（金星-ルシファーとしかるべく混ざり）集中して、地球の物質の中で最も純粋で最も抵抗力があり最も完全なものに凝固したものが、石と呼ばれるものである。そして保証できるが、この魂を案内人とせず、この物質を土台としないいっさいの企ては、決して目ざす目標に到達しないであろう」。

第１０章
ノーシス人類学

1　ノーシスの研究は最近すばらしく進んだので、教養のある人なら誰も、あるもっぱら霊的な範囲のみからノーシスの風潮を生じさせるというあまりに単純な誤りを、今日では昔のようには犯さない。

2　たとえいかなるノーシス体系においても、ペルシャ、メソポタミア、シリア、インド、パレスチナ、エジプト等を含めて東洋のヘレニズム的要素を考慮に入れるべきだとしても、インド・アメリカ語族のナワ族、トルテカ族、アステカ族、サポテカ族、マヤ族、チブチャ族、インカ族、ケチュア族等の崇高な信仰に認めうるノーシス原理を決して無視すべきではない。

3　たいへん率直に、歯に衣着(きぬ)せずにこう言おう。「ノーシスとは意識のごく自然な本来の機能である。すなわち『永遠なる普遍的哲学(ピロソピア・ペレンニス・エト・ウニベルサリス)』」。

4　疑いもなくノーシスは、選ばれた人々のために保存された神聖な密儀の、天啓を受けた知識である。

5　「ノーシス主義」という言葉には、その文法上の構造の中に、ノーシスの研究に向けられた体系や風潮という概念が含まれている。

6　このノーシス主義は、直接の神秘体験によって確かめうる、まとまりのあるはっきりした明確な一連の基本的要素を意味する。「科学的、哲学的見地から見た呪い」、「ヘブライの『創世記』のアダムとイブ」、「原罪と楽園追放」、「ナワトルのルシファーの神秘」、「自我の死」、「創造的パワー」、「『救われるべき救世主(サルバトゥール・サルバンドゥス)』の本質」、「性の神秘」、「内心(インティモ)のクリスト」、「魔力をもつ火の蛇」、「地獄への下降」、「エデンの園への帰還」、「ルシファーという天性」。

7　存在論的、神学的、人類学的土台を前述の文章で意味するノーシスの教義のみが、正真正銘のノーシス主義の一部をなすにすぎない。

8　「前ノーシス」（プレノーシス）とは、何らかの方法でノーシス体系のなかで発見できる、ある特徴を具体的に明確に特に示すものである。しかし、そういった面は、革命的ノーシス主義とは「まったく(イン・トト)」無関係の概念に組み入れられている。確かにノーシスではない思想、にもかかわらずそれはノーシスである。

9　「原始ノーシス」（プロトノーシス）とは、まさに初期の萌芽状態にあるノーシス体系そのものである。はっきりしたノーシスの風潮を特徴づけるものによく似た姿勢で導かれた運動。

10　「ノスティック」Gnóstico という形容詞は、いずれかの形でノーシスと関係する概念にもノーシス主義にも賢明に用いることができるし、それどころか用いるべきである。

11　「ノスティサンテ」Gnostizante という言葉は、疑いもなくその意味に関して「プレノスティック」にごく近い。その単語は実際、「厳密な意味で」、普遍的ノーシス主義と何らかの類似性のある本質的な面と関係するからである。しかし、その本質的な面は、ノーシスとして明確な形をとっていない思潮に組み入れられている。

12　しっかりと以上の semnáticas 〔未詳〕な説明をした後、次にノーシス主義をまったくはっきり定義しよう。

13　本書で強調するまでもなく、ノーシス主義とは、ごく内心の自然な深い宗教的過程である。

14　きわめて個人的な神秘体験と教義と独自の儀式をともなって、一瞬一瞬展開する真実の秘教の核心。

15　神秘的な形態、時には神話形態を基本的にとる並はずれた教義。

16　本質的存在の最高意識の強烈な啓発・教化をともなう、言語に絶する魔術典礼。

17　ノーシスの知識が、主観的理性主義の通常の分析をつねに越えるのは疑いない。

18　この知識と相関関係にあるものは、人格の果てしなく奥底にあるもの、すなわち本質的存在である。

19　本質的存在が自らを再評価し、自己認識することが「セルフノーシス」である。これ自体ノーシスなのは疑いない。

20　本質的存在の存在理由はまさしく存在するからである。ただ本質的存在のみが自分自身を知ることができる。それゆえ本質的存在はノーシスにおいて自己認識〔自覚 self-knowledge〕する。

21　本質的存在の「自己認識」は、本質的存在に依存する、理性を超越した活動であり、主知主義とはいっさい無関係である。

22　本質的存在と「我」の間には埋めがたい隔たりがあり、こういうわけでプネウマ、魂は見分けがつく。知的哺乳類の主観的理性が役に立たず無力でおそろしく貧弱なのに対して、この識別は自主独立した行為である。

23　「自己認識」、「セルフノーシス」は、後まわしにできない緊急の事前のワークとして「我」の絶滅を意味する。

24　「我」、「エゴ」は獣のように非人間的な主観的要素の足し算と引き算からなり、始めと終わりがあるのは疑いない。

25　「自我」、「エゴ」の構成要素の中に押しこめられ、びんづめにされ、閉じこめられたエッセンス、意識は、あいにくそれ自体の条件づけによって痛々しくも処理される。

26　「我」を溶解することによってエッセンス、意識は目覚め、ぱっと光り輝き、解放され、そのとき当然の結果として「自己認識」、「セルフノーシス」が引きつづき起こる。

27　疑いもなく、正真正銘の啓示は、反論できない明白ないしずえを「セルフノーシス」に持つ。

28　ノーシスの啓示はいつも即座に直接、直観的に受ける。それは主観的たぐいの知的活動を根底から退け、感覚器官から基本的に得られた情報の組み合わせと経験とは無関係である。

29　知性つまり認識論的意味での「ヌース」は、たとえ啓発された知的作用の土台として機能できるとしても、むなしい主知主義におちいることをきっぱりと拒否する。

30　「ヌース」（知性）の存在論的、霊的、精神的特徴は明らかではっきりしている。

31　真理の名において厳かに断言するが、本質的存在は唯一の実在であり、言語に絶するおそろしく神聖なその透明さの前では、「我」、エゴ、自我、「私自身」と呼ばれるものはただ単に外の暗やみ、泣き叫び、歯ぎしりにすぎない。

＊外の暗やみ、泣き叫び、歯ぎしり…『マタイ』8：12、22：13、25：30。

32　「セルフノーシス」つまり「本質的存在」の「セルフノーシスの識別」は、プネウマ、魂の人類学的側面を考えれば、果敢な救済者である。

33　自分自身を知ることは、自らの神聖な本質的存在と一体化したということである。

34　自分は「自分自身のプネウマ、魂」と同一だと知ること、知識と認識との同一感を直接味わうこと ── それは「セルフノーシス」と定義できるし、また定義すべきものである。

35　当然、この途方もない暴露によって、本質的存在が我々に現れるよう自分自身に死ぬ気になる。

36　反対に、本質的存在から離れること、分離という悪ふざけにかまけてエゴをのさばらせ続けること、それは永罰を受けて「地獄界で退化」することを意味する。

37　このことをはっきりとよく考えるなら、ノーシスの「自由選択」というテーマに行き着く。真剣なノスティックが後天的に選ばれた人物なのは疑いない。
38　ノーシスの体験によって、まじめな帰依者は自分を知り、完全に自己実現できる。

39　自己実現を、人間のあらゆる無限の可能性の調和的開発だと理解しなさい。

40　好き勝手に分類した知的情報という問題でも、単なる中身のないおしゃべり、あいまいな無駄話という問題でもない。

41　以上の段落で我々の言っていることは皆、現実の実際の強烈な体験だと解釈しなさい。

42　哀れにも神人同形論という窮屈な考えに我々を閉じこめる、正統な「神による人間の意志・行為の予定、宿命」predetermination という教義は、ノーシスの思潮には存在しない。

43　神はギリシャ語で「テオ」、ラテン語で「デウス」、サンスクリット語で「ディブ」や「デバ」だが、このような言葉は天使（エンジェル）と訳す。

44　最も保守的なセム族の間ですら、最古の光の神、「エル」EL や「イル」ILU は『創世記』の最初の数章に「エロヒム」ELOHIM という統合的な複数形で現れる。

45　神は特に個人としての人間や神というわけではなく、神は神々である。それは「声の軍隊」、「偉大なる言葉」、聖ヨハネの福音書の「言葉」、創造主ロゴス、完全なる複合統一体である。

46　自己を知り、無限の可能性の範囲内で自己実現することは、「『エロヒム』の創造軍」に加入や再加入することを意味する。

47　そしてこのときノスティックは安堵（あんど）し、本質的存在を完全に発見し、そのすばらしい光輝は幻影や夢を徹底的にせん滅する。

48　人間の「プネウマ」、聖魂の開口部には救済論的な内容がすべて含まれる。

49　もし古代の大密儀のノーシスを所有するなら、それは教義に忠実なため、本質的存在の秘密を明かす力本説に何人かの大聖者たちは近づけたからである。

＊力本説 dynamism…あらゆる宇宙現象を自然力の作用によるものと説く学説。

50　あらかじめ「ノーシス人類学」に関する情報がなければ、アステカ、トルテカ、マヤ、エジプト等の文化のさまざまな人類学的部分を厳密に研究するなどとてもできないであろう。

51　「世俗の人類学」に関して ― ノーシス人類学と似ていることを大目に見ても ― もし成果を知りたいのなら、じゅうぶんな自由を与えて研究室にサルか類人猿かオナガザルかあるいはクモザルを一匹放し、それから何が起こるか観察しなさい。

52　ある大昔の神殿、聖石碑モノリス、古い神聖文字(ヒエログリフ)、ピラミッド、千古の墓等だけでなく『コディセス・メヒカノス』、エジプトのパピルス文書、アッシリアのれんが、死海写本、不思議な羊皮紙もまた、その深遠な象徴の中でノーシスの意味を我々に語りかける。そのようなノーシスの意味は、逐語解釈の域を決定的に越えており、解説するに足るもっぱら知的種類の価値のみを持ったことはない。

＊『コディセス・メヒカノス』…リュウゼツランの繊維紙やシカ革に書かれたアステカの絵文やマヤの象形文字の古文書。（小学館『西和中辞典』）

53　思索的な理性主義は残念ながらノーシス用語を豊かにするかわりに貧弱にする。ノーシスの話は、書かれたものであれ、どのように芸術的に寓話化されたものであれ、つねに本質的存在に向かうからである。

54　そして、まさしくこのとても興味深い「半ば哲学的」で「半ば神話的」なノーシス用語において、一連の並はずれた不変のもの、つまり沈黙のうちに多くを語る超越的、秘教的内容の象徴が現れる。

55　沈黙が智恵の雄弁であることを神々と人間はよく知っている。

56　「ノーシス神話」をはっきり詳述して、相互に補完しあう特徴は以下のとおりである。

1．― 至高神。
2．― 流出と「プレーローマ」PLEROMA の降下。
3．― 建築家「デミウルゴス」DEMIURGOS。
4．― 世界の「プネウマ」。
5．― 二元論。
6．― 救世主。
7．― 反復（リターン）。

57　ノーシスの至高神は「アグノストス　テオス」AGNOSTOS THEOS、「絶対抽象空間」で特徴づけられる。「知られざる未知の神」。いずれかの宇宙創造の始まりのとき「エロヒム」たちの発生した唯一のリアリティー（実在）。

58　「パラニシュパーナ」PARANISHPANA は「最高善（スムム・ボヌム）」、「絶対」であり、それゆえ「パラニルバーナ（般涅槃（はつねはん））」PARANIRVANA と同じであることを思いだそう。

59　後に、見たところこの宇宙に存在する万物は、「パラニシュパーナ」の状態で実在するようになるであろう。

60　疑いもなく、人間の認識力は決して「両性具有のロゴス」、「創造主デミウルゴス」、「声の軍隊」（「言葉」）の宇宙帝国を越えてゆくことはできないであろう。

61　「ヤー・ホバー」JAH-HOVAH、我々ひとりひとりの内部にひそかに存在する「父母」、それが真実の「エホバ」JEHOVA なのである。

62　ヘブライ文字の「ヨッド」JOD は「男根（メンブルム・ビリレ）」（男性原理）である。

63　「エベ」EVE、「ヘベ」HEVE（イブ）。ギリシャの青春の女神にしてヘラクレスのオリンポス山の恋人でもある「ヘベ」HEBE と同じものを表すそれは、「ヨニ」、神聖な聖杯、「永遠の女性」である。

64　ガリラヤの聖なるラビは、人の姿をしたユダヤ人の「エホバ」のかわりに、自らの神聖な「男女両性者」（ヤー・ホバー）、内なる「父母」を崇拝した。

65　されこうべの丘ではりつけにされた聖人は、「父よ。わが魂を御手にゆだねます。」〔『ルカ』23：46〕と大声で叫んだ。「ラム・イオ」RAM-IO、「イシス」、自らの聖なる母「クンダリニー」が「十字架の道」で彼に付き添った。

66　どの国民にも両性具有者としての最初の神や神々がいる。今日の中国人のように、遠い大昔の直系尊属、先祖の男女を神聖な存在、聖なる神々と見なしていたので、それ以外はありえない。

67　みわざとは無関係に、天国で暴虐にも玉座にすわって、この悲しき雑踏に向けて稲妻と雷鳴を発する、人の姿をした排他主義の「エホバ」。確かに、そのごまかしの概念は無知の産物であり、単なる知的な偶像崇拝にすぎない。

68　真理をねじ曲げたこの概念は、不幸なことに、西洋哲学をも、ノーシスの要素のまったくないどんな宗派の宗教家をも占拠してしまった。

69　あらゆる時代のノスティックが拒絶してきたもの、それは自然の中に常に存在する、すなわち自然の中に「こっそりと（イン・アブスコンディト）」隠れた未知の唯一神ではなく、正統教義の神、（目には目を、歯には歯をの）復讐法の報復する恐ろしい神である。

70　「絶対抽象空間」、不可知の神は無限の空(くう)でも条件・制約つきの充満でもなく、その二つを同時に兼ね備えたものである。

71　ノスティック秘教家は神聖な本質的存在、顕現した生命に由来するものとして天啓を受け入れるが、顕現できない唯一の生命に由来するものとしては決して受け入れない。

72　不可知のセイダッド〔本源の霊気 Seidad〕とは絶対抽象空間、昔あり、今あり、将来あるであろうものすべての原因なき原因である。

73　この永遠無限の原因は ― もちろんだが ― 属性を何ひとつ持たない否定的光、否定的存在であり、あらゆる思考や思索の届かないところにある。

74　バレンティヌスのノーシス神話は、完全な対に配列された相つぐ流出によって「絶対抽象空間」の中から神秘的に生じる、30の「プレーローマのアイオーン」をとりわけ説明するが、その神話はあらゆる明確なノーシス体系にどちらかと言うとはっきり登場する、一元論神話の典型としての役割ができるし、またそうすべきである。

75　"Probolé"〔要検討〕のこの超越的な問題は古典的に神の三分割に向かう。すなわち「アグノストス　テオス」（「絶対」）、「デミウルゴス」、「代父」PRO-PADRE 等。

76　神聖な世界、プレーローマの栄光の領域は直接、否定的光、「否定的存在」から生じた。

77　最終的に「ヌース」、魂、プネウマは顕現の間、発達しうる無限の可能性をそれ自体に秘めている。

78　哲学の存在と非存在の驚くべきはざまで、多様性や転落が生じた。

79　「ソフィア」（神智）転落のノーシス神話は、プレーローマ内部でのこの恐ろしい混乱をおごそかに寓話化する。

80　欲望、姦淫、エゴとして際立(きわだ)ち抜きんでたいという思いは、不運と損害と無秩序をもたらし、品質の落ちた作品を生じるが、疑いもなくその作品は神聖な領域から逸脱したままである。そこに人間のエッセンス、「仏性」、心霊材料は捕らわれたままではあるが。

81　運動から解放された生命単位を目ざす衝動は、横道にそれて「我」に向かい、魂との分離のなかで苦しみにみちた世界をそっくり作りあげることがある。

82　堕落者の転落はあらゆる古代民族の神学の基礎である

83　ある罪を犯した罰として、墓に埋められるように「心霊材料」、「エッセンス」は「我」の中に埋没している ― ピタゴラス学徒ピロラオス（紀元前５世紀）によれば、古代哲学者たちはそう言っていたという。

84　それはオルフェウス学徒の教義だとプラトンはそのように証言していたし、彼自身その教義を信奉していた。

85　過度の欲望、流出状況の混乱のため失敗する。

86　エゴとして目立ちたいという思い、それが天使のどの反乱においても無法と転落をもたらすのが常である。

87　形態の世界を創造した者たちは、まさにマヤ、アステカ、オルメカ、サポテカ等の万神殿にまつられた雨と稲妻の神「トラロック」とその妻である翡翠（ひすい）のスカートをはいた女神「チャルチウトリクエ」のような、「両性具有」の創造者や対になった神々の神秘的集団である。

88　「エロヒム」ELOJIM（ELOHIM）という言葉には、よく考えさせられるきわめて重要な鍵がある。

89　確かに“Ｊ”という言葉をもつ「エロヒム」は、権威ある様々な改訳聖書で神と訳される。

90　秘教的見地のみならず言語学上の見地からも否定できない事実だが、「エロヒム」という言葉は男性複数語尾をもつ女性名詞である。

91　ヘブライ語では“Ｈ”は“Ｊ”のように聞こえるので、名詞“ELOHIM”というよりもむしろ“ELOJIM”の「厳密な意味（ストリクト・センス）」で正しい訳は、「〔複数の〕男神」と「〔複数の〕女神」である。

92　「そして男性原理と女性原理の魂は、形のはっきりしない物の表面に現れ、創造が行われた」。

93　「女神」なき宗教が、まったくの無神論に半分なりかけているのは疑いない。

94　精神生活に完全なバランスを本当に望むなら、偉大なる「カビール」イエスの拒絶した、人の姿をした「エホバ」を崇拝するのではなく、「エロヒム」（古代の男神と女神）を崇拝すべきである。

95　「エロヒム」のかわりに人の姿をした「エホバ」の偶像崇拝は、確かに、超常的な意

識状態の達成にとって大きな障害である。

96　アステカ、マヤ、オルメカ、トルテカ、インカ、チブチャ、ドルイド、エジプト、インド、カルデア、フェニキア、メソポタミア、ペルシャ、ローマ、チベット等のさまざまな万神殿の「男神」や「女神」の彫像の前で ― 世俗の人類学者のように ― 懐疑論者を笑うかわりに、ノーシス人類学者である我々はそれらの神々の足もとにひれ伏す。そこには宇宙創造主「エロヒム」が認められるからである。「自分の知らないものをあざ笑う者は、愚か者になりつつある」。

97　創造主デミウルゴスとの別離、アンチテーゼ、破滅は、それほどの苦しみの真の原因である利己主義の性癖に他ならない。

98　利己的意識が「ヤーベ」と一致するのは疑いないが、アンティオキアのサトゥルヌスによれば「ヤーベ」は堕天使、悪霊だという。

99　エッセンス、意識はエゴの中に閉じこめられ、残念ながらそれ自身の条件づけによって時間の中で処理される。

100 残酷にも法の力と世界と奈落に従う「プネウマ」に関する、ノーシスの話でたえずくり返される ― 確かにあまり快適なものではない ― 状況は、ここで強調するほどあまりにもはっきりしている。

101 まちがって「人間」と呼ばれる、哀れな「知的哺乳類」の弱さと当惑させるような無力さは明白であり、神の助けなしでは大地の泥の中から立ち上がれないほどである。

102 「神に祈り、槌(つち)をふるう。」〔人事を尽くして天命を待つ。天は自ら助くる者を助く。〕という、世間にはありふれた格言がある。

103 形のはっきりしない冷たい暗色物質の奥底に隠れた不滅の「火の光線」のみが、心理的「我」を宇宙の砂ぼこりにして、意識、エッセンスを解放できる。

104 情熱的な言葉で語ろう。ただ「神聖な気息」のみが我々を真理に再合体させることができるが、意識あるワークと自発的な苦しみによってはじめてこれが可能となる。

105 ノーシスをとりわけ知っていると、この幻影の迷いの世界では、ある不思議な、もしくは妙な態度をつねに伴う。

106 本当のノスティックは決定的変化を望み、心の奥底で本質的存在の密かな衝動を感じる。そういうわけで「我」を構成するいろいろな非人間的要素を前にすると苦悩、拒絶、困惑がある。

107 本質的存在に没入したい者は、「自我」の恐怖を前にして自責（罪の宣告）と戦慄を激しく攻撃する。〔要検討 Quien anhela perderse en el Ser, carga la condena y el espanto ante los horrores del "Mi Mismo."〕

108 一瞬一瞬たえず自分を見つめることは〔要検討 contemplarse como un momento de la totalidad〕、かぎりなく自分を知り、本質的存在の全精神力を振りしぼって分離というむかつくような利己主義を拒否することである。

109 二つの心理状態が、固く決心したノスティックの前に開かれる。A）透明で透きとおった非人格的で真実本当の本質的存在の心理状態。B）「我」すなわち欠点を具現する心理的付着物全体の心理状態。「我」の唯一の存在理由は無知である。

「高我と低我」は同一物の二つの部分、「自我」の異なった面、地獄のさまざまな側面にすぎない

110 それは邪悪にゆがんだ陰気な「高我」や「中我」や「低我」であり、非人間的な心理的集合体の絶えまない足し算、引き算、掛け算である。

111 いわゆる「高我」というものは確かに、存続のための口実をさがす「自我」の策略、エゴの知的奸計である。自己欺瞞の巧妙きわまる一形態。

112 「我」は数巻もの身の毛もよだつ作品である。数えきれないほどの過去の産物、解かねばならない宿命的な結び目。

113 利己的な自賛、「エゴ」崇拝、「自我」に対する過大評価、それは「偏執症（パラノイア）」、最悪の種類の心酔である。

114 ノーシスとは天啓や秘密を明かす開示、高尚な大願や向上心、概念の総合主義、最高の成就実現である。

115 本質的にも非本質的な面でも「ノーシス」と「恩寵」が、現象学的に同一視できるのは明らかである。

116 神の恩寵がなければ、聖なる気息の驚くべき助けがなければ、セルフノーシス、本質的存在の内心の自己実現はまったく不可能であろう。

117 自己救済が望ましく、これには救済者と被救済者が完全に一致することが必要である。

118 真実本当の認識力である霊の奥底に住む神は、エゴを全滅させ、「パルーシア」でエッセンスを吸収し、完全な正覚でエッセンスを救う。これが「救われるべき救世主（サルバトール・サルバンドゥス）」の

テーマである。

＊パルーシア PAROUSIA…プラトン哲学ではイデアの臨在（現存）。神学ではキリストの再臨。

119 水によって救われたノスティックは、限りない苦しみの「輪廻（サイクル）」を終わらせた。エゴを宇宙の砂ぼこりにしたので、プレーローマの言語に絶する領域を宇宙の下層部と分け隔てる境界を取りのぞき、デミウルゴスの帝国から勇敢にも脱出したのである。

120 諸世界を通過し、非人間的要素を次々と絶滅させることによって、聖絶対太陽とのこの再合一は確かなものとなり、そのとき我々はおそろしく神聖な創造物になって、善悪を超越する。

第１１章
メキシコ、テノチティトラン

1　確かにテノチティトランには、むなしい技巧を省いたごく簡明な説明がいる。「かたい実のなるウチワサボテン、テノチトリ Tenochtli の地」。

2　かたい岩に生えた伝統的なサボテン、それは古代密儀の大昔のグリフォ Glifo、その都市の魔術的、神秘的しるしである。

3　「メキシコ」México の語源は「メツトリ」Metztli（月）と「シクトリ」Xictli（へそ又は中心）という語根から来ている。

4　コロンブスのアメリカ大陸到着以前の古典語「メキシコ」は、「月の湖のまんなかにある都市」と訳せるし、それどころか訳すべきである。

5　隣のオトミ民族〔メキシコ中央高原のインディオ〕はこの堂々たる都市を「アンボンド・アマデツァーナ」Anbondo Amadetzana という二語の名前でつねに呼んでいた ― その事実を本書で思いだすまでもない。

6　正確なオトミ語で「ボンド」は「ウチワサボテン」を、「アマデツァーナ」は「半月状の」を意味する。

7　メキシコ合衆国の紋章盾である、ウチワサボテンの上にとまって一匹の蛇をむさぼり食う勝ち誇ったワシは、偉大なテノチティトランをかつて指し示していた古代のグリフォを忠実に翻訳したものにすぎない。

8　自分たちの立派なすばらしい大都市が、軽視された謙虚な一部族によって沼地の上につくられたことを、栄光の絶頂期にあるときでも古代メキシコ人は決して忘れなかった。

9　tular〔未詳〕の中で、葦原の中で老人たちがいかに“Intollihtic Inacaihtic”〔未詳〕を発見して仰天したのか。大昔の闇の中に見失う、ある千古の伝説は、そのことにふれている。「ウイチロポチトリ」神が知らせたある動植物、すなわちセイヨウシロヤナギ、エメラルドグリーンのカエル、白魚など。

　これを見たとたん老人たちはすぐに涙を流して、言った。「だから『ウイチロポチトリ』が我らに言われて命じられたものを見たので、（我らの都市は）ここになるであろう」。しかし翌晩、神は神官クアウコアトル（蛇ワシ）を呼んで、こう言った。

　「おー、クアウコアアトルよ。もうおまえは葦原にあるものをすべて見て、それに驚いた」。

「だが聞くのだ。まだ見ていないものがある。ただちに「テノチトリ」に見にいくのだ。ワシがうれしそうに留まっているのを目にするであろう... 。我らはそこにいて、支配し、待ち受け、いろいろな人々と出会うであろう。弓と盾をもった我らは、我らを取り囲む者たちと会うが、全員を征服するであろう... 。そこは我らの都市、メキシコ、テノチティトランになるのだから。ワシが叫び、翼を広げて、えさを食う場所、魚が泳ぎ、蛇が脱皮する場所、多くの事件が起こる場所」。

10　恍惚とした神官クアウコアトルは、すぐにメキシコ人たちを広場に招集して、主の言葉を伝えた。

11　そして狂喜に酔いしれた老若男女はクアウコアトルのあとについて行き、水生植物や葦をかき分け、沼の中を進んだ。すると突然、異常事態が起こり、約束のしるしを発見して皆が目を丸くした。手に負えないワシがウチワサボテンの上に留まり、死の宴会のまっさいちゅうに一匹の蛇を飲みこんでいたのである。

12　まさにそんなめでたい驚くべき瞬間、「ナワトルのルシファー」は大声で叫んだ。「おー、メキシコ人たちよ、われはそこにいるであろう」。

すぐさまメキシコ人たちはこのために泣いて、こう言った。「我らの望みをかなえるだけのことはあった」。

「我らの都市がどこになるのか知って、我らは驚いた。さあ行って、休もう」。

13　おおいに思慮分別をもって内容の濃いこれらの段落を研究し、ただちに内容の分析に移ろう。

14　蛇が智恵と神秘的知識の秘教的象徴であるのは疑いない。

15　蛇は古代から智恵の神と関係してきた。

16　蛇は、トートあるいはタウト... をはじめとするヘルメス、セラピス、イエス、ケツァルコアトル、仏陀、トラロック、ダンテ、ゾロアスター、ボチカ〔Bochica 未詳〕等のような聖なる神々の神聖な象徴である。

17　宇宙白友愛結社のどのアデプトも「偉大な蛇」でしかるべく象徴できるが、その蛇はバビロニアの善行を書き留める黒い石に刻まれた神々の象徴の中で、よく知られた場所をしめる。

18　ドゥプイス〔未詳 Dupuis〕によればアスクレピオス、プルトン、エスムン〔未詳 Esmun〕、ネップ〔未詳 Knepp〕は全員、蛇の属性を持つ神々である。全員が治療家であり、心身の健康を我々に与え、啓発してくれる。

23　「自己認識」、「セルフノーシス」は、後まわしにできない緊急の事前のワークとして「我」の絶滅を意味する。

24　「我」、「エゴ」は獣のように非人間的な主観的要素の足し算と引き算からなり、始めと終わりがあるのは疑いない。

25　「自我」、「エゴ」の構成要素の中に押しこめられ、びんづめにされ、閉じこめられたエッセンス、意識は、あいにくそれ自体の条件づけによって痛々しくも処理される。

26　「我」を溶解することによってエッセンス、意識は目覚め、ぱっと光り輝き、解放され、そのとき当然の結果として「自己認識」、「セルフノーシス」が引きつづき起こる。

27　疑いもなく、正真正銘の啓示は、反論できない明白ないしずえを「セルフノーシス」に持つ。

28　ノーシスの啓示はいつも即座に直接、直観的に受ける。それは主観的たぐいの知的活動を根底から退け、感覚器官から基本的に得られた情報の組み合わせと経験とは無関係である。

29　知性つまり認識論的意味での「ヌース」は、たとえ啓発された知的作用の土台として機能できるとしても、むなしい主知主義におちいることをきっぱりと拒否する。

30　「ヌース」（知性）の存在論的、霊的、精神的特徴は明らかではっきりしている。

31　真理の名において厳かに断言するが、本質的存在は唯一の実在であり、言語に絶するおそろしく神聖なその透明さの前では、「我」、エゴ、自我、「私自身」と呼ばれるものはただ単に外の暗やみ、泣き叫び、歯ぎしりにすぎない。

＊外の暗やみ、泣き叫び、歯ぎしり…『マタイ』8：12、22：13、25：30。

32　「セルフノーシス」つまり「本質的存在」の「セルフノーシスの識別」は、プネウマ、魂の人類学的側面を考えれば、果敢な救済者である。

33　自分自身を知ることは、自らの神聖な本質的存在と一体化したということである。

34　自分は「自分自身のプネウマ、魂」と同一だと知ること、知識と認識との同一感を直接味わうこと ── それは「セルフノーシス」と定義できるし、また定義すべきものである。

35　当然、この途方もない暴露によって、本質的存在が我々に現れるよう自分自身に死ぬ気になる。

22　秘密「仏教」の「ナーガ（蛇）」 ── 彼らは形而上学的な教義を正しく解釈するがゆえに仏法の守護者であり、神秘的知識のおかげで自己実現した完全なる真実の人間である。

23　一匹のエジプトコブラからなる冠テルムティス Thermuthis は、「イシス」、我々個人の私的な聖なる母「クンダリニー」に関連する。なぜなら我々ひとりひとりには聖なる母が内在するからである。

24　尾骨（脊柱基底部）の磁気中枢内でとぐろを巻く、魔力をもつ火の蛇「クンダリニー」は、稲妻のように光り輝く。

25　偉大なる「カビール」ナザレのイエスは、蛇が悪の象徴だったら蛇のようにさとくあるように、とは弟子たちに一度も忠告しないでいただろう... 。

＊「わたしが、あなたがた〔十二使徒〕を遣わすのは、狼の中に羊を送り出すようなものです。ですから、蛇のようにさとく、鳩のようにすなおでありなさい。(『マタイ』10：16)

26　思いだすまでもないが、もし蛇が悪の力と関係していたら、「拝蛇教団」の賢明なエジプト・ノスティック、オフィス派は、生きたその爬虫類を典礼の中で「ソフィア」（神智）の象徴として決して礼拝しなかったであろう。

27　我々の内なる女神としての蛇は聖霊の妻、我々の聖母であり、性的な十字架のあしもとで涙を流して泣き、七振りの短剣の突き刺さった心臓をもつ。

28　「ステラ・マリス」、海の星、マラー、マリア（むしろ「ラム・イオ RAM-IO」と言ったほうがよいかもしれない）、勝ち誇ってアデプトの脊髄を上昇する蛇は我々自身の本質的存在だが、そこから生じたものであり、ワシ、第三ロゴスにむさぼり食われるべきである。

29　マヤブ Mayab の聖地の老賢人たちは、蛇の饗宴（きょうえん）という超越的な考えを大昔からつねづね強調してきた。我々は蛇に飲みこまれる必要がある。

30　「トナンツィン」、我々個人の私的な聖なる母「クンダリニー」、「蛇女」、「母神」にここでふれるのは時宜を得ている。

31　メダルの表である「アナワク」の古典のメデアは、宴の前に「エゴ」を絶滅させる蛇「コアトリクエ」である。

＊メデア…〔ギリシャ神話〕コルキスの王女でイアソンの妻であった女魔法使い。夫イアソンを助けて、金羊毛を獲得させた。

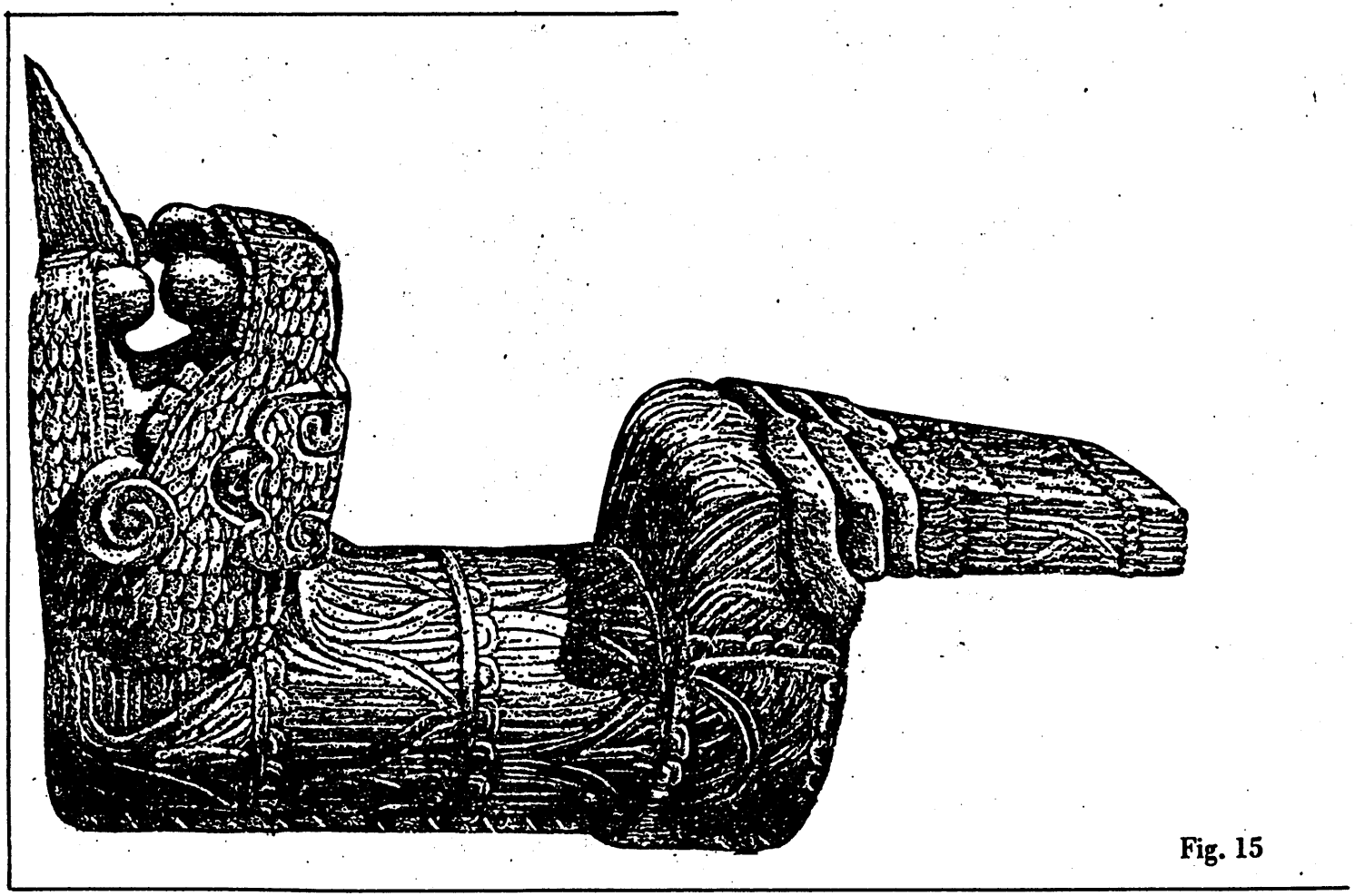


Fig. 15

32　サトゥルヌスの蛇は汚れたものは何も食べない。クロノスの神妃であるそれは、自分を食べることができるにすぎない。霊魂原理、栄光の体、力、能力等。

33　真理の名において以下の声明を述べるべきである。「特例なく、イニシエイトは誰も、西洋の秘教の伝統にのっとり『被免達人（アデプトゥス・イグゼンプトゥス）』の位階を獲得した者でさえもまだ、あらかじめ蛇にむさぼり食われないなら蛇のパワーを享受できないであろう」。

34　チャクラからチャクラへと脊髄管に沿って、魔力をもつ火の蛇を上昇させるだけでは不十分である。蛇にむさぼり食われるのは一刻のゆうよもなく緊急に必要で、後回しにできない... 。そのようにしてはじめて何か異なった違った存在に変わる。

「ド・ブルブルグ」De Bourbourg の名著のなかで、メキシコの半神「ボータン」は自分の探検を物語り、地下を順調に進むと天の根元に行きつく秘密の通路を描写する。この通路はひとつの蛇の穴で、「ボータン」自身が「蛇の子」つまり蛇（蛇にむさぼり食われた者）だったのでそこに入れたことを付け加える。

アッシリアの神官には神名がついているのが常であった。また英国ケルト地方のドルイド僧も蛇と呼ばれ、「われは蛇なり、ドルイド僧なり。」と叫んでいた。

エジプトのカルナック Karnak は英国カルナック carnac（蛇の山の意）の双子の兄弟である。

ド・ブルブルグは指摘するが、ボータン、ケツァルコアトルつまりメキシコ人の蛇神の名前のついている長たちは、ノアの息子ハムとその子カナンとの子孫である。「われはヒビム Hivim なり。」と彼らは言う。

「ヒビムであると同時に、われは偉大な竜（蛇）人種に属する。われはヒビムゆえ、われ自身が蛇なり」。

＊ド・ブルブルグ…グアテマラ人たちの聖典『ポポル・ブフ』の翻訳家、宣教師。

35　いろいろな心理的集合体すなわち非人間的要素に具現された、自分自身の獣的情欲・激情との悪戦苦闘が、志願者、帰依者をつねに待ち受けている。「蛇女」の特別の助けをかりて、それらの心理的集合体を宇宙の砂ぼこりにすべきである。

36　聖仙（リシ）の洞窟、テイレシアスをはじめとするギリシャの予言者たちの館は、岩の地下空洞に住んでいる「蛇王」ナーガの巣をまねたものであった。

＊テイレシアス…〔ギリシャ神話〕テーベの盲目の予言者。入浴中のアテネを見たため盲にされたが、後にその慰めとして予言の能力が与えられた。

37　勝利したアデプトは「蛇の子」に、魂のワシ（第三ロゴス）に飲みこまれるべき蛇になる。

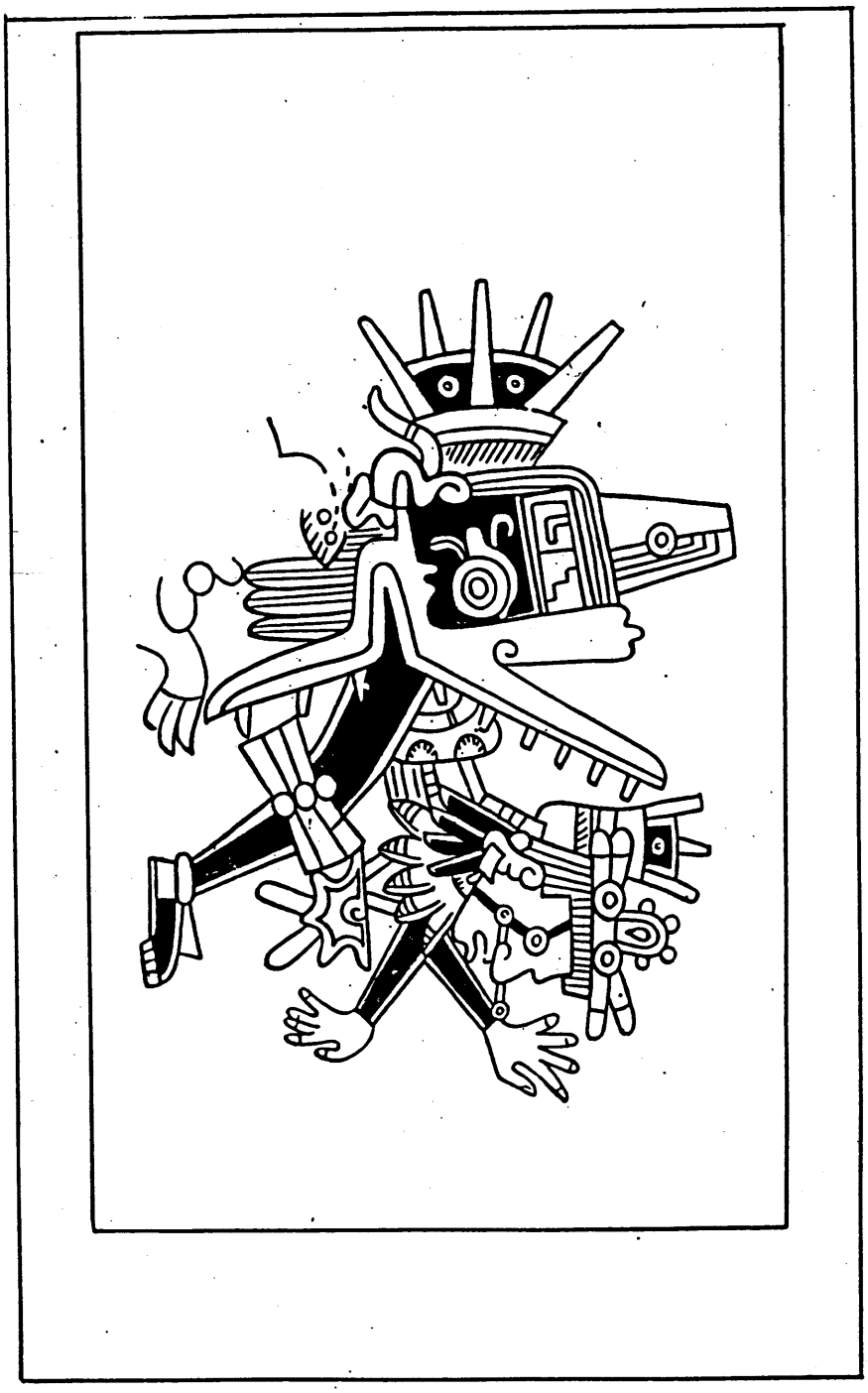


Fig. 16

38　クロノス-サトゥルヌスはシバ、天地創造の長子、我々の本質的存在の本質的存在である。秘儀大司祭にして大魔術師、アナワクのワシ。

39　ギリシャ神話ではクロノスは最古の神々のひとりと見なされる。つまり神々の真の創造者なのである。

40　サトゥルヌス-クロノス、反抗的なワシは蛇を飲みこんで、我々を神々に変える。

41　この神話には、生命を与える者は死を与える者でもある、という超越的な考えが再び見いだされる。

42　円形鎌をもつサトゥルヌスが、長柄の草刈り鎌をもつ死神に容易に変わるのは疑いない。

43　胚が死なないなら植物は生まれない。蛇がサトゥルヌスのワシに飲みこまれないなら、我々は決して神々にならないであろう。

44　サトゥルヌスに関してオビディウスはこう語る。「クロノスはラティウムの大昔の神王であった。ラティウムは、彼がヤニクロ Janiculo と呼んだ山をローマ地方で占めた」。クロノスはエトルリアに君臨したが、我々はウンブリアに君臨したとはっきり言う者たちもいる。イタリアに建った最初の神殿は、サトゥルヌスに捧げられたものであった。

45　わが子ユピテルに天から追放されて下界で人間にまじって暮らし、クレタから追い出されてイタリアで手厚くもてなされ、そこで農業、芸術、科学を教えたのが、まさしくサトゥルヌス神に他ならない ── マクロビウスはサトゥルヌスに関してそう語る。

46　クロノス-サトゥルヌスに関して、タルペイアの丘すなわちカピトリウムの丘でサトゥルヌス都市をも築いたと言われる。

47　クロノス-サトゥルヌスを「カオス・テオス」（混沌神）、万物が生じては戻る子宮（その名前はまさしくこれを意味するからである）、時と年の神と見なす（キケロ　2、『神々の自然』De Natura Deorum）人々が多くいる。こういうわけで「エオ」（イオ）という名前に似ていた〔同化した？　要検討〕のである。

48　ジャーナ JANA、ヤーナ YANA、ナーナ GNANA またはノーシスは、サトゥルヌスの科学すなわち「奥義の知識」の科学である。「エノイチオン」の、つまり予言者の科学。

49　しかしはっきり言っておかねばならないが、前述のどの段落でも特定の惑星のリージャント（摂政）、ナサダ Nazada あるいは「カビール」に別にふれていない。内心のサトゥルヌス、聖「アウゴエイデス」、個人的な「ロゴイ」、我々ひとりひとりのワシにふ

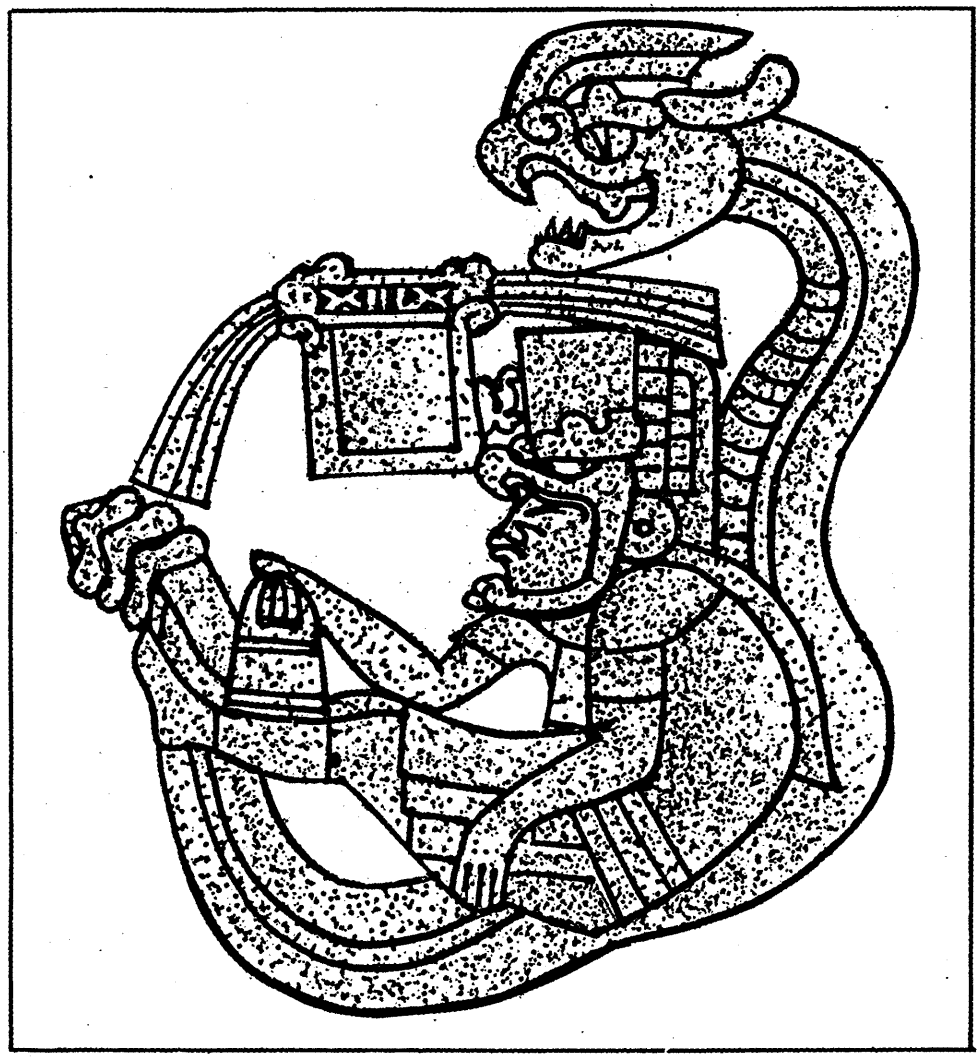


Fig. 17

れたかっただけである。

50　疑いもなく、ワシにむさぼり食われた蛇は実際、独自の権限で、羽毛のある蛇になる。

51　偉大なる「カビール」イエスは、モーゼ、ダンテ、聖ラマ、「仏陀」、「ケツァルコアトル」その他大勢の秘儀司祭と同じように羽毛のある蛇であった。

52　ヒンドスタンのヨギは、かぎりない畏敬の念をいだいて、二重の創造的「男性-女性」原理、「シバ-シャクティ」の神聖な結婚について語る。

53　男神「オメテクトリ」（「ワシ」）と女神「オメシワトル」（蛇）は、「羽毛のある蛇」に完全に現れている。

54　我々の祝福された神「ウィチロポチトリ」の大神官、「クアウコアトル」（蛇ワシ）は明らかに覚者であった。

55　羽毛のある蛇が、ウチワサボテンの刺でじゅうぶん象徴される自発的苦しみと意識ある努力（ワーク）とのたまものであることは、思いだすまでもない。

56　蛇、ワシ、ウチワサボテン、賢者の石、広大な湖の水、偉大なテノチティトランの驚嘆すべき秘教的いしずえ。

57　アスカティトラン写本は、カヌーに乗った数人の漁師がイグサと水鳥に囲まれてあくせく漁をしようとする絵で、テノチティトランにおけるメキシコ人の生活の始まりを巧妙に寓話化する。

58　決して言いおよぶに値しない軽薄な夢想家は、こういったことはみな1325年に起こっていたと馬鹿馬鹿しくも空想する。

59　ソクラテス流に言いかえると、無知な学者は知らないだけでなく、知らないことを知らない。

60　偉大なテノチティトランの建設が、歴史の流れで我々に先立つこと幾世紀もの深い闇の中に隠されていることを、「アナワク」の神々はよく知っている。

61　力あふれる太陽文明「メキシコ-テノチティトラン」のみすぼらしい建設者は、貴重な時間の大部分を漁と水鳥狩りに当てていた。

62　もちろん、あの素朴で気さくな人々は、クルワカン、アスカポツァルコ、テスココの洗練された近隣住人の尊大な視線の前では、他の「湖に住む未開人」よりもすぐれた点が

なかった。

63　彼らの武器は、いつの時代でも利用された古風な魚網と、湖の鳥を狩るのに欠かせない有名な lanzadardos〔槍？〕であった。

64　メキシコ民族は聖なる神々（キリスト教の天使、大天使、権天使、能天使、力天使、主天使、座天使、智天使、熾天使）を尊敬し、あがめていた。

65　ここで何柱かの神々にふれるのは実際たいへん時宜を得ている。「アトラトル Atlatl を運ぶ者『アトラワ』ATLAHUA」。

66　「アミミトル AMIMITL」（語源学によれば MITL「矢」と ATL「水」から来ている）。

67　「オポチトリ OPOCHTLI」左ききき。「左手で矢を数本放つ者」と訳そう。

68　ヒンドスタンのデバ、ヘブライのメラキム、「アナワク」の神々、キリスト教の天使。彼らは自然の驚くべき諸力の霊的原理である。

69　コーザル界の第五イニシエーション（アデプト・イニシエーション）の資格条件をそろえないかぎり、誰もそれらの自然力を絶対的に支配できない。

70　火、風、水、地の王子に受け入れてもらうのは不可欠である。普遍的要素の真実の王になる前に、自然力の ultérrima〔未詳〕な霊的本性を実現してしまうことは急を要する。

71　嘆願はそれとは異なる。「求めなさい。そうすれば与えられます。たたきなさい。そうすれば開かれます。」〔『マタイ』７：７、『ルカ』11：９〕と聖書に書いてある。

72　チチメカ族のアトラカたち ATLACA〔未詳〕は聖なる神々（キリスト教の天使）の前にひざまずいていたが、回答はすぐにあった。

73　都市建設のため大陸の住人から木材、板、石材を買えたとき、メキシコ人は幸せを感じた。

74　魚、オタマジャクシ、カエル、小エビ、水ヘビ、水バエ、湖沼のミミズ、アヒル、水鳥等と有用な材料を交換する物物交換制度によって、そのような購入が行われた。

75　じつに飾りけなく見すぼらしく素朴に「メキシコ-テノチティトラン」の真の建設者、大天使「ウィチロポチトリ」の神殿が築かれた。

76　ああいう礼拝所は予算の都合で確かにごく小さかった。イグサと葦に囲まれて外地に

Fig. 18

定住したこれらの人々が、石材と木材をじゅうぶん持っていなかったのは明らかである。

77　大昔の伝説によれば、つましいと同時に華麗な当時の思い出は、年に一度、「エツァルクアリストリ」 ETZALQUALIZTLI 月の祭りの間に祝われていた。

78　われらの聖主「ウィチロポチトリ」に捧げられた最初の小礼拝堂「アヤウカリ」AYAUHCALLIは、現在のメトロポリタン・カテドラル（首都大司教座聖堂）の少し北西、約300メートルのところ、今日ソカロと呼ばれる憲法広場の中心と同じ方向にそびえ立った。

79　自主権を有する後のメキシコ人は確かに努力を少しも惜しまず、祝福を受けた大天使「ウィチロポチトリ」にふさわしい礼拝堂を、ともかく聖者の選んだ大聖地につくった。

80　疑いもなく、ごくまれに見るその磁気中心地のまわりには代々、宮殿、ピラミッド、神殿等が誕生した。

81　声高に断言するまでもないが、ワシと蛇が「クアウコアトル」とその民に出現したその同じ場所で、聖なる神「ウィチロポチトリ」の神殿が後に建てられた。

82　偉大なる「テノチティトラン」が何よりもまず神殿であることを、たいへん率直に、歯に衣着せずきっぱりと言おう。

83　「テオカリ」（神殿）には州市町村の基本的根拠がことごとく要約され、集中する。

84　岩の多い堅固な地面に厳かに支えられている驚くべき磁気中心地。

85　泥沼の透明な水のまっただ中に浮かぶ美しい島。伝説の湖の広々とした入り江にある異国の地。

86　多くの都市と小村が、陽光を浴びてそれらの湖岸に輝いていた。西方のアスカポツァルコとトラコパン、南方のコヨアカン、北方のテペヤカック等。

87　メキシコ人は多数の小島や砂州や泥の層などを利用せねばならなかった。

88　こつこつと実に根気よく、あの水陸両生の民族は、イグサの沼に泥を積みあげて地面をつくり、かずかずの用水路を深く掘り、湖岸にたいへんうまく土手をこしらえ、あちこちに石畳道と橋を築くことから始めねばならなかった。

89　そのようにして、パワーあふれる蛇文明の驚異的な中心地、偉大な「テノチティトラン」が誕生した。

第１２章
終末の天変地異

1　疑問の余地なくアステカの有名な暦、太陽の石は科学、哲学、芸術、宗教の完全なる総括である。

2　火の三角形の舌をもつ「トナティウ」、聖ヨハネの言葉、ロゴス、宇宙創造主デミウルゴス、それは性の錬金術の黄金の子、真夜中の霊太陽、飛翔するワシ、光り輝く智恵の竜であり、我々に生命と光熱を与えてくれるきらめく星で表される。ナワトル風の飾りつけのあるトナティウは、太陽の巨石の中心で栄光に輝くようである。

3　「偉大な顔」の左右にはワシの鉤爪で武装した両手が見え、人間の心臓を握りしめる。

4　超越的な秘教に関しては、“M　M”は鉤爪による挨拶の深い意味だということがよく知られている。

5　メキシコの言葉の彫像のまわりには、「４の地震」の日付が大きく彫刻されているのが見える。現代の第五の太陽が火と地震によって終わる日である。

6　「地震」記号の不思議な各長方形には、先の四つの太陽が滅びた日付が彫られている。

7　かつてクリスタル島に幸せに暮らしていた「第一の太陽の子供たち」（第一人種の聖両性具有者）は、ジャガーに食われて滅んだ。（本書で前述したネコ科動物に関する項目を思いだそう）。

8　「第二の太陽の子供たち」（太陽神アポロの国の第二人種）、ヒュペルボレオス〔ハイパーボーリアン〕人は強烈なハリケーンで壊滅した。

9　太平洋のレムリア大陸にかつて住んでいた「第三の太陽の子供たち」（レムリアの雌雄同体）、第三人種の群衆は、大地震と火の雨の太陽によって滅んだ。

10　「第四の太陽の子供たち」、第四人種（アトランティス人）は水に飲みこまれた。彼らの大陸は大西洋に位置した。

11　偉大なる「カビール」、イエスの預言めいた説教と『ペテロの手紙　第二』を徹底的に研究した者は、太陽の石の厳しい語気にうやうやしく頭を下げるであろう。

12　フランスの非凡な予言者、著名な占星術師ミシェル・ド・ノストラダムス（1503－66）はこう語る。

Fig. 19

1999年第７の月、恐怖の大王、空より来たる。
（『諸世紀』第10章72の最初の二行を参照）

13　天文学的計算によれば、この20世紀には皆既日食は二回しかなかろう。ひとつは1962年２月４日、もうひとつは1999年８月。

14　予言者ノストラダムス自身が、他の天体による惑星地球の軌道と運行の恐ろしい変動〔摂動〕を科学的に説明する。七日間であるが、その天体はもうひとつの太陽のように見えるという。

15　『聖ヨハネの黙示録』〔８：11〕は、「苦よもぎ」（苦み）という名でその天体に触れている。

16　「ヘルコルブス」という名で我々が話題にする巨大惑星を、「冷たい惑星」と呼ぶ者が大勢いるかと思えば、「赤い惑星」と名づける者もいる。その巨大惑星が、我々の太陽系の巨星である木星よりもはるかに大きいのは疑いない。

日食の後に ── ノストラダムスは語る ── 天地創造からイエス・クリストの受難と死まで、その時からその日まで一度たりともなかったような曇った陰気な夏が続くであろう。そして10月には大移動が起こり、それがあまりにも激しいため、地球が軌道からずれて、永劫（えいごう）の暗闇の中に投げこまれたと人々は思うであろう。

偉大なる「カビール」、イエスは語った。

だが、これらの日の苦難が続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。
そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能（たいのう）と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。
人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。
いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかになって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。
そのように、これらのことのすべてを見たら、あなたがたは人の子〔別訳「そのこと」〕が戸口まで近づいていると知りなさい。
まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代〔別訳「民族」〕は過ぎ去りません。
この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。
ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたち

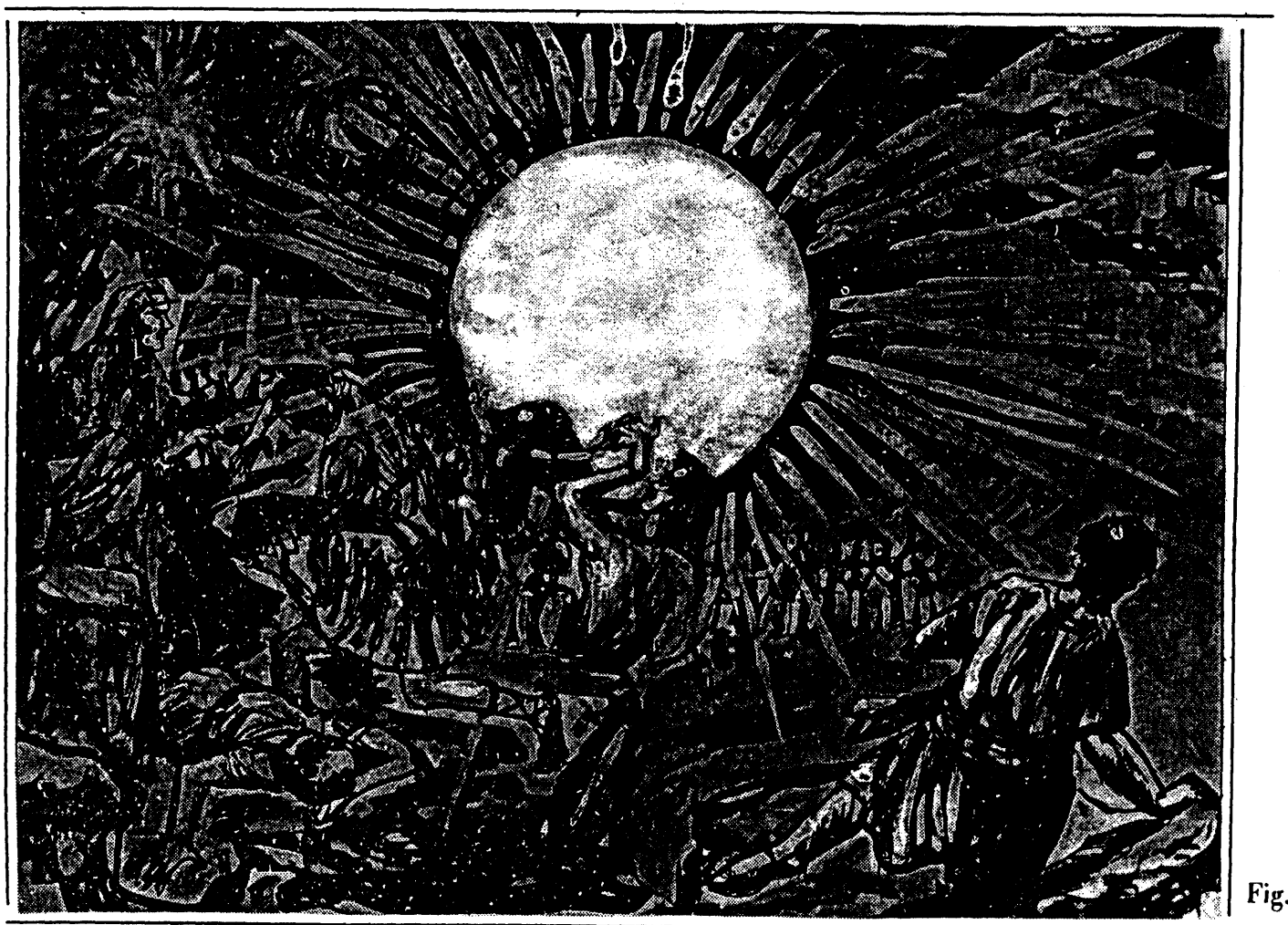


Fig. 20

も子も知りません。ただ父だけが知っておられます。

人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。

洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。

そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかった〔直訳「知らなかった」〕のです。人の子が来るのも、そのとおりです。

そのとき、畑にふたりいると、ひとりは取られ、ひとりは残されます。

ふたりの女が臼をひいていると、ひとりは取られ、ひとりは残されます。

だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。

しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入られはしなかったでしょう。

だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。

主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な思慮深いしもべとは、いったいだれでしょうか。

主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。

まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。

ところが、それが悪いしもべで、「主人はまだまだ帰るまい。〔直訳「時間がかかる〕」と心の中で思い、

その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、

そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。

そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ぎしりするのです。〔『マタイ』24：29－51〕

17　イザヤは語る。「それゆえ、わたしは天を震わせる。万軍の主の憤りによって、その燃える怒りの日に、大地はその基(もとい)から揺れ動く。天の星、天のオリオン座は光を放たないからである」。（『イザヤ書』13：6－13）

イザヤ。「地は酔いどれのように、ふらふら、ふらつき、揺り動かされる。地は倒れて、再び起き上がれない」。（『イザヤ書』24：19－21）

聖パウロ。「まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日〔イエスの再臨〕は来ない。彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します」。（『テサロニケ人への手紙　第二』2：3、4）

18　聖ペテロ。「主の日は、盗人(ぬすびと)のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象〔別訳「諸原素」〕は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろな

わざは焼き尽くされます」。（『ペテロの手紙　第二』3：10）

19　ヨエル。（『ヨエル書』3：15，16）「太陽も月も暗くなり、星もその光を失う。天も地も震える」。

20　聖ヨハネ（『黙示録』6：12－17）。「大きな地震が起こった。そして、太陽は暗くなり、月は血のようになった。そして天の星が地上に落ちた。それは、いちじくが、大風に揺られて、青い実を振り落とすようであった。天は消えてなくなり、すべての山や島がその場所から移された。地上の王、金持ちがほら穴と山の岩間に隠れ、こう言った。『私たちの上に倒れかかって、小羊の怒りから私たちをかくまってくれ。御怒(ごいか)りの大いなる日が来たのだ』」。

21　聖ヨハネ。（『黙示録』21：1，5；20：12，13）。「私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。すると、御座に着いておられる方が言われた。『見よ。わたしは、すべてを新しくする』。また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行ないに応じてさばかれた」。

22　この世の終末にはアンチクリスト（唯物論の科学）が現れると『黙示録』に書いてある。

23　獣、大淫婦、全人類（その宿命的な数は666）、そして彼らを惑わした悪魔（無神論の主知主義）、人を迷わす驚異と奇跡（原子爆弾、宇宙ロケット、超音速機等）を行うにせ預言者は、地球内部の火と硫黄との池に投げ込まれた。〔『黙示録』20：10〕

24　マヤ族の聖宝『チラム・バラムの書の中の書』にはまさにこう書いてある。

13アハウ「カトゥン」は数えられる13番目のものである。「カバル・イスバチ」、「チャチャラカ（野鶏(ムラヒメシャマケイ)）」村落。「キンチル・コバ」、「太陽の顔」の「チャチャラカ」それは13番目の「カトゥン」の座である。

大地の主たちの小さな花束〔飾り菓子〕は、われらの主なる神の宇宙的正義によって黒ずむであろう。

太陽は裏返り、月の顔は裏返るであろう。血は樹木と石を伝って下りるであろう。父なる神、子なる神、聖霊なる神の言葉、聖なる正義、われらの主なる神の聖なる審判によって天地は燃えるであろう。

もろもろの大都市、隠れた村、「マークス」という名の大都市、Mono〔未詳〕、およびマヤ・クサミ・マヤパン、「鹿の旗印」の地ゴロドリーナ・マヤ・スという

Fig. 22

普通の国のすみずみにまで広がる小村全部までもがキリスト教に入るとき、天地の力はなくなるであろう。

それは猛烈な淫乱にふける二つの日〔昼〕の人間（ホモ、レズ）が目だつ時であろう。不道徳な人々や倒錯者の子、堕落と恥のきわみ。

われらの幼児たちは聖母月（5月）に献身するが、われらにとっては利益はなかろう。

月が出る際は悪意による死の源となり、満月が入る際は流血事件が全部生じるであろう。また善良な星々もその良さを生者と死者に見せるであろう。

25　地球の守護神、「世界の王」メルキゼデク Melchisedek はチベットで次のような預言を行った。

人間（というよりむしろ理性をもつ哺乳動物）はますます霊を忘れてゆき、肉体にばかり専念する。最悪の腐敗が地上を支配しようとしている。

人間は兄弟の血に飢えた猛獣のようになるであろう。

イスラム諸国〔半月〕は衰弱し、その信者たちはいつまでも続く戦争に陥るであろう。最悪の災いが彼らに降りかかり、しまいには互いに戦うことになろう。

大王と小王いずれにせよ、王たちの冠は落ちるであろう。一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、全国民のあいだで恐ろしい戦争がひとつ勃発するであろう。

大洋はとどろき... 大地と海底は骸骨でおおわれ... 諸王国は姿を消して全国民は死滅し... 飢え、病気、だれも見たこともなく夢でさえ起こらないような、法に規定がない犯罪。

そのとき神と聖霊との敵がやって来るが、彼らは人間自身に存在する。他人に手をあげる者も非業の死をとげるであろう。

見捨てられた〔別訳「忘れられた」〕人々、被害者たちはそれから立ち上がって、全世界の注意を引きつけるであろう。

濃霧、恐ろしい嵐が起こるであろう。その時まではげ山だったところは森に包まれるであろう。

全地は震え... 無数の人間は奴隷と屈辱の鎖を飢え、疫病、死と交換するであろう。

道路は、あてどなくさまよう群衆であふれるであろう。

もっとも巨大で美しい都市がいくつか火で滅びるであろう... 。一つ、二つ、三つ。一万人にひとりが生き残り、裸で、知力をまったく欠き、住まいを築いたり食料をさがしたりする力もないであろう。そしてこれらの生存者はどう猛な狼のように遠ぼえし、死体をむさぼり食い、自分の肉をかじり、神に戦いをいどむであろう。

全地は荒れはて、神ですらそこから逃げるであろう... 。人けのない地上には暗闇と死。

そのとき私は、今まで知られていない一民族（世界救世軍）をつかわすであろう。彼らはたくましい手で悪徳の耕作地から雑草を抜き、悪との戦いで相変わらず魂に

忠実なごくわずかな人々を導くであろう。

そして諸国民の死によって清められた地上に、ひとつの新しい生きかたを根づかせるであろう。

26　ノスティックはこの預言を受け入れ、暗黒時代「カリ・ユガ」の終末として解釈する。その後、ノスティックによればひとつの新文化と新文明が発祥するという。

27　660年生まれのドイツのあの王女、聖女オデリアは、ものすごい的中率でヒトラーのドイツと第二次世界大戦を預言したが、「カリユガ」の終末に関しては、海から生じて恐怖をまき散らす不思議な怪物たちに言及した。

東洋に奇跡が起こるであろう。ひとつの大きな黒雲のため荒廃と悲嘆が広まる。

28　イギリス生まれの15世紀の有名な予言者マザー・シプトンは、当時、確かに驚くべき事件を予言した。そのいくつかを見てみよう。

29　「自動車」と「鉄道」：馬のいない馬車が走り、事故のため世界は悲しみに満たされよう。

30　「無線電信」：思考は、またたく間に世界中をかけめぐるであろう。

31　「潜水艦」：水面下で人間は移動し、旅していき、眠り、おしゃべりするであろう。

32　「飛行機」：白、黒、緑の衣を着た人間が空中に見えるであろう。

33　「世界的な大災害」：世界は1999年に終末を迎えるであろう。

34　偉大なる「カピール・イエス」は言った。「ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます」〔『マタイ』24：36、『マルコ』13：32〕。

だから、目をさましていなさい。家の主人がいつ帰って来るか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、（日付も年も）わからないからです。

主人が不意に帰って来たとき、眠っている（つまり眠った意識でいる）のを見られないようにしなさい。

わたしがあなたがたに話していることは、すべての人に言っているのです。目をさましていなさい（意識を目覚めさせなさい）。〔『マルコ』13：35−37〕

35　終末の時がやって来て、世界的な大火災がもう間近に迫っている...。

36　『コーラン』の驚くべき数節にふれるのは時宜を得ている。

終末期の到来に先立つ数百年間、月がふたつに裂けるという事態に出くわす。
しかしそれでも、疑い深い人たちは自分の目を信じないであろう。

37　（疑いもなく地球の隣の衛星の地質学的分裂という問題では決してない。マホメットのそのような預言を政治的、軍事的意味で解釈しよう。1980年以降のイスラム運動を観察しよう。そのようにしてはじめてイスラム教国〔「半月（はんげつ）」〕の信者の未来を理解できるであろう。）

初めてラッパが吹かれるとき...
大地と山々が風に運ばれ
たった一撃でつぶれるとき...
天が裂けて、ばらばらに崩れ落ちるとき...
その日は回避しえない日となろう。

38　（惑星ヘルコルプスの接近によって我々の天体、地球に生じる影響は、先に説明ずみである。疑問の余地なく、この地球は、マホメットが『コーラン』で預言したさまざまな天変地異に猛烈に見舞われよう。）

なんという一撃。それは最後の審判の日となろう。
秤にかけて重い仕事をする者は、快適な生活を送るであろう。
軽い仕事をする者は、燃える墓穴（地獄界）を住みかとするであろう。

大地が、たくわえてあった地震で揺れるとき...
地中に埋葬されている死者が吐き出されたとき...
人間は裁かれる覚悟をするであろう。

太陽は裂け、星は落ち、
山は動いて、しまいには地面に激突するであろう。
天は粉々に爆発し、海と川の水は混じりあうであろう。
墓は半開きになって、死者はよみがえるであろう。
善行を積んだ者は、かぎりない幸福を味わうであろう。
しかし堕落した者〔別訳「神に見放された人」「地獄に落ちた人」〕もまた
厳しく罰せられるであろう。　（『コーラン』参照）

39　コーザル界で私はきたるべき大災害を見つめて、神秘的に驚いていたが、そこは言語に絶する音楽の層なので、ビジョンは音の流れで明らかになった。

40　ある快い悲劇的な交響曲が、金星天の深奥に響いていた。

41　あの楽譜の雄大さと壮大さに、その構想の美しさとインスピレーションに、譜面の線の純正さに、快く同時に地味な、壮大であると同時に恐ろしい、ドラマチックであると同時に不吉な、その賢明で芸術的なイラストの色合いと色調に一般的に驚かされた... 。

42　コーザル界でさまざまな預言に聞こえた断片的なメロディーの一節（主題）は、表現力豊かで、大事件と、時の中で必然的にそれより先に起こる歴史的事件とに密接に関係する... 。

43　その偉大なコスミックオペラの楽譜には、第三次世界大戦と関係する交響曲の断片がある。快くて不吉な響き、惨劇、原子爆弾、地球全体を汚染する猛烈な放射能、食料不足、大都市の完全な壊滅、未知の病、流血とブランデー〔？〕の革命、我慢ならない独裁政権、無神論、唯物論、際限のない残虐行為、強制収容所、激しい憎悪、国境の拡大、宗教的迫害、神秘主義の殉教者、ボルシェビキ（ロシア社会民主労働党の多数派）のいまわしい思想、憎むべき無政府主義、まったく精神性の欠けた主知主義、肉体に対する羞恥心の完全な喪失、麻薬、アルコール、女性の堕落・売春のきわみ、悪名高い搾取〔別訳「恥ずべき乱開発」〕、新たな拷問方法など。

44　前例のない芸術と混じって、パリ、ローマ、ロンドン、ニューヨーク、モスクワなどの世界の強大な大都市の破壊と関係する、ゾッとするようなテーマが聞こえた... 。

45　ノストラダムスは、アンリ２世に送った有名な書簡でこう語る。「皆既日食のとき、ひとつの新たな巨大天体がわれわれの天を通過するのが白昼に見えるであろう。しかし占星術師たち（今日と未来の天文学者たちを指す）はこの天体の影響を違ったふうに（たいへん近代的なしかたで）解釈するであろう... 。この誤った解釈のため、食料や物資の不足（大破局（カタストロフィ）をほのめかしている）に備えて誰も備蓄しないであろう」。

医師、占星術師にして天啓を受けた透視者でもあるノストラダムスは、地軸の変動というその事件を自分の予言に加えるが、いつ起こるかというピタリ正確な日付は言わなかった。にもかかわらず1999年に起こる二重の食とそれを結びつける。

46　疑いもなく山羊座に異常な惑星会合（コンジャンクション）が起こり、1984年から1999年にかけてその影響が感じられるであろう。

47　偉大なマスター H.P.B.は今世紀末まで世界的な反乱や蜂起があると、もう何十年も前に予言した... 。

48　福音書の著者ヨハネは語る。「鉄の鳥が火の卵を産むとき、人間が空を支配し、海底を横切るとき、死者がよみがえるとき、火が天から降りてきて、田舎の人間が都会に到達できず、都会人が田舎に逃げられないとき、奇妙な機器が空に見え、風変わりな物が地面から見えるとき... 」。

老いも若きも人間が幻を見、予感がして、預言をするとき、人間がクリストの名において反目しあうとき、飢え、渇き、貧困、病が都会の住民と入れかわるとき。

血を分けた兄弟がたがいに殺しあい、人間が獣を礼拝するとき、そのとき時期が来ている。

49　使徒、聖パウロはテサロニケ人への手紙（第一　5：20－21）でこう注意する。「預言をないがしろにしてはいけません。すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい」。

50　人類の周期的な歴史は、『創世記』第6章の世界的な大洪水（アトランティス大陸の沈没）の物語で始まり、『黙示録』第20章の最後の審判の燃える炎で終わる。

51　荒れ狂う生命の水から救われたモーゼは『創世記』を著した。太陽を称賛する傑物、聖ヨハネは火と硫黄の封印で聖書を閉じる...。

52　このことから、解き放たれた長びく恐ろしい自然の猛威が全世界を襲うように見えるが、迫りくる大異変は至るところで等しく海陸全域にわたって作用するわけではないと我々は確信している。世界救世軍の男女と子供たちは、特別扱いの一部の地に守られるであろう...。

53　そこでしばらくの間、あの選ばれた人たちは、水と火の恐るべきせめぎあいの目撃者となろう...。

54　二重の虹が、大破局の後、新たな黄金時代のすばらしさを告知するであろう...。

55　フィレンツェ人ダンテのマスターであるマントバの大詩人ウェルギリウスはこう語った。「もう黄金時代はやって来ており、ひとつの新しい子孫が支配する...」。

56　他方、聖書が他の書物よりどの程度まで優れているか我々は知っている...。

57　疑いもなく聖書が永久不変の書物、とりわけ周期的な書物であるにもかかわらず、まさに1999年が大破局の年だとはその節のどこにも書いていない...。

58　しかしながら、きたるべき恐ろしい破局の正確な日付がまだわからない ― 聖なる父のみがその日時を知っているからである ― が、「終末の時がもう来ており、今がその時だ...。」と我々は直接の体験によって知っている。

59　その日付の支持者にここで反論をくわだてるつもりはなく、ただ次のように言いたいだけである。聖書それ自体には人類史全体の啓示ばかりか、諸民族の歴史そのものの啓示すらあちこちに含まれるのに、1999年にアーリア人種（現人類）が滅亡するとはひとこと

も書かれなかった... 。

60　にもかかわらず、周期的な各大世代が行う諸国遍歴の物語が「詳しく（インエクステンソ）」聖書に書いてあることを、学者は決して無視できない... 。

61　人類はもう極刑の機が完全に熟している。この恥ずべき人類の最期が迫っている...。

62　カバラ的分析によれば２５００という数字には大破局の秘密が隠されている。理解力のある者は、ここに智恵があるので理解するといい... 。

＊釈迦入滅から2500年後、弥勒（マイトレーヤ）が衆生を救済すると言われます。

63　不幸にも人々は、あるカバラ数の深い意味に踏みこむすべを決して知らない。残念なことに、すべてを文字どおりに解釈する... 。

64　多くの人にとって罰の時を、またある人たちにとって殉教の時を意味する最期を冷静に待つ必要がある... 。

まず第一に、次のことを知っておきなさい ― ペテロは語る ― 終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。先祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」

しかし、主の日は、盗人（ぬすびと）のように ― 聖なる父のみが知っている日付に ― やって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象〔別訳「諸原素」〕は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。〔『ペテロの手紙　第二』３：３，４，10〕

＊訂正　①『ニューズ』Vol.33『三つの山』第36章「金星天」p.30 l.7-l.8
地質学的または物理的分裂のことを、ある意味で問題にしているかもしれない
→　地質学的または物理的分裂という問題では決してありえない

②『ニューズ』Vol.47『黄金華の神秘』第21章「裏切り」p.6 l.2　銅　→　鉛

③『ニューズ』Vol.57『黄金華の神秘』第38章「回帰の法則」p.14 l.19-l.20
ある意味では例外かもしれない　→　決して例外であるはずがなかった

④『ニューズ』Vol.57『黄金華の神秘』第39章「輪廻」p.27 l.8-l.9
ある意味では…覚悟はできていた　→　決して…覚悟はできていなかった

第１３章
天国と地獄

1　おー、恵まれた「ミスコアトル」よ。あなたは歌でほめたたえるに十分値する。あなたの名声はこの世に残るに十分値し、あなたが友、貴族、寛大な者、親戚に姿をあらわして喜ばせるよう、アレイト〔西インド諸島のインディオの輪舞（曲）〕の踊り手が、口、enrededor de los arabales〔要検討〕、「ウエソチンゴ」HUE-XOTZINGO の小太鼓であなたを連れてくるに十分値する。

おー、栄光ある、まったく称賛すべき若者よ。心臓を太陽にささげた、ひとつづきのサファイアのようにきれいなあなた。あなたはこの世にまた再び芽を出し、また再び花開き、アレイトにやって来て、「ウエソチンゴ」の小太鼓と太鼓のひびきのうちに貴族と勇士に姿をあらわし、友にまみえるであろう。

（『サアグン』２：140）

戦死者や生贄（いけにえ）の台で殺された者は、みな太陽の家に行っていた。みな広大な平原を仲よく歩いていた。太陽が姿を見せようとしているとき、日の出のとき、そのとき彼らは鬨（とき）の声をあげ、くるぶしにつけた鈴を鳴らし、盾をたたきだす。

もし二三本の矢でその盾に穴があいたなら、その隙間（すきま）ごしに太陽を見つめられる。しかし穴がひとつもあいていない者は太陽を見られない。

リュウゼツランとサボテンの中、刺だらけのアカシアの中で死んだ者、神々に生贄を捧げた者は、みな太陽を見つめ、そこまでたどり着くことができる。

四年たったとき美しい鳥に変わる。ハチドリ、小鳥、ハエ、目のまわりに黒いくぼみのある金色の鳥、あるいはキラキラ光る白い蝶、細い多毛の蝶、多彩な大きい蝶に変わる。数杯飲むように、そこの休憩場所で蜜を吸って歩き、よく地上にやって来ては、血のように赤い花（パイセンティア、エリトリナ、カロリネア、カリアンドラ）の蜜を吸う。　（ナワトルの叙事詩）

老人たちによれば、そこ天で自分と暮らすよう、自分を楽しませて、その眼前で歌い、自分を喜ばせるよう太陽は自分たちを心の中で呼ぶという。

これらの戦死者や生贄は、太陽と共に絶えることのない喜びのうちにあり、絶えることのない歓喜のうちに生き、美味なかぐわしい花という花の香りと汁を味わって吸い、悲しみも苦しみも不満も決して感じない。太陽の家で暮らし、そこには歓喜という富があるのだから。

そしてこのような戦死者は、こちらの世界では大変な名誉を受け、多くの人がこの死にざまを望んでいる。

多くの人がそんな死者をうらやみ、このため誰しもこの死を望む。そんな死者は大いにたたえられるのだから。　（『サアグン』２：140）

2　謎にみちた太陽の詩... 世俗の人類学には知られていない超越的真理... 。

3　「マカラ」、「有鱗類」、メディアの有名な飛竜についていろいろ語られてきた...。

4　大英博物館では翼と鱗のある竜の見本をまだ目にすることができる... 。

5　「偉大な竜」はただ智恵の蛇を敬い、崇拝するだけである。残念ながらアッシリア学者は古代カルデアの竜の本質を本当は知らない。

6　「竜」の驚くべき象徴が七つの秘教的意味を持つのは確かである。

7　その最高のものが「自分で生まれた者」、「ロゴス」、「ヒンドゥー教のアジャ」と同一であることを声高に言うまでもない。

8　そのもっとも極悪の意味は悪魔であり、かつてルシファー、光をもたらす者、明けの明星、「中世の年老いた錬金術師の真ちゅう」と呼ばれたあのすばらしい生き物である。

9　拝蛇教団「ナアッセン派」と呼ばれたキリスト教ノスティックの間では、それは竜、「人の子」であった。その七つの星は『聖ヨハネの黙示録』の「アルファとオメガ」の右手に栄光に輝く。

10　古代の「プロメテウス-ルシファー」がミルトンの悪魔に変わってしまったのは嘆かわしい... 。

11　サタンは往年の拘束されない巨人ティタンに再びなるであろうが、そのときはすでに内心の本性から動物的要素をすべて取り除いている... 。

12　悪魔を磨くのは一刻の猶予もなく緊急に必要だが、これは自分自身と戦い、「我」、「自我」、「私自身」を構成する心理的集合体をまるごと溶解してはじめて可能となる。

13　自分自身に死んで、はじめて真ちゅうを磨き、真夜中の太陽（聖なる父）を見つめることができよう。

14　自分自身との戦いで死ぬ者はみな、「自我」を全滅させる者は、広大無辺の宇宙でまばゆく光り輝く。彼らは王国のさまざまな領域（太陽の家）に入る。

15　天国における戦いの喜びは、イニシエーションの神殿と古代の地下聖堂に根ざす。

16　ミカエルは赤竜と、聖ゲオルギウスは黒竜と戦う。アポロと大蛇ピュトン、クリシュナと五頭蛇カリヤ、オシリスとテュポン、ベルと竜などは戦いにつねに巻きこまれる。

17　竜とはつねに我々自身の内心の神の反映したもの、神聖な「ロゴイ」の影であり、

「科学の箱（箱舟）」の底から、自己が実現される瞬間を神秘的にうかがい、待っている。

18　竜と戦うことは誘惑を克服して、内面に巣くう非人間的要素（怒り、貪欲、色欲、妬み、傲慢、怠惰、大食など）のひとつひとつを残らず取り除くことを意味する。

19　生贄の台すなわち「聖務」の台で、「第九球体」で死ぬ者は太陽の家に行き、神と合一する... 。

20　ベーダの聖地ではアルジュナは、自分自身の親戚（敵軍である自分の複数の「我」、心理的欠点）を殺さねばならないことを理解して、戦場のまっただなかでぶるぶる震えあがる。

21　本物のメキシコ人にとって、死後の霊のおもむく場所を決定する要因は、特定の死にかたと死者の生前の職種である... 。

22　激戦で亡くなったり、囚人として捕られられて生贄の石「テチカトル」TECHCATL で生贄にされたりした敵の戦士ですら、黄金の光の崇高な王国（太陽の楽園）に入る。この戦士には一柱の特別の神がいるが、「殺された敵の神テオヤオミキ TEOYAOMIQUI」のことを言いたい。

23　民族宗教のこのテーマの秘教的側面は超越的である。これを理解するのは後回しにできない。「キリスト教徒も他の信条、宗教、言語の聖者たちを敬うべきではないか」。

24　お産で亡くなった産婦は、賢明にも「とうもろこしの家シンカルコ」CINCALCO と名づけられた西方の楽園で幸せに暮らすが、彼女らも大変敬われる... 。

25　疑いもなく、女神になる前、アナワクの宗教によればお産で死んだ産婦は、並はずれた魔力を享受するという。

26　お産で死ぬ産婦は敵を打ち負かしたと言われ、戦好きの若者はその右手をたまらなく欲しがり、奪い取ろうとする。戦いで無敵にしてくれるからである。だから右手を切断されないよう、甲冑で身を固めた一族の男性がそんな死体をいつもきちんと見張っていた。

27　興味深いことに、「アナワク」密儀によれば、そんな女性は女神になる前、頭のかわりにされこうべをつけ、かぎ爪のある手足をした不吉な恐ろしい幽霊となって地上におりるという。

28　お産で死ぬ、あの気高い女性の驚くべき「死後（ポスト・モルテム）」の状態... 。

29　『バルド・ソドル〔チベットの死者の書〕』のふれる三日間のあの気絶は「肉体」の

死後つねに起こることだが、それに続いて、あの亡くなった女性は送ったばかりの生を再度体験し、そのときは身の毛もよだつ外観をした苦しむ幽霊に見える... 。

30　しかし終了した生の回想が済んだら、「エッセンス」は「我」のない状態で天界から天界へと上昇し、ついには太陽の歓喜にひたる... 。

31　ずっと後、よい「ダルマ（徳）」が尽きると、それらの霊は新しい子宮に必然的に戻らねばならない... 。

32　お産で死んだ「女神チワテテオたち」は「とうもろこしの家シンカルコ」という名の西方の楽園で暮らすことを、「アナワク」の賢明な神官はつねに強調した... 。

33　胚から、種から命が生まれ、彼女たちはまさに生まれようとする赤子のために命をささげた... 。

34　母なる自然は、それらの祝福された女性のおごそかな犠牲に、つねに最高のしかたで報いるすべを心得ている... 。

35　月天、水星天、金星天、太陽天でそれらの霊が味わう幸福は言い表せない... 。

36　残念なことにあらゆる報いは底をつき、結局それらの霊は新しい子宮に入るため「我」の中にもどる... 。

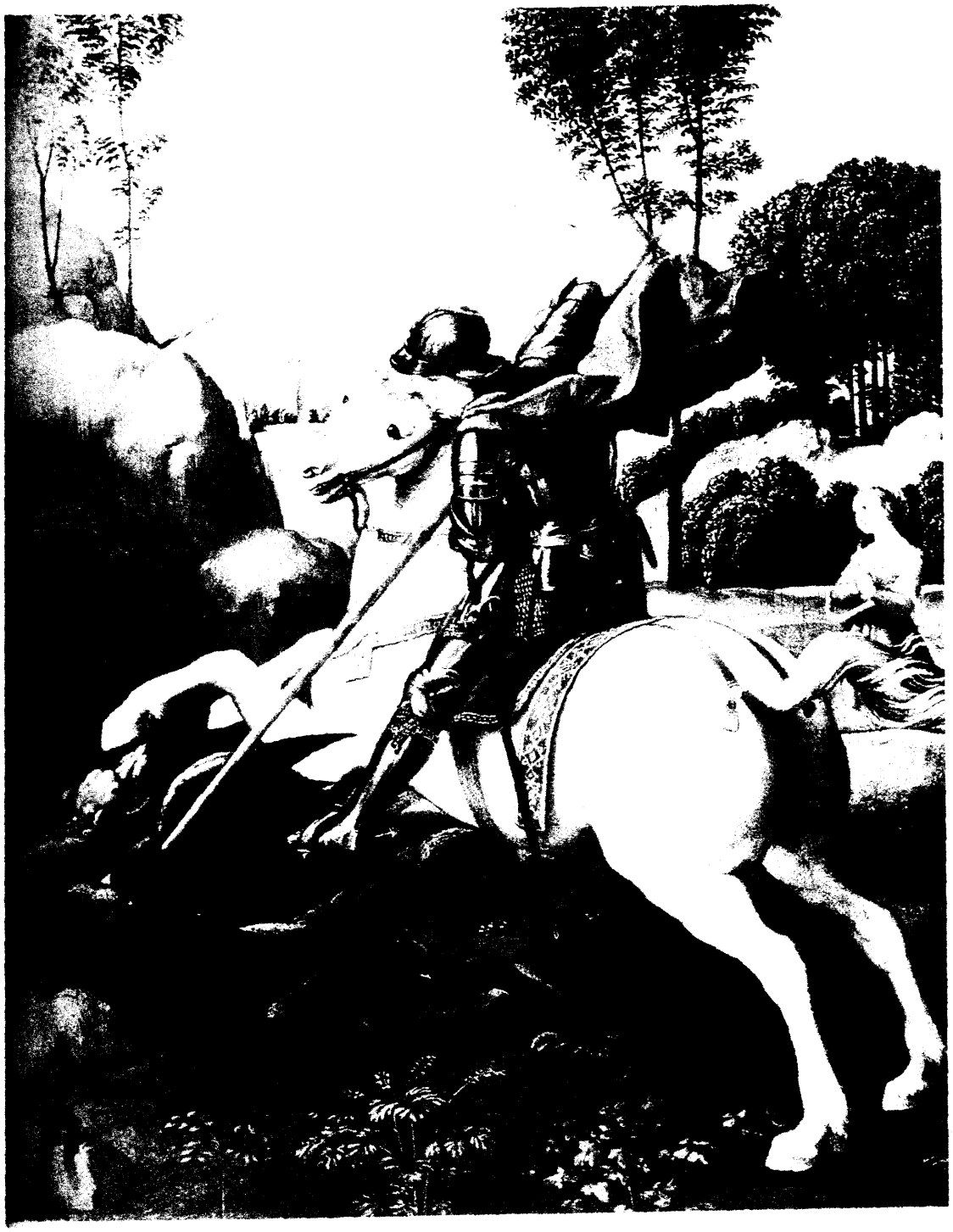
37　川や海の激流、あるいは深い湖の波にのまれて溺死した者、雷に打たれて死ぬ者は、幸いにも「トラロック」の南の楽園に入る。そこは多産と豊穣の地で、ありとあらゆる果樹が立ち並び、とうもろこし、フリホール豆、サルビアその他ひじょうに多くの食物が豊かになる... 。

38　「テオティワカン」の神殿にある見事な絵は、「トラロック」の有名な楽園「トラロカン」への揺るぎない信仰を物語る。

39　自然の高次元には幸福の楽園がいろいろと存在する。チベットのラマたちが西方に配置する「阿弥陀仏」の浄土を思いだすまでもない... 。

40　『バルド・ソドル』にはさまざまな「エデンの園」が引き合いに出される。「至福の浄土」、「密に形成された浄土」、「長髪の人々（「金剛手（バジュラ・パーニ）」）の浄土」、「ウルギャンのいる蓮華（「蓮華生（パドマ・サンババ）」）の発光する無限の精舎（ビハーラ）」等。

41　「アナワク」の秘密の教義によれば十三の天国が存在し、物心がつく前に他界する幼な子の霊は、十三天のうちの至高天で暮らすことをおごそかに教えてくれる。



42　古代メキシコの教義によると、それらの純真無垢な霊は、新人類に化身できるよう、きたるべき大異変で現人類が滅びるのを待っている... 。

43　千古のチベットでは『バルド・ソドル』は、苦しみにみちたこの世に戻らなくていいよう解放を望む死者を導いていた。

44　ファラオの聖地では、多くの霊は「エゴ」の溶解で働いた後、「サンサーラ（輪廻）」というこの悪のはきだめから何とかうまく逃げおおせた... 。

45　恐ろしい試練が、現世にもどりたくない死者を待ち受ける。勝利するとき前述の超感覚的世界に入り、幸せなことに無邪気な幼な子として大洋につかる前、そこで教えと援助を受ける。

46　それらの霊の多くは「内心の自己実現」で働くため、大異変の後、黄金時代にまた戻ってくるであろう。

47　疑いもなく、「生のサイクル」の終了前、折よく卒業するしかたを知るのは賢明である... 。

48　退学処分を受ける前に「ライフ・スクール」を卒業するのが望ましい。地球内部、うす暗い冥界タルタロスでの退化は悲惨きわまる... 。

49　日の射す国「ケム」のファラオ「カフラー」の時代に、私はある事例を個人的に知った... 。

50　「本質的存在の高次的実在体」を少しもつくらなかった、たいへん信仰心の厚い一国民のことである。

51　本来きわめて真面目なあの神秘家は、自分はイニシエーションの神判（神明裁判）に不適格だと思い、生の各サイクル、各周期の後に霊を待ちうける運命を知り、宇宙舞台から身を引くほうを選んだ... 。

52　あの帰依者は「大アルカナ」の言語に絶する神秘をまったく知らなかったが、「我」を持っていて、それを持っていることを知り、死後この涙の谷に舞い戻らないよう、「我」の崩壊を望んでいた... 。

53　聖なる母「クンダリニー」、「トナンツィン」、「イシス」が、それらの「自我」構成要素を溶解するワークで彼女をいつも助けたのは明らかである。

54　当時、あの篤信家が非人間的要素をすべて取り除いたとは決して言わないが、その

ワークは大いに進んで、肉体の死後、この世にもどるつもはないという不動の意志をあの世で持ちつづけた... 。

55　後に、いつものように三日気絶した後、その霊は終了した生を回想して再度体験せねばならなかった... 。

56　回想ワークがすむと、死者はすべての善行と悪行の結果について知らされ、もう舞い戻るつもりはないという意志を断固として持ちつづけた... 。

57　死者を震えあがらせる「法の狼」のゾッとするような遠ぼえ、「客観的正義の恐ろしいハリケーン」、「死者の国のいまわしい嵐」、「たえまなく性交する無数のカップル」、「魅力と反発」、「好感と嫌悪」、「洞窟の恐怖」等。それでもあの霊は堅い意志をつらぬいた... 。

58　生前、援助を約束していたエジプトの神官たちの厳かな声は、死者まで到達して、その意志を思いださせていた... 。

59　秘密に存在する彼女の聖なる父「ゲブ」と「ヌート」つまり聖なる母「イシス」は、子 ── 死者 ── を最後の試練にかけたが、死者は勝利した... 。

60　これらすべての内心の勝利の結果として、幸いにもあの死者は「トラロック」の楽園によく似た「分子の楽園」に入った... 。

61　自然界の文句なしの歓喜にみちたそのような分子層で、あの人は自分自身に働きかけるワークを大成功のうちに続けた... 。

62　「デビ・クンダリニー」、「トナンツィン」、「イシス-マリア」、個人的な聖なる母は直接彼女を助けて、いまだに残っている非人間的なかすを心理から取りのぞいた...。

63　自分自身にますます死んでいくにつれて、死者は無邪気さを取りもどしていき、その上さまざまな変貌をとげていった。最初はうら若い少女の言語に絶する姿をしたが、最後には三歳児の姿をとり... それから善悪を超越した生命の普遍的魂の大洋のなかに一介(いっかい)の「エレメンタル・ブッダ」として沈んだ... 。

64　明らかにあの人は自分自身に対して正直であり、自分にはアデプトの位階は獲得できないと思い、世界の舞台から身を引いて、最初の出発点にもどり、単なるエレメンタルとして生きつづけるほうを選んだのである... 。

65　それらの霊は望むなら、きたるべき「大異変」の後、未来の「黄金時代」に化身して、密儀に参入できる。だが、それらの天真爛漫な幼児の大多数は永久にエレメンタルの状態

にとどまるほうを選ぶ... 。

66　古代エジプトのイニシエイトたちが国民にこれらの教えを伝えている際、四人ずつのグループに分かれて小さな四角いテーブルに着席していた。こうすることによって、「サンサーラ」の輪から離れたいと望むあらゆる霊が通過すべき、四つの基本的状態を寓話化していたのである。

67　心理から非人間的な残りかすを取り除き終えたら、死者は「啓発する空(くう)」を自分自身で体験せねばならないであろう。これが「法身(ほっしん)」（ダルマカーヤ）DHARMA-KAYA というものである。

68　この空は、無という空の本性ではなく知性的な空の本性をおびている。これが「報身」（サンボガカーヤ）SAMBOGHA-KAYA をまとった魂の状態である。

69　切り離せない空と透明さ（光）。本来透明な明るい空と本来からっぽの透明さ（光）は、啓発された知性、「本初身」（アーディカーヤ）ADI-KAYA である... 。

70　完全に自分自身に死ぬことができた死者に妨げなく光り輝く、啓発された知性は、あちこちに放たれるであろう。これが「応身」（ニルマナカーヤ）NIRMANA-KAYA である。

71　「四身」をまとった直接体験によって、はじめて完全な解放が得られる... 。

72　解放されないまま、いずれかの顕現期間を終了する場合、霊を待ち受ける運命は大変異なる... 。

73　太陽や「トラロック」に選ばれなかった霊は ── アステカ人は言う ── ただ「ミクトラン」に行くだけであり、そこで地獄を通りすぎる際に恐ろしい魔術的試練を受ける...。

74　まず第一に、「ミクトラン」にたどり着くには、ダンテが『神曲』で語るようにはじめに「カロンの舟」に乗って泥の川アケロン、「チグナワパン」を渡らなければならない。それが「地獄の神々」が課す最初の試練なのは疑いない。

> おまえたち、邪悪な霊に災いあれ。天を仰げるとはゆめゆめ思うな。永遠なる闇の支配する対岸の灼熱と冷気の地に、おまえたちを渡すため私はやって来た... 。
>
> 〔『神曲』地獄篇　第三歌〕

75　メキシコの賢人たちはこう語りつづける。それから霊はつながった二つの山の間を通らねばならない。第三の地では黒曜石の山を通り、第四の地では厳しい寒風がびゅーびゅーとうなる地域を通る。次は旗がひるがえる場所、第六の地では霊は弓で射られ、ダンテの第七圏には心臓を食らう猛獣がいる。第八の地には村と岩石地のあいだに細道がある

という。そして地球内部のダンテの最後の第九圏には「チグナウミクトラン」が存在し、『聖ヨハネの黙示録』できわめてたくみに描写された「第二の死」をそこで通過する。

76　後にそれらの霊は自然界のエレメンタルの楽園に入ってくつろぎ、それから新たな進化過程を始める。まず鉱物界からスタートし、植物界、動物界に進み、ついにかつて失ったヒューマノイドの状態にいたる... 。

トラロック

第１４章
蛇の二極

1　スペイン人渡航以前のメキシコにおける蛇の二極には、確かに何か考えさせられるものがある... 。

2　アステック・カレンダーの太陽を優美に包囲する二匹の火の蛇「シウコアトル」も、また偉大なるテノチティトランの大神殿を包囲し、有名な「蛇の壁コアテパントリ」を形成していた。

3　アステカの蛇は、有機的決定論を完全にくつがえす異例の状態でつねに登場する。珍しい姿勢の第二の頭として表現される尾から、単純な論理的推論によって蛇の二極が導き出せる。

4　二重の頭は、ノーシス的に自分自身の尾をむさぼり食おうとしている環状の蛇の姿をほうふつさせるが、それは「ケツァルコアトル」神殿の聖なる壁（「ソチカルコ」の遺跡）に見られる。

5　しかるべくエキゾチックに聖なる８の神秘的姿でとぐろを巻いて動き回るにしろ、マヤその他の様式で連珠形に円を描くにしろ、蛇の二極は何か驚嘆すべき神秘的、魔術的なものを意味している... 。

6　本書で蛇の二重の秘教的性質を声高に引きあいに出すまでもない... 。

7　エデンの園の誘惑する蛇と荒野でイスラエルの民をいやしていた青銅の蛇。大地の泥の中をはいずっているところを、怒ったアポロに矢で刺された恐ろしい大蛇ピュトンと医術の神アエスクレピウスの杖を上昇する蛇。両者を区別しよう... 。

8　魔力をもつ火の蛇が人体の脊髄管を上昇するときは、聖なる母「クンダリニー」である... 。

9　火の蛇が下降して、尾骨から人間の原子地獄に向けて噴出するときは「いまわしいクンダルティグアドール器官」である。

10　尊敬すべきマスターＧ〔グルジェフ〕は、下降する蛇（「いまわしいクンダルティグアドール器官」）の恐るべき催眠力の性質が、上昇する蛇（「クンダリニー」）にあるとするが、大変深刻な間違いを犯している。

11　「クンダリニー」KUNDALINI は合成語である。「クンダ」KUNDA から「いまわしいクンダルティグアドール器官」が思いだされ、「リニー」LINI は「終わり」を意味するア

Fig. 23

トランティス語である... 。

12 「クンダリニー」は高度な文法では「いまわしいクンダルティグアドール器官の終わり」と訳せるし、また訳すべきである。

13 「クンダリニー」が脊髄管を勝ち誇って上昇することは、「いまわしいクンダルティグアドール器官」の終わりを意味する。

14 モーリス・ニコル博士と偉大なイニシエイト、ウスペンスキーが、マスターGのこの誤りを受け入れたのは疑いない。

15 宇宙の母は「神聖なプラーナ」だとマスターGは考えていた。

16 もしマスターGがメキシコ、トルテカ、マヤなどの神殿の「神聖な壁」に描かれた蛇の二極を研究していたら、疑いもなく決してこのような混同をしなかったであろう... 。

17 インドのヨギは、行者の体内で発達して上昇するその環状の蛇火（「クンダリニー」）について徹底的に分析するが、苦悩する全人類を絶えまない催眠トランスに電気力によって引きこみ続ける、下降する蛇、「悪魔の尾」について語る者はごく少数である。

18 もし地表に生息するこの哀れな知的哺乳類が、自分の陥っている悲しむべき状態をはっきり明確に見ることができたら、そこから逃れるすべを必死に探すであろう... 。

19 たとえほんの束の間であっても哀れな知的動物が目覚めて、人生の厳しい現実に目を開いたとたん、ただちに恐ろしい奈落の蛇のすさまじい催眠力が倍増して攻撃を再開し、不運な犠牲者はもういちど眠りに陥り、自分は目覚めているとか今にも目覚めようとしていると夢想する... 。

20 意識覚醒の難しさを完全に理解するまじめなノスティックのみが、意識的ワークと自発的苦しみによってはじめてそれが可能になることを知っている... 。

21 地獄の大きな毒蛇は機械的想像力の「手口（モドゥス・オペランディ）」を知りつくしている（意識的、客観的想像力として知られる透視に決して異議を唱えるわけではない）。

22 奈落の蛇は、その不可欠な手先である機械的想像力を用いて、自然の利益にもとづいて働き、深い催眠トランス状態に我々を陥れたままにする... 。

23 空想のしくみによって自分の最悪の醜行をいつも弁護し、責任を回避し、逃げ口上をさがす。自分を思いやり〔別訳「自己配慮し」〕、最高のしかたで自己評価し、自分は正しく完全だと信じる。

24　「理性ある哺乳類」を催眠状態に保ち、真実を見て、人生における自分の状態や態度を理解できなくするのに都合のよい、役立つ力があると考えられる... 。

25　明らかに我々の大部分はそんな口実を見つけ、そのように「自我」の愚かで巧妙な正当化と一味の機械的想像力のもとにいるが、ごく自然発生的な〔別訳「当然の」〕心理的間違いが心の底にひそむとは本当に夢にも思わないであろう。

26　例：たとえ妻子や親戚などに対して残酷であっても、実際はそのことを知らないでいる... 。

27　もっとも深刻なのは、（とくに、気に入っていて、あまりに安楽すぎるからといって）この状態が続くのを許すことである。残酷だと人に非難されても、おそらくほほえんで、自分の正しさ、慈悲、かぎりない愛を理解していないと考えるであろう... 。

28　大蛇の恐ろしいとぐろに巻かれていても、自由だと我々は信じている。

29　大昔の伝説によればインドの大アバターラ「クリシュナ」が15歳を迎えたとき、族長ナンダを探しに行き、自分の母（上昇する蛇「クンダリニー」）がどこにいるのか聞いた。

「わが子よ、そのことなら尋ねるまでもない ― 族長は答えた ― 、おまえの母は私の来た国にもどったが、いつ帰って来るのかわからない... 」

クリシュナは深く悲しみ、友を捨て、数週間メルー山をさまよった... 。

そこで巨大な杉の木の下に立っている一人の老人と出くわした。どちらも長い時間見つめあった... 。

「だれをお捜しかな？」隠者は言った... 。

「母です。どこにいるのでしょう？」

「不変なるもの（秘密に存在する聖なる父）のそばに」

「でもどうやってそれを見つけるのです？」

「捜しなさい、いつも、どこまでも（おまえ自身の心の中を）捜しなさい。雄牛（動物的エゴ）を殺し、（奈落の）蛇を押しつぶすのだ」

そうして「クリシュナ」は老人の威容が透明になり、それからまたたき、ついに光り輝くバイブレーションのように枝の中に消滅するのに気づいた... 。

下山のとき「クリシュナ」は、光を放って変貌しているように見えた。魔法のエネルギーが内なる自己から噴出していたのである。

「雄牛や（奈落の）蛇と戦おう。善人を守り、悪人を征服しよう。」と友人たちに言った。

弓と剣をもち、「クリシュナ」とその兄弟、羊飼いの息子たちは森の中で猛獣を一匹残らず倒した。

「クリシュナ」はライオンを殺したり飼いならしたりして、よこしまな王たちと戦い、抑圧された諸部族を解放したが、心の底ではいちだんと悲しみに襲われてい

た... 。

彼の霊は、聖なる母「クンダリニー」を見つけ、気高い老人（自分のマスター）に再び出会いたいという心からの神秘めいた願いがあるばかりであった。しかしこの希望を抱いて、どんなに戦い征服しても、願いはかなえられないでいた。

ある日、欲望と死の不気味な女神「カーリー」（「コアトリクエ」、「プロセルピーナ」、「ヘカテ」）の神殿の番人、黒魔術師、蛇王「カラヨニ」のうわさを伝え聞き、もっとも恐ろしい蛇王、あの不滅の蛇（いまわしい「クンダルティグアドール」器官）と戦いたいと望んだ。蛇王はすでに何百人もの　　精兵をむさぼり食っていたが、その唾液は骨を腐食させ、視線は心に恐怖の種をまいていた... 。

「カーリー」 ── 地獄と死の女王 ── あらゆる罪の女王の神殿の奥から、「カラヨニ」の魔力で一匹の青緑色の長身の爬虫類が出てくるのを「クリシュナ」は目にした... 。

ゆっくりと蛇は太い胴体をまっすぐ伸ばし、ものすごい音を出して赤らんだ長髪を逆立て、その鋭い目は、きらめく殻に覆われた怪物の頭にゾッとするほどギラギラ輝いた。

「カーリーを礼拝するか、それとも死にたいか。」 ── 魔術師は「クリシュナ」に語る ── 。

蛇は、恐れを知らない聖なる英雄「クリシュナ」の手にかかって死んだ... 。

「クリシュナ」は、欲望と死の恐るべき女神カーリーの神殿の番人である大蛇を勇敢にも退治したとき、太陽の光のもとでマハーデバの崇高な観想で心を清めた後、ガンジス川のほとりで一ヵ月間、沐浴と祈りを行った。

30　身の毛のよだつような地獄の毒蛇は「サハジャ・マイトゥナ」、「科学的純潔」を決して受け入れないであろう。なぜならそれは自然の利益に反するからである... 。

31　聖蛇「クンダリニー」にうまくむさぼり食われない者は、ゾッとするような大蛇ピュトンに飲みこまれるであろう... 。

32　地獄の蛇をどうにか退治する者は、諸王の宮殿に入るであろう。「メルキゼデク」の位にしたがって、自然の王と祭司として塗油により聖別されるであろう... 。

33　しかし確かに遺伝の原子、祖先から受けついだ色欲、祖先と子孫をこの世にもたらす恐ろしい地獄の毒蛇に反抗するのは、決して容易な企てではない... 。

34　人の肉、血、骨に宿るものは決定的であり、それに反抗するのはものすごいことである... 。

35　「仏教的」寂滅という教義は基本である。一瞬一瞬死ぬ必要があり、死によってはじめて新しいものが出現する... 。

第１５章
エレメンタル

1　我々の聖なる母「トナンツィン」は、勝ち誇って人体の「脊髄管」を上昇する、魔力をもつ火の蛇である... 。

2　「コアトリクエ」は奈落の蛇、「カーリー」、「ヘカテ」、地獄のプロセルピーナ、大地の「女神」である。

3　チワコアトルは地母神の恐ろしい別名であり、夜空ですさまじい悲鳴をあげてほえる有名な「チワテテオ」の祝福された女主(おんなあるじ)である... 。

4　つい最近「チワコアトル」は民間伝承の「泣き女ジョローナ」に変わった。その女の幽霊は、あどけない赤子の死体や神秘的な揺りかごを持ち運んで、夜間、都会の旧通りで悲痛な叫びをあげる... 。

5　生贄用ナイフの置いてある揺りかごを公設市場に捨てておいた罪のために、ジョローナがやって来たと昔、言われていた... 。

6　疑いもなく、地中に住む「ノーム」や「ピグミー」は「コアトリクエ」の前でぶるぶる震える... 。

7　これらのノームに固有な守護神は、高等魔術でよく知られた大変特別な神「ゴッブ」である... 。

8　ノームに特有の王国は地球の北方にあると言われてきた。ノームに対しては剣で命令する... 。

9　さて水の神「トラロック」に関する、すばらしい「ナワトル」叙事詩を見てみよう。

「トラロック」神は、四つの部屋のある大宮殿に住んでいて、
御殿のまんなかに中庭があり、水をたたえた巨大な洗い鉢が四つ置いてあった。
一つめの鉢、豊かな実を結ぶよう、折よく降って土地を肥やす水がはってある。
二つめの鉢、熟した穀物を枯らして、収穫をだいなしにする水がはってある。
三つめの鉢、草木や作物を霜枯れさせて、しおれさす水がはってある... 。
四つめの鉢、日照りと不作をもたらす水がはってある... 。
「トラロック」神にはしもべ ― 水のエレメンタル ― が大勢つかえる。
からだの小さなしもべは、その色に応じて各部屋に暮らす。
スカイブルー、白、黄、赤をしているから... 。
雨の至高神が命じるとき、

大きなジョウロと棒を手にしたしもべは、大地に水をやるだろう... 。
そして雷鳴がとどろくとき、実はしもべが壺にひびを入れていたのであり、
もしある雷が落ちるなら、実は割れた鉢のひとかけらが地上に降るのである...。

10　ある日、深い瞑想の境地にあった私は、祝福された主「トラロック」と直に接触せねばならなかった... 。

11　この偉大なる存在は、からだと愛情とマインドのかなたにあるコーザル界に住む...。

12　私の本質的存在のすべての部分で、そのとてつもない現実の容姿を体験したのは確かである... 。

13　エキゾチックな着こなしは、いにしえのアラビア人のようであった。言葉では言い表せないその顔は、稲妻に似ていた... 。

14　幼児、男女、老人などの生贄をそんなに大勢認めた罪をとがめたとき、返事はこうであった。「私のせいではない。それほど多くの生贄は決して要求しなかった。それはあちら物質界での人々の問題であった」。それから次の言葉でしめくくった。「水瓶座の新時代にもどる」。

15　「トラロック」神は近々、化身しないといけないのは疑いない... 。

16　水の精オンディーヌの王国は西方にあり、散酒式の杯で呼び出すと、カバリストはおごそかに断言する... 。

17　昔の魔術師が川や湖のオンディーヌ、雲の守護神、荒海のネレイダを呼んでいるときは、次のマントラを発音し、大声で叫んでいた。「ベヤ、バジャラ〔あるいはバヤラかバリャラ〕、ベヤラ、エヤラ、ベヤ... 」（VEYA, VALLALA, VEYALA, HEYALA, VEYA...）。

18　ラテンアメリカのあるいくつかの部族が農耕のため降雨を望むとき、メンバーが集まり、ヒキガエルの姿をして、それを模倣し、それから声をそろえて「カエルの鳴き声」をまねると、結果がほどなく出る... 。

19　古代メキシコ人が雨の主「トラロック」に祈っていると、そのとき大地は命の水でうるおった... 。

20　「トラロック」は自然の王、善悪を越えた完全なる創造物とはいえ、洪水、干ばつ、ひょう、あられ、氷、稲妻を手中におさめ、そのため古代の魔術師はその怒りを恐れていた。言うまでもなく、その怒りをしずめるため、ナワトル文明の末期に霊感のある囚人の生贄、とりわけ少女や幼児が捧げられた... 。

Fig. 24

21　次のことをはっきり言っておく必要がある。パワフルな「アナワク」文明の全盛期には、観光客を震えあがらせる人身御供というものは存在せず、そのためにかえって目立っていた... 。

22　滅亡にひんしているどの文明も、血の洗礼〔別訳「大虐殺」〕でいつも終わるのは疑いなく、メキシコも決して例外ではありえなかった... 。

23　世界史を学んできた者はローマ、トロイ、カルタゴ、エジプト、ペルシャ等を思いだす際にこのことを知る... 。

24　「世俗の人類学」の百パーセント空想的な信奉者は、単なる主観的理性主義にもとづいて愚説を打ち出した。古代メキシコの偉大なアバターラ、至聖なる主「ケツァルコアトル」は、エヘカトル（賢明に訳すと「風の神」という意味になる）という名でも崇拝されたというのである。

25　その風の神は自然界のデバ、コーザル界のメラキム（王）、宇宙運動の守護神であり、「ケツァルコアトル」とはまったく異なることを、「神秘友愛結社のアデプト」、客観的理性を備えたあの聖者、「ノーシス人類学」の本物のマスターたちは直接の神秘体験と深い分析によって熟知している。

26　外界からの感覚的知覚にもとづくデータだけで、主観的理性がその概念内容を作りあげることは説明するまでもない。そのためエマヌエル「カント」氏が『純粋理性批判』という書物ですでに決定的に証明したように、主観的理性は現実、真理、神について何も知ることはできない。

27　客観的理性は異なり、意識の基本的データでその概念内容を作りあげる。

28　それで、アステカの万神殿の神々について話す際、「ノーシス人類学」の生徒は我々の言っていることが大変よくわかる。主観的意見を打ち出すのはよそう... 我々の調査研究は数学のように正確であり、表現についてはうるさい。

29　エヘカトル、「サブタビエル」、「ミカエル」等は、きら星のごとき「オルス」太陽系の真の聖者であり、宇宙運動の難解な科学を専門とする... 。

30　偉大なる「グルジ」、エヘカトルは、偉大なる「カビール」、ナザレのイエスのやっかいな復活過程をきわめて効果的に援助した... 。

31　疑問の余地なく、エヘカトルの指揮のもとに、数えきれないほどの空気の精シルフが我々の惑星地球で働く... 。

32　シルフの王国は東方に位置すると力説されてきた... 。

33　ワシの羽や聖なるパンタクル（万能章）でシルフに命令するのは確かである。このことを魔術師は知っている... 。

34　万物の調和のビジョンのうちに自然の霊的部分を発見して、我々は神秘的に驚く。言い換えると、有名な「メラキム」つまり「天使王」を見つけるのである... 。

35　エレメンタルとの直接の交信は、驚くべきコーザル界層で、つねに諸要素の天使王を介して行うべきである... 。

36　地、水、風のように、「アナワク」の秘密教義では自然の火の要素にも特別の神がいる... 。

37　アステカ人は「ウエウエテオトル」という聖なる名でいつも火の神を崇拝したが、それを正しく訳すと「年をとった神」という意味になる。

38　「ウエウエテオトル」は、巨大な火鉢を頭にのせた、年を経た一人の老人として表現される... 。

39　すでに述べたように、「テスカトリポカ」が「テオトレコ」月の祭りに最初にやって来るのとは対照的に、祝福された聖主ウエウエテオトルは神々の集いに最後にやって来ると言われてきた... 。

40　自然界の要素としての「ウエウエテオトル」はキリスト教徒の「インリ」、ノスティックの「アブラクサス」、中国人の「タオ」、仏教徒の「禅」、アグヌス・デイ（神の小羊）である... 。

41　聖者としてのウエウエテオトルは天使王、心の奥底で自己実現した存在、メラキムであり、その統率のもとに数えきれないほどのサラマンダー（火の生き物）が働いていた。

42　普遍的な火には「炎の子」、火の要素の神々、古代の守護神、アポロ、ミネルバ、ホルス等が幸せに住んでいる... 。

43　言語に絶する、おそろしく神聖なそれらの炎が、善悪をはるかに超越しているのは確かである... 。

44　明らかにサラマンダーの王国は南にある。ぎざぎざの杖や魔術の三叉矛（みつまたほこ）でサラマンダーに命令する... 。

45　自然界のエレメンタルを完全に決定的に支配し、利用するには、あらかじめ「動物的エゴ」を取り除く必要がある。

46　軽率で気まぐれな人は、決して自然界のシルフを支配できないであろう。情にもろく冷淡で気まぐれな人は、水の精オンディーヌや海の精ネレイダの絶対的主人には決してなれないだろう。怒りは火のサラマンダーをいらだたせ、下品な淫欲や貪欲は、鉱物界のノームやピグミーを利用しようとする者を、実際に彼らの慰みものにする... 。

47　シルフのように俊敏で活動的になる必要がある。オンディーヌやネレイダのようにイメージに気を配って柔軟で素直に。サラマンダーのように精力的で力強く。ノームのように勤勉で忍耐強く。要するに、自分の弱さのために言いなりになるのではなく、力においてエレメンタルをしのぐのは緊急に必要で、後回しにできない。我々の標語、銘が「テレマ」（意志）であることを忘れてはならない... 。

48　魔術師が自分自身に完全に死んだとき、自然全体が従うであろう... 。

49　頭を濡らさずに嵐の中を進み、風は服のひだをひとつも乱さない... 。

50　やけどせずに火を渡り、沈まずに荒海の上を歩く... 。

51　地底に隠された財宝をひとつ残らず、きわめてはっきりと見ることができる... 。

52　思いだそう、偉大なる「カビール」、イエスの言葉を。「あなたがたは、わたしの行なうわざを行ない、またそれよりもさらに大きなわざを行ないます... 」〔『ヨハネ』14：12〕。

53　自然の原因の世界、意識的意志の世界の天使階級、それは自然の王「メラキム」の階級であり、確かに諸要素の正真正銘の霊的原理を独自に構成する... 。

54　言語に絶する、おそろしく神聖なそれらの神々は、言葉のもっとも完全な意味で完璧な人間である。そのような存在は善悪をはるかに超越している... 。

55　生と死の神秘の力強い主、コウモリ神の臨在を本質的存在のすべての部分で体験する際、悟りを開いた行者は驚きと神秘的畏怖の念にみたされる... 。

56　「ウィチロポチトリ」や神々の母や火の神の歌、音楽・踊り・歌の神「ソチピリ」の歌、春の祝福された主「シペトテック」や「ソチケツァル」の歌などがまだ残っていることを思いだすまでもない... 。

57　この文章を書いているたった今、ある突飛な、おぼろげな記憶が脳裏に浮かぶ。

58　何年も前のこと、ある好ましからざる泊まり客が我が家に住んでいて、出ていきたくないようであった... 。

59　風の神エヘカトルに相談したところ、慌てて出ていったのは言うまでもない... 。

60　幸いにも私には、エヘカトルが奉仕料として請求した所持金があった。何も贈り物として与えられず、何事にもお金がいる... 。

61　これらのエレメンタルの神々には宇宙資産で支払う。払うものがある者は交渉がうまくいく... 。

62　善行は宇宙コインで表される。つねに善を行うのは上手な交渉である。この種の交渉を可能とする「宇宙」資本をそのようにして蓄えるであろう... 。

63　エレメンタルの生き物を支配する王が誰であれ、その王の名前においてイニシエイトは彼らに近づく... 。

64　イニシエイトは何らかの方法でエレメンタルの王国に降りて、その力をもたらし、それから諸要素に働きかける... 。

65　エレメンタルの操作は自然の原因の世界で始めねばならない。その界層からエレメンタルを支配すべきである... 抑えきれない場合は、ただちに黒魔術になる... 。

66　エレメンタルの力がその霊的原理から離れて、何か異なったものに変わるとき、たとえ悪事を働こうとしなくても、退化変質をともなう堕落が必然的に引き起こされる... 。

67　我々がマインドとハートの無邪気さを取りもどす際、火、風、水、地の王子は我々の前にエレメンタルの楽園の扉を開けてくれる... 。

68　したがって、エレメンタルの力を利用しようとする場合、対応する王たちの援助を求める必要がある... 。

69　意識ある意志の世界、コーザル界はもともと、宗教的な神秘主義の領域である... 。

70　瞑想と祈りを結びつけられるようになるノスティックは、疑いもなく、自然界の神々との意識的、客観的交信を確立できる... 。

71　コーザル界はマスターたちの領域である。天国にある永遠の神殿であり、誰かの手によって築かれた　　。そこは神秘友愛結社の偉大な住まいである... 。

72　ぜひとも雨が欲しい？　雨を止めたい？　それでは瞑想と祈りに際して、至福を得た「トラロック」を選びなさい。「求めなさい。そうすれば与えられます。たたきなさい。そうすれば開かれます」。〔『マタイ』７：７、『ルカ』11：９〕

73　病気なのか。誰かの病気を治療したいのか。それでは集中、瞑想、祈り、嘆願等に際して、マヤ・アステカ人の有名なコウモリ神を選択しなさい。この大神が生と死の神秘のマスターであるのは疑いない... 。

74　火がパチパチと音をたてて燃え、生命、家屋、大農園（アシエンダ）等をおびやかすとき、翁（おきな）の火の神「ウエウエテオトル」が集中、瞑想、嘆願の基本的対象となる... 。

75　コーザル界のマントラが「アロアー・ヴァ・ダート」ALOAH VA DAATH であったし、今もいつまでもそうであることを、ヘブライの律法博士（ラビ）のカバリストはよく知っている。

76　言葉について瞑想することは、大神殿の不思議な扉をたたくことに等しい... 。

77　さて春のエレメンタルの神であり商人の神でもある「シペ・トテック」XIPE TOTEC への神秘的な祈りの言葉を転載しよう... 。

祈り

夜の飲酒家であるあなた
なにゆえすぐに首を縦にふらないのです？
仮面をつけたまえ
金の衣装を着たまえ。

おー、わが神よ、あなたの水は宝石から
したたった。
聖鳥「ケツァール」に変わってしまった
高い糸杉は。
火の蛇は
「ケツァール」の蛇に変わってしまった。

火の蛇はわたしを自由にしておいた。
たぶんわたしは消える
たぶん消えて、滅ぼされる。
実の熟していないとうもろこしの植物
宝石に似て
わたしの心臓に熟していない。
でもわたしはまだ金を目にするであろう
そしてもしとうもろこしが熟したら、わたしは喜ぶであろう

もし戦争の指導者が生まれたら... 。

おー、わが神よ、せめて
豊かに実らせたまえ
とうもろこしの植物をいくらか。
あなたの帰依者は目を向ける、あなたの山に
あなたに。
もし何かが最初に熟すなら、わたしは喜ぶであろう
もし戦争の指導者が生まれたと言えるなら... 。

78　そして実りの奇跡がようやく起こったとき、帰依者は感謝して、祝福された主「シペ・トテック」にこう叫ぶ。

とうもろこしの神は生まれた
「タモアンチャン」に。
花のある地に
「I.フロル」神
とうもろこしの神は生まれた。
水と湿気のある地に
人間の子らがつくられた地
美しきミチョアカンに。

79　言語に絶するこれらの祈りは、どちらかと言うとトルテカに起源があり、秘教的な「ナワトラトリ」語〔ナワトル語〕でとてもうまく書かれている。

80　大昔の伝説によれば、1483年に有名なスポンハイム修道院を管理していたあの賢人、魔術師アバド・トリテモ（トリテミウス修道院長）は、諸要素の秘教科学を知りつくしていたという... 。

81　アバド・トリテモは、嘆願したマクシミリアン皇帝の前でブルゴーニュのマリアの幽霊を呼び出したと言われる。もちろん、威厳のある亡霊は皇帝に新しい行動のしかたを助言し、ある出来事をいくつか明らかにし、白人のスフォラと結婚するよう命じた... 。

82　中世の学識者はみな魔術にたえず熱中していて、自然界のエレメンタルと作業する者が多くいた... 。

83　魔術師の中には、宗教的な情熱をおおいに抱いて、驚く帰依者の前で恋人の姿を磁化した鏡に映しだしてもらえるよう、キューピッドを大声で呼んでいる者もいた... 。

84　ああ、なんということか。キューピッドがエレメンタルによって不可思議なわざをど

れほどたくさんやってのけたのか... 。

85　アバド・トリテモはアルベルトゥス・マグヌスの弟子だと見なされていた。聖人の中の最高の聖人が魔術を実践することを、アバド・トリテモは決して否定しなかった... 。

86　聖トマスと同じくアルベルトゥス・マグヌスは錬金術の実在を述べた。アルベルトゥスの錬金術書は、アバドの机の上にいつも置いてあった... 。

87　トリテモによれば、オランダの伯爵ウィリアム2世が、高名で傑出した賢人アルベルトゥス・マグヌスとケルンで夕食をとったとき、真冬で雪が降っているというのに、修道院の庭にテーブルを一台置かせた... 。

88　招待客たちが席に着いたとたん、魔法のように雪は消え、庭はいろいろな花でおおわれた。色とりどりの鳥は、最高の夏日のように楽しげに木々のあいだを舞っていた... 。

89　神秘的なアバドの弟子である修道士たちは、そのような奇跡を起こせたらと熱望していたが、マスターはこれらの不思議なわざをエレメンタル魔術によって行い、そこには悪魔的なものは何もなく、それゆえに邪悪なもの、非難されるべきもの、あるいは呪うべきものもないとトリテモはただちに言った... 。

90　中世のもっとも著名で卓越した三人の魔術師ファウスト、パラケルスス、アグリッパが、アバド・トリテモの弟子であったのは明白である... 。

「自然界の四大要素を言ってみなさい」。アバドは修道士たちに講義のまっさいちゅうに命じた。

「地、水、風、火」。

「そう ― マスターは続けた ― いちばん重い地と水は下方に引きつけられ、より軽い風と火は上方に向かう。火を風に融合させると雨になり、露になり、水になり、凝固させると地になる ― プラトンがこう説いたのは正しい... 」。

91　自然界の天使王メラキムになりたいと本当に熱望する神秘家は、自分自身の王にならねばならない... 。

92　自分自身の体内にいる原子エレメンタルを支配できるようになっていないなら、どうして自然界のエレメンタルに命令できよう？

93　血と性の原子のサラマンダーは、我々の動物的な情欲や激情で燃えたつ... 。

94　我々自身の生命の風に宿る原子のシルフは、機械的、主観的想像力（意識的、客観的想像力と混同してはならない）に仕え、みだらな邪念とたわむれる... 。

95　神聖な精液の原子のオンディーヌは、すさまじい性的興奮を常にもたらす... 。

96　肉と骨の原子のノームは、怠惰、大食、色欲〔強欲〕を不精にも楽しむ... 。

97　我々自身の体内の原子エレメンタルの魔を払い、彼らに命じ、従わせるすべを知るのは緊急に必要である... 。

98　火、風、水、地のエクソシズム（悪魔払い）によって我々自身の体内の原子エレメンタルをも従わせることができる... 。

99　疑いもなく、そんな祈りとエクソシズムをきちんと正確に暗記すべきである... 。

火のエクソシズム

100 火に塩、乳香（インセンス）、白い松やに、樟脳、硫黄を投じ、火の守護神の三つの名前を三回発音して魔を払う。「ミカエル、太陽と光線の王、サマエル、火山の王、アナエル、アストラルの光の王子、わが願いを聞きたまえ。アーメン... 」。

（次に帰依者は心の中で請願する）。

風のエクソシズム

101 四方に息を吹きかけ、深い信仰心をこめて以下のラテン語を言い、風の魔を払う。

スピリトゥス　デイ　フェレバトゥル　スペル　アクァス、エト　インスピラウィット
Spiritus　Dei　ferebatur　super　aquas，et　inspiravit
イン　ファキエム　ホミニス　スピラクルム　ウィタエ、シット　ミカエル　ドゥクス
in　faciem　hominis　spiraculum　vitae，Sit　Michael　dux
メウス　エト　サブタビエル　セルウス　メウス、イン　ルケ　エト　ペル　ルケム。
meus，et　Sabtabiel　servus　meus，in　luce　et　per　lucem.
フィアト　ウェルブム　ハリトゥス　メウス、エト　インペラボ　スピリティブス
Fiat　verbum　halitus　meus；et　imperabo　Spiritibus
アエリス　フイユス、エト　レフレナボ　エクォス　ソリス　ウォルンタテ
aeris　hujus，et　refrenabo　equos　solis　voluntate
コルディス　メイ、エト　コギタティオネ　メンティス　メアエ　エト　ヌトゥ
cordis　mei，et　cogitatione　mentis　meae　et　nutu
オクルティ　デクストリ。
oculti　dextri.
エクソルキソ　イギトゥル　テ、クレアトゥラ　アエリス、ペル　ペンタグラマトン、
Exorciso　igitur　te，creatura　aeris，per　Pentagrammaton，

エト　イン　ノミネ　「テトラグラマトン」、イン　クィブス　スント　ウォルンタス
et　in　nomine　TETRAGRAMMATON，　in　quibus　sunt　voluntas
フィルマ　エト　フィデス　レクタ。アーメン。セラ、フィアト。そうありますように。
firma　et　fides　recta.　Amén.　Sela，fiat.

（つづいて帰依者はミカエルとサブタビエルに集中して、請願する）。

水のエクソシズム

102 フィアット　フィルマメントゥム　イン　メディオ　アクァルム　エト　セパレット
Fiat　firmamentum　in　medio　aquarum　et　separet
アクァス　アブ　アクィス、クァエ　スーペリウス　シクーット　クァエ
aquas　ab　aquis，quae　superius　sicut　quae
インフェリウス、エト　クァエ　インフェリウス　シクーット　クァエ　スーペリウス、
inferius，et　quae　inferius　sicut　quae　superius,
アド　ペルペトランダ　ミラクラ　レイ　ウニウス。
ad　perpetranda　miracula　rei　unius.
ソル　エイユス　パーテル　エスト、ルナ　マーテル　エト　ウェントゥス　ハンク
Sol　ejus　pater　est，luna　mater　et　ventus　hanc
ゲスタウィット　イン　ウーテロ　スオ、アスケンディット　ア　テラ　アド
gestavit　in　utero　suo，ascendit　a　terra　ad
コエルム　エト　ルルスス　ア　コエルオ　イン　テラム　デスケンディット。
coelum　et　rursus　a　coeluo　in　terram　descendit.
エクソルキソ　テ、クレアトゥラ　アクァエ、ウト　シス　ミヒ　スペクルム　デイ
Exorciso　te，creatura　aquae，ut　sis　mihi　speculum　Dei
ウィウィ　イン　オペリブス　エイユス、エト　フォンス　ウィタエ、エト
vivi　in　operibus　ejus，et　fons　vitae，et
アブルーティオ　ペカトルム。アーメン。
abllutio　peccatorum.　Amén.

（つづいて帰依者は「トラロック」や「ニクサ」に十分集中して、心の中で請願する）。

地のエクソシズム

103　世界の中心をつらぬく磁石の釘にかけて
聖なる都の十二の石にかけて
大地の鉱脈を走る七つのメタルにかけて
「ゴッブ」の名において
地下労働者たち、われに従いたまえ... 。
（それから帰依者はゴッブに集中して、請願する）。

104 古代の魔術師たちは、エレメンタル魔術の操作で月桂樹の枝を備えた香木、ヨモギ、ヘンルーダ、サルビア、松、ローズマリー等を用いていた... 。そんな植物は炭火の中で燃えていた... 。

105 これを遵守するのはすばらしい。空気は植物の煙で充満する。魔を払った火は、施術者の意志を反映するであろう。自然界の繊細な力は施術者の言うことを聞き、答えてくれるであろう... 。

106 その瞬間、水は揺れて沸騰しているように見える。火は不思議な輝きを放ち、風には未知の声が感じられる。地そのものが震動するように思える... 。

107 まさにそのとき中世の魔術師は、磁化した鏡でエレメンタルの守護神「キューピッド」を目に見えるようにしたうえ、愛する人の姿ばかりか、さらに興味深いことに、深く愛する者たちにきっと待ち受ける運命をも「キューピッド」にそこに映させていた... 。

108 アグニ、ウエウエテオトル等の火の神々、パラルダ、エヘカトル等の風のエロヒムたち、ニクサ、トラロック等の水の神々、ゴップその他の地中の神々は、智恵、愛、パワーで自分たちを召喚する神秘家をつねに援助する... 。

109 自然界のエレメンタルと作業する魔術師は、みな意のままに不可視になれると言われてきた... 。

110 疑問の余地なく、他のいずれかの能力のように至高なる犠牲によってはじめて、そんなパワーは獲得できる... 。

111 明らかなことだが、犠牲は、下等な善よりむしろ高等な善を洞察力で意図的に選択することをはっきりと意味する... 。

112 機関車の消費する石炭は、旅客輸送にまったく不可欠な運動エネルギーのために残酷にも犠牲になる... 。

113 実のところ、犠牲とは力の変換である。機関車という祭壇に捧げられた石炭の潜在エネルギーは、装置の利用により蒸気の力学的エネルギーに変換する... 。

114 心理的であると同時に宇宙的な仕組みが存在し、各犠牲行為はそれを始動させ、そのため霊的エネルギーに変わる。同時にその霊的エネルギーはその他いろいろな仕組みに適用でき、実際の起源とはまったく異なる、全体の一部をなす一種の力に形態面で再び現れることができる... 。

115 たとえば男性は経歴のために感情を犠牲にでき、あるいはまた女性は感情のために経

歴を犠牲にできる... 。

116 魂の幸福のために現世の快楽を犠牲にする用意のできている者もいる... 。

117 それでも自分自身の苦しみを放棄し、何か高等なもののためにその苦しみを犠牲にする用意をするのは大変困難である... 。

118 愛する者の死のために味わう、すごく当然な至高の苦悩を犠牲にしなさい。そうすれば力のすさまじい変換が起こり、その結果、自分の思いのまま不可視になるパワーを獲得するであろう... 。

119 ファウスト博士は好きなように不可視になる術を知っていた。その魔術師が犠牲によってそのパワーを獲得したのはもちろんである... 。

120 中世の賢人たちは、驚嘆すべき魔法の決まり文句(フォーミュラ)をひとつ知っていて、それにより不可視になっていた... 。

121 通常の儀式と召喚に応じて、以下の典礼の決まり文句の魔術的な使い方を知るだけでいい。

アタル、バテル、ノーテ、ヨーラム、アセイ、クレユーブギット、ガベリィン、
ATHAL, BATHEL, NOTHE, JHORAM, ASBY, CLEYUBGIT, GABELLIN,
セメネイ、メンケノ、バル、ラベネンテム、ネロ、メクラップ、ハラテロイ、
SEMENEY, MENCHENO, BAL, LABENENTEM, NERO, MECLAP, HALATEROY,
パルキム、ティンギミエル、プレガス、ペネメ、フルオラ、ヘアム、アラールナ
PALCIM, TINGIMIEL, PLEGAS, PENEME, FRUORA, HEAM, ARARNA,
アウォラ、アイラ、セイエ ペレミエス、セネイ、レウェッソ、ハイ、バルカル、
AVORA, AYLA, SEYE PEREMIES, SENEY, LEVESSO, HAY, BARUCHALU,
アクット、トゥラル、ブカルド、カラティム、ペル ミセリコルディアム、
ACUTH, TURAL, BUCHARD, CARATIM, PER MISERICORDIAM,
アビビット エルゴ モルタレ、ペルフィキアト クア ホス オプス、ウト
ABIBIT ERGO MORTALE, PERFICIAT QUA HOS OPUS, UT
インウィシビリテール、イレ ポッシム...
INVISIBILITER, IRE POSSIM...

122 この種の魔術的決まり文句のしっかりした基盤は、本当の信念つまり揺るぎない信念である... 。

123 言うまでもなく、そんな信念は、深い分析的研究と直接の神秘体験によって培わねばならない... 。

第１６章
夢について

1　ノーシスの教えによれば、西半球の退廃した現代心理学のまったく無視する多種多様な夢が存在する... 。

2　夢は人体のサイキックセンターひとつひとつと密接に関係するという具体的事実ゆえに、さまざまな特質をおびているのは疑いない。

3　実際に、誇張なしに断言できるが、夢のほとんどは本能・運動センターと結びついている。つまり夢は昼間見た物の残影、ただの感覚と運動の投影、日常生活の単なるアストラル界での繰り返しなのである... 。

4　同様に、たとえば恐怖 ── それは人類に大きな被害を与える ── のような感情体験は、本能・運動センターの混沌とした夢にたいてい場をしめる。

5　それゆえ感情、性、インテレクト、運動、本能等の夢が存在する... 。

6　もっとも重要な夢、つまり本質的存在の内心の生活体験は、高等感情センターおよび高等メンタルセンターという二つのセンターと関連している... 。

7　二つの高等センターに関係する夢は確かに興味深く、ドラマチックな公式化とでも呼びうるものが、いつも際立っている... 。

8　ところで創造の光線、高等センター、下等センターおよびその宇宙的光線を通って降りてくる影響について考えるなら、我々をいやそうとし、我々の現状等について知らせようとする光り輝くバイブレーションが、我々に生じることを認めるべきである。

9　メッセージを受け取り、アステカ、マヤ、トルテカ、エジプト、ギリシア等のアデプトと接触しているのは役に立つ... 。

10　本質的存在のいろいろな最高の部分と語らうのも驚くべきことである... 。

11　高等センターは我々の中でじゅうぶんに発達していて、メッセージを我々に伝えるが、それを意識的に理解できるようにならねばならない... 。

12　なんの変哲もないありふれた物や人をまったく新しい仕方で見る自己想起の瞬間。そんな瞬間は、二つの高等感情センターおよび高等メンタルセンターと関係する奇妙で不思議な夢と同じ性質や内的な味わいを持っていると私が本章で言っても、その瞬間を人生で体験したことのあるごく選ばれた人達は驚かないであろう... 。

13　疑いもなく、そんな超自然的な夢の意味は、創造の光線の実現そのもの、特に太陽の側音オクターブと同じ範疇(はんちゅう)に属する... 。

14　その特種な夢の深い意味に気づきだすとき、それはある諸力が我々を目覚めさせ、いやし、改善しようともがくしるしである... 。

15　我々ひとりひとりは空間の数学的点であり、一定の（善悪の）「価値」の総和にとって乗り物として役立つ... 。

16　死は分数の引き算である。演算が終わると（白または黒の）「価値」だけが残る。

17　永遠なる反復(リターン)の法則にしたがって「価値」が戻(リターン)ってきて、肉体と再合体するのは明らかである... 。

18　私生活に繰り返し起こる出来事の小さなサイクルをもっと意識的に気に留めはじめるなら、日々の眠りの中で死の演算そのものがつねに繰り返されることを、そのとき独力で直接の神秘体験によって証明できるであろう... 。

19　肉体のない状態で、通常の睡眠中、「アストラルライト」に沈んだ「価値」は、普遍的磁化の法則にしたがって相互に引きつけあい、はねつけあう... 。

20　不寝番状態に戻ることは、肉体内に「価値」が戻(リターン)ることを実際、当然意味する。

21　最も驚くべきことのひとつは、人々は外界とのみ関係していると考えることである。

22　ノーシスの教えによれば、通常の肉体感覚で見えないが透視力では見える内界と我々は関係している... 。

23　外界には五感の窓ごしにいつも目をやっているのに対し、不可視の内界はそれよりもはるかに広大で、もっと興味深い物事がたくさんある... 。

24　人生のさまざまな環境は不可視の内界での我々の居場所から生じるが、多くの夢はその場所に関係する... 。

25　夢の言語はたとえ話の言語とまったく比較できる... 。

26　クリスティックな福音書〔『マタイ』13：3－23、『マルコ』4：2－20〕では種をまく人が種まきに出かけたが、その種は岩地等に落ちた。何でも文字通りに解釈する者はそんなたとえ話を考えても、その意味がわからない。このたとえ話自体が高等感情センターの象徴言語に属するからである... 。

27　思い出すまでもないが、どれだけ馬鹿げていたり支離滅裂であっても、夢にはみな何らかの意味がある。なぜなら夢はそれが関係するサイキックセンターだけでなく、そんなセンターの心理的状態も教えてくれるからである... 。

28　純潔だと思いこんでいた多くの悔悟者は内界で試練にあって、性センターで失敗し、夢精を犯した... 。

29　完全なアデプトではインテレクチュアル、感情、運動、本能、性の五つのサイキックセンターは、まったく無限と調和して機能する... 。

30　夢を見ている間のマインド機能はどうなのか。どんな感情が我々を揺さぶり動揺させるのか。肉体の外での我々の活動はどうなのか。どんな本能感覚が優勢なのか。夢を見ている間の性的状態を気にかけたことがあるのか。

31　自分自身に正直になるべきである。「人間は見る夢でわかる。」とプラトンが言ったのももっともである。

32　センターの間違った機能という問題は、行動の自己観察と夢の精密検査とによる生涯研究を必要とする課題である... 。

33　センターとその正しい働き、間違った働きをまたたく間に理解することはできない。かぎりない忍耐がいる... 。

34　一生はセンターの機能で展開し、それらに支配される... 。

35　我々の思考、感情、アイデア、希望、恐怖、愛憎、行動、感覚、喜び、満足、欲求不満等はセンターにある... 。

36　どこのセンターにおいてであれ、ある非人間的要素の発見が、秘教的ワークのじゅうにぶんの動機であるべきである... 。

37　あらゆる心理的欠点はその除去に移る前、瞑想のテクニックによってあらかじめ理解せねばならない... 。

38　「トナンツィン」（聖なる母「クンダリニー」）に援助を求めて初めて、どんな好ましくない要素であれ、それを一掃し、根絶し、取り除くことが可能となる。彼女は我々自身の本質的存在が形を変えたもの、我々ひとりひとりの個人的「フォーハット」である。

39　そのようにして一瞬一瞬死んでいく。死によってのみ新しいものが到来する... 。

40　本質的存在と事物のレベルで、疑いもなくありとあらゆる影響が我々に到達する...。

41　創造の光線を理解したなら、人生の一瞬一瞬もろもろの影響が我々に到達し、これらがいろいろな性質を持っていることも知るであろう... 。

42　我々に作用して、我々の心理器官に記録される高等な影響があることをいつも思い出すのは不可欠である。しかし感覚に執着して、精神生活にじゅうぶん注意しないなら、これらの影響もうまく知覚しないであろう... 。

TONANTZIN...

COATICLUE...

第１７章
夢見ヨガの行法

1　直接の神秘体験を心から熱望する志願者(アスピラント)は、疑いもなく「夢見ヨガ」の行法から始めるべきである。

2　明らかなことであるが、ノスティックは自分に厳しい要求をし、日常生活の記憶と疲れにとって好ましい状況をつくれるようになるべきであり、自分の現状にしかるべく注意を払うのがいい。

＊英訳者は以下のように補って訳しています。「明らかなことであるが、ノスティックは自分に厳しい要求をし、いつも睡眠中に起こる内心の全体験の記憶・理解にとって好ましい状況をつくれるようになるべきである。横になって、日常生活の疲れと俗事から解放されて休養する前に、自分の現状にしかるべく注意を払うのがいい」。

4　横になる前、新鮮な空気にふれて速いペースで短い散歩をしても、環境のため閉じこもった生活を送る帰依者は実際、失うものは何もなく、得るところが大いにある。そのような散歩で筋肉がほぐれるであろう... 。

5　けれども、はっきり言っておくほうがよいが、体操は決して乱用すべきではなく、調和的に生きる必要がある... 。

6　夕食、おやつ、夜食は軽くとり、胃にもたれる御馳走とか刺激性のはやめ、目がさえて眠りを妨げるおそれのある成分の摂取は注意深く避けるべきである。

7　最高の思考形態は無思考である。マインドがその日の労苦と世俗的な心配事から解放されて静かに沈黙しているとき、夢見ヨガのプラクティスに百パーセントふさわしい状態にある。

8　実際に高等感情センターが作動するとき、たとえ短時間であれ思考過程がやむ... 。

9　そのセンターがディオニソスの陶酔と共に活動に入るのは、はっきりしている... 。

10　そんな恍惚は「ワーグナー」「モーツァルト」「ショパン」等の心地よい交響曲にうっとりと聞きほれる際、可能となる... 。

11　高等感情センターを激しく振動させるのに、ベートーベンの音楽は中でも特に驚くべき効果がある... 。

12　そこに、まじめなノスティックは巨大な神秘的調査分野を見いだす。なぜならそれは

形態の音楽ではなく、言語に絶する原型観念の音楽だからである。各音にはその意味がある。ひとつひとつの沈黙、ひとつの高等感情。

13　ベートーベンは「魂の暗夜」の厳しさと試練をあまりにも無慈悲に味わった際、多くの志願者のように挫折するかわりに、神秘的超自然性、自然の霊的部分に直観の目を開きつつあった。その領域にはこの偉大な宇宙創造の天使王トラロック、エヘカトル、ウエウエテオトル等が住んでいる。

14　手本とすべき彼の生涯を通して「哲学者である音楽家」を見ていただきたい。仕事台の上で自分の聖なる母「クンダリニー」、言語に絶する「ネイト」、「アナワク」の「トナンツィン」、エジプトの至高なる「イシス」をたえず心に留めている... 。

15　その偉大なマスターは、あの崇拝すべき像の台座に直筆の銘文を添えていたとずっと言われてきた。銘文には不可解にもこう書いてある。

> 「われはかつてありしもの、今あるもの、将来あるであろうもの。死すべき人間はわがベールを上げたことがない」。

16　聖なる母「トナンツィン」の即座の助けがなければ、内心の革命的進歩は不可能となる。

17　恩義を感じている子はみな「母」を愛すべきである。ベートーベンは「母」をこよなく愛していた... 。

18　睡眠時間に肉体の外で、霊は聖なる母と会話できる。しかし夢見ヨガの行法から始めるべきなのは明らかである... 。

19　寝室に注意を払う必要がある。装飾は感じがよいべきである。目指す目的に最適の色は ── 他の著者たちが何を勧めようと ── まさしく三原色の青、黄、赤である... 。

20　疑いもなく、三原色は三つの原初の自然力（聖「トリアマシカンノ」）に常に対応する。聖なる肯定、聖なる否定、聖なる和解... 。

21　この偉大な創造の三つの根源的力が肯定的、否定的、中性的な仕方で常に結晶するのは思い出すまでもない... 。

22　聖「トリアマシカンノ」の「原因(カウサ)の原因(カウソールム)」は能動的要素「オキダノック」の中に隠れているが、この要素自体、聖絶対太陽から放たれたものにすぎない... 。

23　明らかに、これらの理由をあますところなく述べた後に三原色を拒否するのは、単純

な論理的推定によって的違い、見当違いも同然である... 。.

24　夢見ヨガは並はずれていて、すばらしい驚くべきものであるが、厳しい要求を多くするのが常である... 。

25　寝室にはいつもじゅうぶんに香をくゆらせ換気すべきであるが、夜の冷気は入れすぎない... 。

26　自分自身と寝室を詳しくチェックした後、寝床を調べるべきである... 。

27　磁石を観察すれば、針がつねに北を示すことは自分で確かめられるであろう... 。

28　南から北につねに流れる地球の磁力の流れを意識的に利用できるのは、疑問の余地がない... 。

29　ベッドの頭板や枕元がつねに北になるよう寝床の向きを定めよう。そのようにして針の指し示す磁力の流れを賢明に利用できるであろう。

30　マットレスは極端に固くても軟らかすぎてもいけない。つまり眠っている人の心理過程に決して影響をおよぼさない程度の弾力性がないといけない... 。

31　眠っている人が少しでも体を動かすと、キーキーきしむようなうるさいスプリングやベッドの頭板は、このプラクティスの重大な障害となる。

32　暗闇の中でも容易に見つけられるよう枕の下にノートまたは日記と鉛筆を置く... 。

33　シーツは真新しく、きわめて清潔でないといけないし、枕カバーにはお気に入りの香りをしみ込ませるべきである... 。

34　以上の必要条件をすべて満たした後、ノスティック行者はこの秘教的行法の第二段階に進む... 。

35　寝床に入って明かりを消したら、「背面臥位(がい)」つまり仰向けになり、目は閉じ、両手は太陽神経叢の上に置く... 。

36　しばらくの間じっとして、心身とも完全にリラックスしたら、眠りと夢の神「モルペウス」に集中する... 。

37　疑いもなく、我々の真の本質的存在から分離した部分のひとつひとつは特定の機能を果たすが、眠りの神秘で教育を担当するのはまさしく「モルペウス」（オルフェウスと混

同しないように）である... 。

38　本質的存在の見取り図を描くのはまったく不可能であろうが、我々の普通の存在から分離して霊化した部分はみな、その機能が絶対的に完全になることを望む... 。

39　「モルペウス」に集中するとき、我々の与える華やかな機会にこの神は喜ぶ... 。

40　信仰心を抱いて、嘆願のしかたを知ることは緊急に必要である。超感覚的世界で我々を教育して目覚めさせてくれるよう、我々は「モルペウス」に求めるべきである... 。

41　この段階になってノスティック秘教家はきわめて特別な眠気に襲われだすが、そのときライオンの横たえるポーズをとる... 。

42　「右側を下にして横になり、頭は北に向け、ひざが曲がったままになるまでゆっくりと両脚を引きつける。この姿勢で左脚を右脚の上にのせる。それから右のほおを右手のてのひらの上にのせ、左腕を左脚の上にのせる... 」。

43　通常の眠りから覚めたら体を動かしてはいけない。なぜなら当然その動きで我々の「価値」が揺れ動いて、記憶を失うからである... 。

44　そんなひととき回想エクササイズが必要になるのは疑いないが、そのとき夢をひとつ残らずきわめて正確に思い出したいと願う... 。

45　ノスティックはこの目的のため枕の下に置いたノートや日記に、夢を大変注意深くつぶさに書き留めるべきである... 。

46　そのようにして夢見ヨガにおける内的進歩を詳しく記録できるであろう... 。

47　夢のぼんやりとした断片のみが記憶に残っていたとしても、注意深く書き留めるべきである... 。

48　何も覚えていないときは、目が覚めたちょうどその時浮かんだ最初の考えをもとに、回想エクササイズを始めるべきである。明らかにその考えは、最後に見た夢と密接に関係している... 。

49　おごそかに説明する必要があるが、〔目の覚めた〕不寝番状態にすっかりもどってしまわないうちに回想エクササイズを始める。そのときはまだ眠い状態にあり、一連の夢を意識的にたどろうとする... 。

50　回想エクササイズは、不寝番状態にもどる前のひとときに浮かんだ最後のイメージか

らいつも始める... 。

51　本章を終えるにあたりおごそかに言っておくが、夢体験の完全な記憶を持たないかぎり、夢見ヨガの行法に関するこの部分を卒業することはできない。

Fig. 26

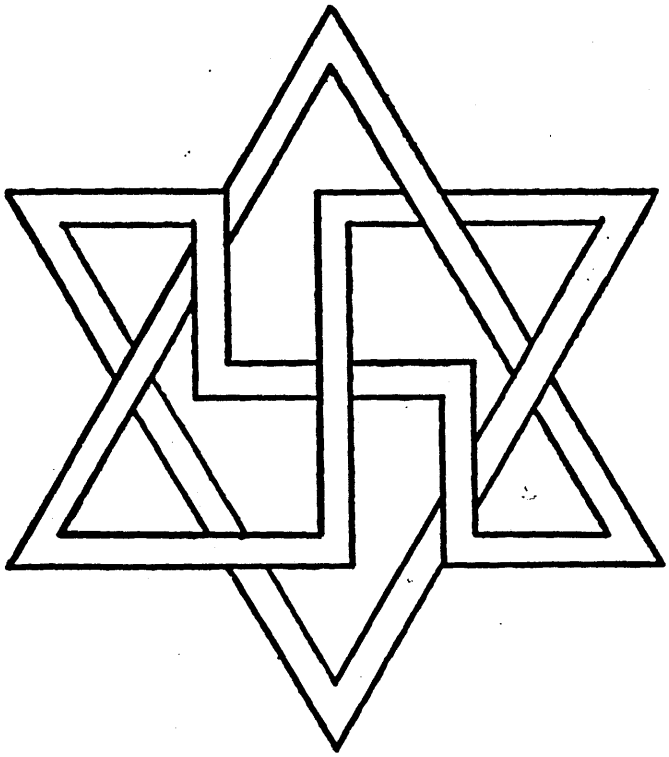


Fig. 27

SVASTICA TEOTIHUACANA. Símbolo pedagógico que muestra a la Substancia del Ser, en regeneración. El aspecto de la Creación. Fue conocida del Budismo milenario.

テオティワカン・スワスティカ。再生する本質的存在の実質を表す教育上のシンボル。創造の一面。至福千年〔要検討 millenary〕の仏教で知られていた。

第１８章
タントリックな夢

1　疑いもなく、夢の記憶が徐々に進歩しつつあることを自分で確かめるため、月に一度ざっとノートや日記に目を通すことが緊急に必要である... 。

2　忘れる可能性はなくすべきである。完全な記憶がよみがえらない限り、次のプラクティスを続けるべきではない... 。

3　別の時代から生じるように見える夢とか、夢を見る人が起きているときの生活とは無関係の雰囲気や環境の中で繰り広げられる夢はとりわけ興味深い... 。

4　「知覚を研ぎすまして警戒」し、「目新しいこと、変わったことに注意」し、特別の事柄、会話、会合、神殿、他人とかかわる異常な活動等を含む詳細の研究に特別の注意を払わなければならない... 。

5　夢の記憶をすっかり開発して、忘れる可能性がもうなくなったら、象徴化の過程が啓示の道を切り開いてくれるであろう... 。

6　夢解釈学の基礎を哲学的類推の法則、対立物の類推の法則、照応の法則、数霊術の法則に求めるべきである... 。

7　想像力の魔鏡に映ったアストラル・イメージは、決して文字通り解釈してはならない。なぜならそれらはただ単に原型観念の象徴的表現にすぎず、数学者が代数記号を用いるのと同じしかたで用いるべきだからである... 。

8　そういった観念が純粋な魂の世界から降りてくるのは言うまでもない... 。

9　明らかに、本質的存在から降りてくる原型観念は不思議なしかたで生じて、機械のあるセンターの心理状態、心の奥底の秘教的事柄、起こりうる成功や危険等を我々に知らせ、象徴主義の衣を常にまとっている... 。

10　「本質的存在と対面する論理的瞑想」によってはじめて、本質的な観念を引き出すため、何らかのアストラル象徴や光景や像を開くことができる... 。

11　「夢見ヨガ」行法のこの段階に到達すると、問題のタントリックな面に立ち入ることが不可欠となる... 。

12　古代智恵の教えによれば、「トナンツィン」（デビ「クンダリニー」）、我々個人の宇宙の聖なる母（なぜなら各人には自分自身の聖なる母がいるので）はいっさいの形態の

Fig. 28

起源なので、いかなる姿形にもなれるという。それゆえノスティックは眠る前、聖なる母を瞑想するとよい... 。

13　志願者は厚い信仰心を抱いて次の祈りを繰り返しながら、毎日睡眠過程に入るべきである。「『トナンツィン』、『テテオイナン』、おー、わが母よ、わがもとに来たれ、わがもとに来たれ」。

14　タントラの科学によれば、もしノスティックがこのプラクティスに固執するなら、いずれそのうち夢の千変万化、無定形の表現の中からイニシエイター・エレメント（夢の引き金となる要素）がひとつ、魔法のようにきっと生じるであろう... 。

15　そのイニシエイター・エレメントと完全に一体化しないかぎり、夢をノートや日記に書きとめ続ける必要がある... 。

16　記録したひとつひとつの夢を深く研究分析するのは、タントリックな夢見の秘教的行法では後回しにできない... 。

17　疑いもなく、教訓的進歩によって夢のイニシエイター・エレメント、統合要素を発見するにいたるであろう... 。

18　確かに、タントラ行法のこの段階に到達するまじめなノスティックは、それゆえ次章のテーマである次の段階に進む準備ができている。

第１９章
帰還プラクティス

1　志願者が夢の秘教と関係する全エクササイズを首尾よく行ったとき、「帰還プラクティス」Practice of the Return の心の準備ができているのは明らかである。

2　夢の千変万化、無定形の表現の中から魔法のように生じるイニシエイター・エレメントについて前章で語った... 。

3　きわめて心霊能力のある、洗練された、感受性の強いある人たちは、いつも自分自身にイニシエイター・エレメントを有してきた... 。

4　そのような人たちは同じ夢を何度もくり返し見るという特徴がある。それらの霊能力者は定期的になんらかの場面を追体験したり、夢体験で何度も創造物や象徴をあれこれ見たりする... 。

5　通常の眠りから覚めるときイニシエイター・エレメント ― 象徴、音、色、人等であれ ― を思い出すたびに、志願者はまだ目を閉じたままなじみのキーイメージを視覚化しつづけ、それから再び同じ夢を継続したまま意図的に眠ろうとする... 。

6　換言すると志願者は自分自身の夢を自覚しようとし、それゆえ同じ夢を意図的に継続するが、はっきりした意識で自制したまま不寝番状態にその夢を持っていこうとする...。

7　そのようにして夢の傍観者、登場人物になる。アストラル界で自由に行動するため、好きなように場面を捨てられるという確かに馬鹿にできない強みがそこにはある... 。

8　そのとき肉体の外で、肉のいっさいの足かせから解放された志願者は、見慣れた古くからの環境から逃れて、異なった法則の支配する宇宙に入りこむ... 。

9　仏教タントリストの夢見の行法は教訓的に意識覚醒へと導いてくれる... 。

10　ノスティックは夢を理解し崩壊させることによって初めて、正覚の真の境地に目覚めることができる... 。

11　インドの聖典には、全世界は「ブラフマ」の夢だと厳かに書いてある... 。

12　この仮定から出発して次のように声高に断言しよう。「ブラフマが目覚めるとき夢は終わる... 」。

13　夢そのものだけでなく、夢を引き起こす心理的原動力をも志願者がまだ根本的に解消

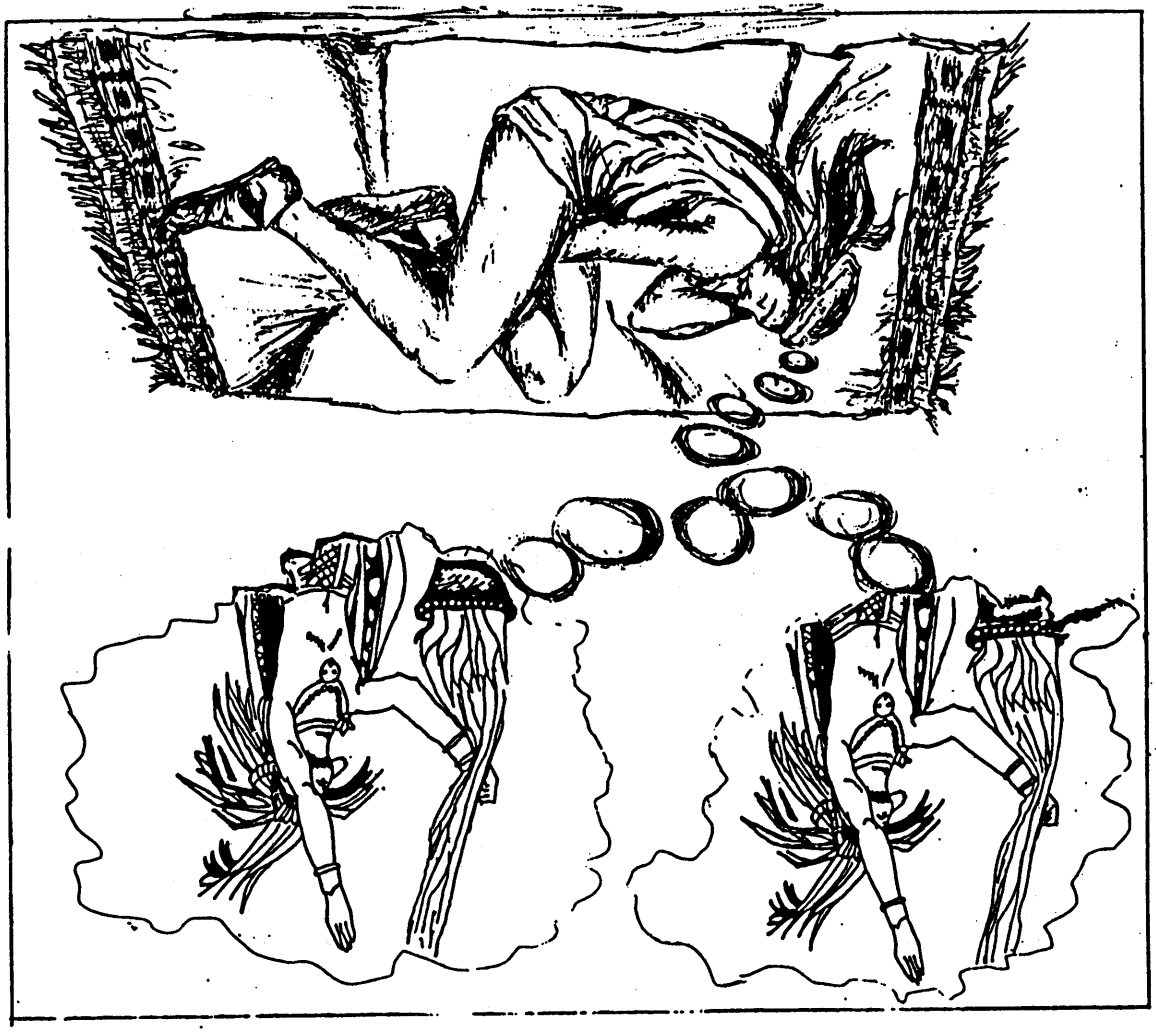


Fig. 29

していないなら、絶対的な覚醒はまったく不可能であろう... 。

14　決定的な意識覚醒は、根本的な変化によってようやく可能となる... 。

15　クリスティックな四つの福音書は、目覚める必要性を力説する。あいにく人々はあいかわらず眠っている... 。

16　「メキシコのクリスト、ケツァルコアトル」。確かに彼は百パーセント覚醒した人間であった... 。

17　ケツァルコアトルの役割が様々なことから、その崇拝がきわめて古いこと、および深い尊敬の念をもって中央アメリカ全土で仰がれていたことも大変はっきりとわかる... 。

18　「アナワク」の聖なる神々は、言葉の最も完璧な意味で完全な人間である。絶対的に覚醒した人間。夢を見る可能性をことごとく心理から一掃した存在... 。

19　「生じさせる（発芽させる）者」、雨と稲妻の神「トラロック」。一柱の神でありながら覚醒した一人の人間でもあり、心理から夢だけでなく、夢を見る可能性もことごとく取り除かねばならなかった... 。

20　大昔のオルメカ文化の主要な聖者であり、ジャガーと蛇の仮面をつけ、まさかりを持ち、いろいろなひすいの姿でいつも現れる... 。

21　夜と昼のなまなましい表現である火の創造物「テスカトリポカ」と「ウィチロポチトリ」。彼らもまた覚醒した人間、なんとか夢を超越するにいたった存在である... 。

22　肉体の外で、覚醒した人間はアステカ人、マヤ人、サポテカ人、トルテカ人等の聖なる神々を召喚できる... 。

23　ブルボン写本、ボルジア写本等に登場する神々は、覚醒した人間の呼び出しを聞きつけてやって来る... 。

＊ボルジア写本…1991年６月27日発行『ノーシス秘教用語辞典』11頁参照。

24　聖なる神々の助けを借りて、覚醒した人間は「アナワク」の秘密の教義をアストラルライトの中で研究できる... 。

第２０章
四つの至福

1　前章で夢のイニシエイター・エレメントについていろいろと語ったが、明らかに、今我々に残されたのはその活用法を覚えることだけである... 。

2　ノスティックが夢を「記録」していたら、いつもくり返す夢を発見するのは疑いない。中でもこの夢がノートや日記に夢を全部書きとめる十二分の理由なのは確かである... 。

3　疑いもなく、いつもくり返す夢体験は、賢明に活用すれば意識覚醒へと導いてくれるイニシエイター・エレメントである... 。

4　神秘家が寝床に横になり、イニシエイター・エレメントを瞑想しながら意図的にうとうとするたびに、結果がほどなく出る。ふつう隠者はそんな夢を意識的に追体験し、超感覚的世界をトリップするため意のままにその場面から離れることができる... 。

5　他のどんな夢でもそういう目的のために活用できるが、そのとき実際にテクニックを認める... 。

6　夢から覚める者は、望むのであれば意図的にその夢を見つづけることができる。この場合、想像力で夢体験をよみがえらせながら再び眠らねばならない... 。

7　自分が想像していると想像するという問題ではない。肝心なのは先のなまの現実感をすべて伴ったまま夢をよみがえらせることである... 。

8　夢を意図的にくり返すことが意識覚醒に向けての第一ステップである。ドラマのまっさいちゅう意のままに夢から離れるのが第二ステップである... 。

9　第一ステップに進む志願者も中にはいるが、彼らには第二ステップに進む力が欠けている... 。

10　そういう人は瞑想のテクニックによって自分で活路を開けるし、またそうすべきである... 。

11　きわめて重大な決断をして、それらの帰依者は眠りに引きこまれる前に瞑想を実践しなさい... 。

12　深い内的瞑想における集中と明らかな内省という課題、それがこの場合彼らの内に秘めた問題であろう... 。

13　このプラクティスの間、苦しみもだえる神秘家は、心から真剣に聖なる母「トナンツィン」（「デビ・クンダリニー」）に祈る... 。

14　苦悩の涙を流し、ノスティック行者は自分の陥っている無意識状態を嘆き悲しみ、母に援助を求め、どんな夢でも意のままに振り払う内心の力を請う... 。

15　タントリックな夢見のこの全行法の目指す目的は、夢体験に現れる四つの至福をはっきりと認識する準備を弟子にさせることにある... 。

16　限りない忍耐と内心のとてつもない超努力を要するので、この秘教的行法は確かに、きわめて真剣な人のためだけのものである... 。

17　東洋では「夢の四つの光」について多くのことが言われてきたが、我々はこの問題を研究すべきである。

18　第一の光は「啓示の光」と呼ばれ、命の書に金字で書いてあり、夢を見ている時間のすぐ前かその最中に知覚する。

19　あまり大げさに言うまでもないが、夢がますます深まるにつれて、残存印象と識別する思考のいつもの流れとの好ましくない混ざり物は、幸いにもゆっくり消えてゆく... 。

20　夢のこの段階では第二の光明がじょじょに芽ばえるが、アジアでは「増大する光」という不思議な名前で知られる。

21　疑いもなくノスティック行者は、タントリックな夢見の驚くべき行法によってこの段階をはるかに越えてゆき、ついには残り二つの光を完全にとらえる... 。

22　高次の宇宙意識界で実際の生命のなまの現実をはっきりと生活体験することは、第三の光、「瞬時の実現」の光に到達したことを意味する。

23　第四の光は「内なる深い光明（正覚）」の光であり、神秘体験のまっさいちゅうに魔法のように出現する... 。

24　「ここ空（くう）の第四段階にはクリヤー・ライト（明るく輝く光）、母の子が住む。」とチベットの一専門書に述べられている。

25　率直に単刀直入に言って、私は以下のように表明する。タントリックな夢見の行法は、実際、死と呼ばれるその最後の夢の秘教的準備なのである... 。

26　夜間、何度も死んで、夢体験に生じる四つの至福を意識的にとらえたスティック隠者

は、体外離脱した瞬間、夢の世界に自発的に入りこむのと同じくらい容易に「死後の状態」に移る... 。

27　肉体の外で、意識を持つノスティックは、死後の霊を待ちうける運命を自分の力で確かめられる... 。

28　もし毎晩、夢見のタントラ行法によって秘教家は意識的に死んで、死者の世界に入りこめるなら、もちろんそのため司式者が到来する間に生死の儀式も研究できる... 。

29　ヘルメスは地獄界を訪れ、地獄に落ちた霊たちの運命を見て震えあがった後、ただごとではない物事を知った... 。

30　「そちら側を見なさい ― オシリスはヘルメスに言う ― 月の層に舞いあがろうとするあの霊の群れが見えるか。嵐に襲われた鳥たちが渦巻くように、大地に退けられる霊がいるかと思えば、ばたばたと羽ばたいて高次の領域に到達し、旋回しながら引きこまれる霊もいる。いったんそこに到達すると、神聖な物事を見る視力を取りもどす」。

31　雨の神「トラロック」に選ばれた者を埋葬する際、アステカ人は枯れた枝を一本置いていた... 。

32　至福を得た人たちが「極楽浄土トラロカン」にたどり着くと、枯れた枝は再び青々となると言われていたが、それは新たな生への帰還、回帰を示す... 。

33　太陽や「トラロック」に選ばれなかった者は必然的に、北にある「ミクトラン」に行く。その地方で霊は「地獄界」を通りすぎるときに一連の魔術的試練を受ける。

34　決定的な平安を得る前、霊がひどく苦しむ場所は九つある... 。

35　ダンテ・アリギエリの『神曲』に出てくる「地獄の九圏」が、このことからまざまざと思いだされる... 。

36　アステカの地獄のダンテの九圏に住む男神と女神は大勢いる... 。

37　第九圏つまり地下最深部の住人である「地獄の男神と女神」、恐ろしい「ミクトランテクトリ」と闇の「ミクテカシワトル」を〔この『クリスマス・メッセージ　1974－75』で〕思いだすまでもない... 。

38　「アステカの地獄」の試練を通る霊は後に、「第二の死」後、幸せにも自然のエレメンタルの楽園に入る... 。

39　疑いもなく、死後「地獄界」に降りず、「黄金の光の王国」にも「トラロックの楽園」にも「永遠なる集中の王国」等にも昇天しない霊は、遅かれ早かれ新たな肉体にもどり、回帰する... 。

40　太陽や「トラロック」に選ばれた霊は、「輪廻（サンサーラ）」の谷にもどる前、高次界でおおいに楽しむ... 。

41　ノスティック隠者は「夢の四つの光」をとらえた後、意識的に毎晩「トラロカン」を訪れたり、「ミクトラン」に降りたり、この世にもどってくる前に月の層に住む霊と接触したりできる... 。

＊『クリスマス・メッセージ』は1952年から毎年１冊ずつ刊行されましたが、現在確認できる日本にある『クリスマス・メッセージ』（スペイン語版）は以下の通り。

『クリスマス・メッセージ　1961－62』（『総括のドクトリン』）
『クリスマス・メッセージ　1964－65』　46頁
『クリスマス・メッセージ　1965－66』　127頁
『クリスマス・メッセージ　1966－67』（『仏陀の首飾り』）
『クリスマス・メッセージ　1969－70』　224頁
『クリスマス・メッセージ　1970－71』（『ベールを脱いだパルシファル』207頁）
『クリスマス・メッセージ　1971－72』（『黄金華の神秘』）
『クリスマス・メッセージ　1972－73』（『三つの山』）
『クリスマス・メッセージ　1973－74』（『そう地獄は存在する、そう悪魔は存在する、そうカルマは存在する』）
『クリスマス・メッセージ　1974－75』（『アナワクの秘密の教義』148頁）

ちなみに『クリスマス・メッセージ　1968－69』は『ルーン魔術秘教コース』のことですが、当訳者の知るかぎり日本にはありません。

第２１章
守護天使

1　あらゆる偉大なイニシエイトの最初の教師は、実際、独自の権限で、真の共通の存在の霊化した部分すべての根本的原因になる ― この言葉で本書の最終章を始めよう... 。

2　感謝しているいかなるグルも、自分の真の本質的存在を最初に創造した者の前につつしんでひざまずく... 。

3　数々の意識的ワークと自発的苦しみの後、我々の共通の存在から分かれて霊化した部分すべての機能が、絶対的に完全になったことが涙ぐんだ目の前で明らかになるとき、最初の教師に対する本質的存在の感謝のインパルスが我々に生じる... 。

4　疑いもなく、本質的存在から分かれた各部分すべての絶対的完全性は、今ここで根本的に自分自身に死んで初めて可能となる... 。

5　「内心の自己実現」にはいろいろな段階がある。イニシエイトの中には本質的存在から分かれたある部分をいくつか完全にした者もいるが、全部を絶対的に完全にするまで、まだ大いに働かねばならない... 。

6　本質的存在の概略を述べることは決してできないであろう。本質的存在は無邪気な幼児 の軍隊に似ている... 。そのひとりひとりが特定の機能を行使する。全部の完全な統合・一体化はあらゆるイニシエイトの悲願である... 。

7　本質的存在の最高部分の「内心の自己実現」が達成するとき、それゆえ「イシュメシュ」ISHMESCH の位階を受ける。

8　われらの主「メキシコのクリスト」、「ケツァルコアトル」も、疑問の余地なく、本質的存在の最高部分を発達させた... 。

9　「ナワトル」のルシファー、「ショロトル」XOLOTL もまた我々自身の本質的存在から分離した別の部分だということを、ここで折よく思い出すことができる... 。

10　ウエウエテオトル、トラロック、エヘカトル、トラロックのグィネビアであるチャルチウトリクエ、花の女神ソチケツァル等のような自然のエレメンタルの神々は、正しい行いを条件にイニシエイトのエレメンタル魔術の作業を助けてくれる。

＊グィネビア…アーサー王の妃で、ランスロットの愛人。

11　しかし自然のエレメンタルの神々を召喚して〔別訳：に祈って invoke〕奇跡を行え

る、自分の中のエレメンタル魔術師、「エレメンタル・インターセッサー（仲介者）」を決して忘れてはならない... 。エレメンタル・インターセッサーが我々自身の本質的存在から分離したもう一つの部分なのは疑いない... 。

12　三柱の女神、と言っても実際は同じ神のいろいろな面にすぎず、我々の聖なる母（我々自身の本質的存在から生じたもの、形を変えたもの）を表現する。その三柱の女神とは「トナンツィン」、「コアトリクエ」、「トラソルテオトル」である... 。

13　我々自身の本質的存在から分かれた部分は数多くある。法のライオン、我々の善行と悪行を記録する二柱の守り神（ゾーニアイ）、カルマの警官（やはりこれも本質的存在の一部である）、慈悲深き者、情け深き者、聖なる父と母の一体化したもの、守護天使等を思い出すと驚く。

14　「守護天使」の炎のような力はすばらしく、驚異的で、ものすごく神聖である... 。

15　イニシアチックな（密儀伝授の）僧院に秘蔵されているまったくノスティックな資料は、大衆向けの普通のありふれた偽神秘主義と偽キリスト教とはずいぶん異なるが、そこから私は「守護天使」とは何かを実際に知った... 。

16　「ヒーナス」の歴史と生活というきわめて神秘的な分野に到達した我々は、メキシコのチャプルテペック神殿と第四垂直線の人々を発見したばかりか、驚くべきことに、それに関係する「守護天使」の力をも発見した... 。

17　「ヒーナス」の状態にある「アナワク」の神官たちを見て、プラド神父とベルナル・ディアス・デル・カスティージョは、ふたりとも面白がっていたことを決して忘れないほうがよい... 。

18　チョルーラから大神殿まで空中移動する際、隠者たちは心地よく浮かんでいた。これは毎日、日暮れ時に起こっていた... 。

19　ナイル川三角州のサイスの弟子も、ペルシャ高原のゾロアスターの信奉者も、バビロニアのベロ Belo の塔の観想者も、タントリックな夢見の行法をまじめに実践する者がいつも持っている視野ほど、厳かなそれを夜の散歩で持たなかった... 。

20　肉体の外で、意識あるノスティック隠者は望むなら、「守護天使」という名前で実際の秘教で定義される、自分自身の本質的存在から分かれたある部分を召喚できる。言語に絶する存在が、我々の呼び出しに応じてやって来るのは疑いないであろう... 。

21　透きとおった平静さ。かぎりない穏やかさ。物質と世俗とのきずなを断ち切る際に霊の味わうような天にも昇るほどの幸せ。あのうっとりするような一時に感じるのはそれだけである... 。

22　その他のことは、親愛なる読者はもう推理できる。「ローエングリン」のような魔術的奉仕をいつも受けられる... 。

＊ローエングリン…ワグナー作の歌劇。その主人公。パルシファルの息子で、聖杯を守護するドイツ伝説の神秘の騎士。

23　もしそんな恍惚とした一時、寝床に休んだまま眠っている肉体をそこから運び出して、目の前に持ってきてくれるよう「守護天使」に援助をこうなら、魔術現象が首尾よく起こるであろう... 。

24　守護天使に運ばれて肉体がもうやって来る途中だと予感するが、そのとき霊体つまりアストラル体の両肩に不思議な圧迫を感じる... 。

25　あけっぴろげで巧みな受容的態度をとるなら肉体は我々の中に入りこむであろう...。

26　意識あるノスティック・タントリストは肉体にもどるかわりに、肉体が自分のところにやって来るのを待ち、肉体で約束の地、第四垂直線でトリップする... 。

27　後に「守護天使」の援助をかりて、ノスティック行者は少しも危険を伴わずに自宅の寝床にもどる... 。

28　「神秘友愛結社」の尊敬すべきマスターは肉体で第四垂直線をトリップし、好きな場所で肉体を捨てられる。

29　「高等教団（オーダー）」の復活したマスターは船、飛行機、自動車等の現代の交通機関網といっさい縁を切る ── 確かに無視できないことだが ── そういうぜいたくを味わう余裕があることをこれは意味する... 。

30　古代、「真理を愛する者」フィララテアンズのあのアレクサンドリア学派の生きた真髄であった批判的・類推的、象徴的手順 ── それ自体に含まれる高いイニシアチックな価値によって、大勢のイニシエイトがカミソリの刃の道に向かうことができた。その四世紀の総合学院は、偉大な独学の折衷主義者「アンモニウス・サッカス」、およびプラトンの思想の継承者プロチノスがエジプト、メキシコ、ペルー、中国、チベット、ペルシャ、インド等の教義的基礎をもとに時代を通して設立したものである... 。

31　アンモニウス・サッカスの黄金の書『アンドロギリア』ANDROGILIA はとりわけ特筆に値する... 。

32　疑問の余地なく、現代の大勢の偽秘教家、偽神秘家のまちがいは自尊心に由来する。彼らは自分自身を愛する。心の貧しさと不幸と悲惨さの進化を望む... 。

33　彼らは存続を願う。決して完全無欠にも存続にも値しないものの完全無欠を心から望む... 。

34　主観的心理をもつそれらの人々は、自分は豊かで力にみち、悟っていると信じており、しかも「あの世」での立派な地位を渇望するが、実際は自分自身について何も知らない。哀れなことに自分自身の無力、無価値、恥知らず、不幸、心理的悲惨、裸の状態を知らないのである... 。

35　我々ノスティックはさらに良くなりたいとも、さらに悪くなりたいとも思わない。今ここで自分自身に死にたいと思うだけである... 。

36　悲願のより所として「進化の教義」を確立するとき、まちがった土台からスタートすることになる... 。

37　最終的解放にいたる岩だらけの道を歩む悔悟者の我々は、進化に興味がない。我々は不幸で惨めだと知っている... 。自分自身の進化は役立たないであろう。我々は至高の死を好む。死によって初めて新しいものが出現する... 。

38　どうして自分自身の不幸の進化・進歩のために戦わなければならないのか。それよりも死のほうがよい... 。

39　種子が死なないなら植物は生まれない。死が絶対的なら、生まれるはずのものも絶対的である... 。

40　「自我」の全滅。内面に巣くう最愛なものの根本的消滅。我々の最高の欲望、思考、感情、激情、恨み、苦しみ、情動、野心、憎しみ、愛、嫉妬、復讐、怒り、愛情、愛着、親愛感、色欲等の最終的崩壊。時間に属さない、いつも新しいもの、本質的存在の炎が生じるために、それは緊急に必要で後回しにできず、遅らせることはできない... 。

41　我々ひとりひとりが本質的存在について抱く考えは、決して本質的存在ではない。本質的存在について作りあげた知的概念は本質的存在ではない。本質的存在についての意見は本質的存在ではない... 。本質的存在は本質的存在であり、その存在理由はまさに本質的存在だからである... 。〔The Being is the Being and the reason of Being of the Being is Being itself.〕

42　絶対的な死への恐怖は根本的変化の達成の妨げ・障害であり、不都合である... 。

43　我々ひとりひとりの内部にはまちがった創造物が存在する。新しい創造物が実際に誕生するよう、まちがったものを破壊するのは不可欠である... 。

44　まちがったものの進化を促進しようとは決して努めないであろう。我々は絶対的な寂滅を好む... 。

45　奈落の暗く恐ろしい墓穴の中から、本質的存在の炎のようないろいろな部分が生じる。「守護天使」はそれら多くの分離した部分のひとつである... 。

46　神殿の密儀、バッカス、エレウシス、ピタゴラス密儀の驚くべき反映を本当に知っている者は、内面の悲惨さが続くのを決して望まないであろう... 。

47　最初の出発点にもどらねばならない。光が生まれて、我々の内に新しい創造物が生じるよう、「非存在」と「混沌」の原始の闇に帰らねばならない... 。

48　完全な寂滅を恐れるかわりに、祝福された母なる死神を愛し、その腕に抱かれるすべを知るほうがよい... 。

EL　FIN